# 塚山古墳群

昭和54年10月

栃木県教育委員会

# 目 次

片	
例	書
第1	章 発掘調査の概要1頁
1	発掘調査にいたる経過
2	発掘 調査の実施
3	調査日誌
第2	章 塚山古墳群の環境 6頁
1	地理的環境 6 頁
2	歷史的環境6頁
第3	章 遺 構
1	塚山古墳群について9頁
2	塚山古墳12頁
3	塚山西古墳12頁
4	塚山南古墳18頁
5	塚山古墳周辺の埴輪棺・・・・・・19頁
6	射撃場内埴輪棺21頁
7	遺構のまとめ23頁
第4	章 遺 物
1	土師器28頁
2	須恵器31頁
3	動物埴輪 33頁
4	器材埴輪34頁
5	鹿の刻線画のある円筒埴輪35頁
6	西古墳出土の円筒埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・36頁
7	南古墳出土の円筒埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
8	射撃場内出土の円筒埴輪・・・・・・・52頁
9	埴輪棺に使用された円筒埴輪62頁
10	参考資料の埴輪63頁
11	遺物のまとめ65頁

# 挿 図 目 次

第1図	塚山古墳群周辺の遺跡 7 頁
第2図	塚山古墳群周辺の地形9頁
第3図	遺構分布図
第4図	塚山西古墳実測図
第5図	発掘調査区実測図15頁
第6図	西古墳出土遺物実測図16頁
第7図	南古墳出土遺物実測図17頁
第8図	南古墳実測図
第9図	1号埴輪棺,2号埴輪棺実測図20頁
第10図	射撃場内埴輪棺実測図
第11図	雀宮牛塚古墳実測図及び西古墳復元図24頁
第12図	千ガ窪古墳実測図25頁
第13図	土師器出土地域実測図
第14図	土師器実測図
第15図	須恵器実測図32頁
第16図	動物埴輪実測図

本県では昭和55年に実施される「栃の葉国体」を成功させようと県内各市町村において, 会場の環境整備に最後の努力を払っているところであります。

そのメイン会場となる県営総合運動公園(宇都宮市西川田町)の南側に兵庫塚古墳として古くから知られている前方後円墳が3基所在していますが、そのうちの西古墳と南古墳の中間に都市計画道路の建設が進められたため県土木部と当委員会の間で古墳の保存について昭和46年以後協議を重ねてきた結果、道路はアンダー(地下道)とし、工事終了後墳丘の復元をはかる。当委員会としては、これらの古墳を昭和28年に県指定史跡に指定されている塚山古墳と同様、県指定史跡として永久保存することに努力するという点で両者の協議が成立したものであります。

その後の経過として両古墳は塚山西古墳及び塚山南古墳として昭和48年に県指定史跡に指定され、道路建設用地になる地域は昭和51年6月に記録保存のためと、工事後の復元のための資料を得ることを目的とした発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果,両古墳の周湟内から多量の埴輪片と須恵器及び土師器が出土し,また周辺からは埴輪棺が計6基発見されて,本県の中期古墳を知るための貴重な資料を得ることができ、大きな成果をあげることができました

今般,塚山古墳群として報告書を公刊する運びになりましたが,発掘調査及び報告書作成において御協力いただいた宇都宮市教育委員会,地元有志の方々,県土木部都市施設課に対し深く謝意を表する次第であります

最後に、本報告書は報告書として、はなはだ不十分なものでありますが、本県の古墳を 知る一資料として活用いただければ幸と存じます。

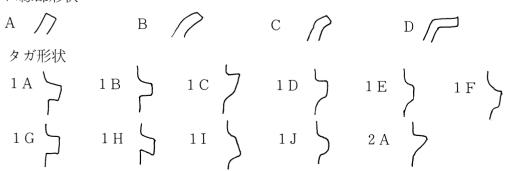
> 昭和54年10月 栃木県教育委員会 教育長 渡辺 幹雄

- 1. 本報告書は、栃木県教育委員会が、道路建設用地内に含まれることになった塚山西古墳及び塚山南古墳(宇都宮市西川田町所在)の発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査及び報告書作成に要した費用は全額、県土木部の負担である。
- 3.発掘調査は,常川秀夫(現宇都宮農業高校教諭),石川均,熊倉直子,が担当した。
- 4.整理作業は、遺構の図面作成は常川秀夫、遺物の石こう入れ、拓本、トレース等の図面作成は石川均の責任において熊倉直子、小林容子、横山正子、鈴木マサ子が行った。
- 5 . 本書の執筆は,遺構を常川秀夫,遺物のうち土師器を熊倉直子,須恵器を大金宣亮,埴輪を石川均が担当した。
- 6. 埴輪のうち鹿の刻線画のある円筒埴輪は塚山古墳の南周湟外の傾斜地出土の埴輪棺に使用されたものであり、今回出土した埴輪棺との関連性があることから所有者の山崎三郎氏のご好意により使用させていただいた。
- 7. 埴輪表の器高で残とあるものは現存高である。各部の寸法は左側より茎部、二段目、三段目、口縁部の順で示した。口縁部径、基部径、透孔の数値で( )は復元計を表わし単位は、全てcmである。
- 8. 報告書作成に際して多くの人々の御指導、御協力を受けた。御芳名を記し、謝意を表したい。

奈良国立文化財研究所の方々,川西宏幸,車崎正彦,作新学院教諭,山ノ井清人,鹿 沼市立図書館,横山正子,文化課文化財調査係,海老原郁雄,大金宣亮,橋本澄朗, 川原田典,熊倉直子,小林容子,鈴木マサ子(敬称略)

埴輪表の口縁部形状・タガ形状は「遺物のまとめ」の中の分類を記号で表わした。 (下図参照)

#### 口縁部形状



# 第1章 発掘調査の概要

## 1. 調査にいたる経過

宇都宮市周辺の都市計画道路のうち県営総合運動公園の南側に新しい道路を建設し国道 4号線と県道宇都宮一栃木線を結ぶ計画が立案されたのは昭和41年である。

計画路線は総合運動公園に南接して、県指定史跡である前方後円墳、塚山古墳(昭和28年指定)があるため、同古墳の南側、塚山西古墳、塚山南古墳の中間地点をとおり「栃の葉国体」のメイン道路に繋ぐ計画であった。

県土木部から文化財保護課(現文化課)に計画路線内にある遺跡の調査依頼があったのは昭和46年であった。このため文化財保護課では保管している航空写真を見ると、県土木部が円墳であろうと考えていた塚山西古墳は前方部が非常に低い帆立貝式の前方後円墳であることが馬蹄形状の周湟跡から歴然と判明したのである。

このため、文化財保護課では早急に塚山西古墳及び南古墳の墳丘測量を実施し、両古墳の周湟を含めた地域を現状保存すべく県土木部と協議を行ったのであるが、すでに古墳群の近くまで用地買収が終了した段階であり、古墳群を迂回するような路線変更は困難であるということであった。とすれば、古墳群の保存法は次の3つということになる。①古墳群の上を高架でとおす。この場合は橋脚の高さは2.5m、橋脚は周湟の外側に立てスパンの長さは80m以上必要となる。②西古墳の下をアンダー(トンネル)でとおす。この場合は古墳の下を約10m掘下げ地下道をつくり、その後西古墳の前方部を現状復元する。③道路敷内の部分を全面発掘調査し記録保存をしたうえ現状の地形を利用して道路を建設する。

以上3つの案が考えられ、県土木部側からすれば③の案がよいのであるが、文化財保護とすれば道路変更が不可能であれば、①ないし②の案で協議せざるをえないことになった。協議の結果は②のアンダーでとおす案で工事を実施する結論に達したのである。

ててで問題となるのは、道路建設側で塚山古墳群の保存について理解され、西古墳の下をアンダー工法でとおし原形に復元した数年後に宅地造成などにより破壊される心配があるということであった。このため、教育委員会では塚山古墳と同様、塚山西古墳及び塚山南古墳を県指定史跡とし積極的に永久保存にのりだし、将来は三基の前方後円墳を含めた地域を史跡公園的なものにする計画をもつことであった。

当委員会では塚山西古墳及び南古墳の土地所有者である細谷秀夫氏に古墳の保存についての事情を説明したところ、細谷秀夫氏から快い承諾が得られたため、当委員会の諮問機関である文化財調査委員会の審議、答申を経て昭和48年4月に塚山西古墳、塚山南古墳として正式に県指定史跡に指定されたのである。

その後、昭和50年6月の文化財調査委員会において、土木部都市施設課と当委員会文化 課を交えて協議をした結果、古墳にかかる道路の部分は工事前に全面発掘調査を実施し、 記録保存を行う。その後工事を実施し、工事完了後は再び元の地形に復元するということ が確認されている。(常川秀夫)

### 2 発掘調査の実施

調査は昭和51年度の予算で行い,発掘調査費用の全額を県土木部で負担することで計画が進められた。調査の実施は6月1日から30日間とした。次に発掘調査に参加してもらう作業員の確保が重要な課題となる。というのは,どこの発掘調査でも作業員の賃金が安いためスムーズに作業員が確保できることは,まずないといえるからである。

宇都宮市教育委員会を通じ同市の姿川公民館に協力依頼をしたところ、地元の西川田町の町会長三宅富雄氏を紹介されたのである。三宅富雄氏は快く承諾されたが、やはり地元の西川田町だけでは集まらず兵庫塚町を含め20名の作業員を集めてくれた労苦に感謝する次第である。

調査は予定通り6月1日より開始された。最初は道路敷の東側の縄文土器片の散布地の掘下げを行ったが、住居跡等の遺構は発見されなかった。次に本調査の中心である西古墳の前方部及び周湟調査に入ることになり、まず南東隅角部の周湟の掘下げを行った。地表下40cm~50cmの地点から円筒埴輪片が多量に出土しはじめ作業員の人達も興味をもちながら掘下げていった。

前方部前縁までは周湟幅は約6m,深さは最深で1.1mを測する。浅い部分は一輪車で 周湟内の埋土を周湟外に運び出す作業であるが、深くなるとベルトコンベアーを使用する ことになり、ベルトコンベアーの音とベルトの動く速さに左右されて人間が機械に動かさ れる感じを受け、チャップリンのモダンタイムスが思いだされた。

周湟幅は南西隅角部からクビレ部に向うに従い急激に広くなり、最大幅は16.5m に達する。しかも、将来西古墳の前方部を復元する資料を得るため周湟内を全面完掘するという条件がつけられているため、6月の炎天下ベルトコンベアーの騒音 に合わせて一輪車を押して、走りまわる作業が続き苦労させられたが調査の方は順調に進み、予定どおり7月9日に終了した。

その後、県営総合運動公園では旧射撃場を自動車駐車場にするため、射撃場の南側の土堤をブルドーザーにより崩す作業を行っていたが、昭和51年12月、基底面附近より多量の埴輪片が出土したのである。このため同公園の管理事務所は当委員会へ電話で通報し、工事をストップさせた。橋本澄朗文化課指導主事が現場に急行してみると、埴輪片が多量に散乱しているなかに、埴輪棺らしきものが数基確認できたので、さらに、工事を2日間中止し、緊急発掘調査を実施することになったのである。

調査担当者としては、常川秀夫が塚山西古墳の担当者であるため、湯津上村の小松原遺跡から急きょ現場に向うことになった。同公園管理事務所の方々の援助により調査した結果、2基の円墳と考えられる周湟内より埴輪棺が3基、周湟不明の地点から上半分消失している埴輪棺が1基確認され、さらに、周湟内より動物埴輪のうち水鳥埴輪の頭部~頚部の部分が2個体出土している。

その後,整理段階の接合の結果,器財埴輪である短甲をはじめ,多くの完形の円筒埴輪が出土したことになり,本報告書の重要な位置を占めるに至っている。

以下を今回の発掘調査体制を示すと、下記のとおりである。

#### 事務局

武井 宏文化課長

冨 祐次文化課長補佐(現博物館建設準備班学芸嘱託員)

池田進一文化課文化財調査係長 (現土木部住宅課住宅管理係長)

広瀬 晃文化課主事 (現土木部道路維持課)

#### 発掘調査担当

常川秀夫文化課主事兼指導主事(現県立宇都宮農業高校教諭)

石川 均文化課調查員

熊倉直子文化課調查員

# 3 調査日誌

- 6月1日(火) 朝8時30分現地集合。道路敷内に身の丈程の雑草が繁茂しているため、 雑草の刈払いを行う。刈払いの完了した地域に1辺4mの正方形のグリットを組むため杭打ちを行う。
- 6月2日(水) 道路敷の西側に残っている雑草の刈払いを行う。午後から塚山西古墳の 東側の傾斜地で以前より縄文時代後期の土器片が散布していた地域全面に わたり、幅2mのトレンチを2m間隔で入れて掘下げる。
- 6月3日(木) 縄文式土器片の散布地からは遺構を確認することができず調査を打切る。 道路の中心杭No.65の東側に幅約50cmの南北に走る溝が発見されたため掘下 げる。
- 6月4日(金) 溝を南に追っていくと発掘調査用のプレハブの下に入り込み,さらにプレハブの南の調査をすると白粘土が充填された1.9m×1mの隅丸長方形の掘込みが発見されたため精査することにする。
- 6月5日(土) 雨のため作業中止
- 6月7日(月) 土壙を掘下げた結果,埴輪片が出土し,さらにその下側に円筒埴輪が2 個口縁部を接合させて並べられており埴輪棺と判明。西古墳の部分に2m

四方の網をかけレベルにより標高測定を行う。

- 6月8日(火) 西古墳から南古墳の部分の耕作土の除去をし、西古墳の周湟確認を行う。 その後B区から周湟内の掘下げを行う。
- 6月9日(水) B区の掘下げ。地表下40cm附近から埴輪が多量に出土しはじめる。埴輪棺の実測,写真撮影を行う。
- 6月10日(木) B区の前方部前縁の周湟の掘下げを行う。
- 6月11日(金) 雨のため作業中止。
- 6月12日(土) B区の掘下げを行う。B区の西縁,前方部前縁の中央部から多量の埴輪 片が出土しているが,その下,周湟底中央部から土師器の高坏と壺が出土 し西古墳の時期決定の好資料と考えられる。
- 6月14日(月) C区の掘下げ開始。B区の清掃と写真撮影を行う。
- 6月15日(火) C区の掘下げ続行。B区の周湟及び遺物の平板測量を行なう。
- 6月16日 (水) C区の南西隅角部の掘下げ及び遺物の平板測量を行なう。B区の全域の標高測定を行なう。
- 6月17日(木) C区の掘下げ完了。C区を清掃し写真撮映を行なう。
- 6月18日(金) D区の掘下げ開始。C区全域の平板測量とA区~C区(前方部横断面)のセクションの実測を行なう。
- 6月19日(土) D区の掘下げ続行。
- 6月21日(月) D区の掘下げ続行。墳丘寄りの周湟内から多量に埴輪片が出土したため 出土地点のポイントを平板測量でおとす作業を行なう。
- 6月22日 (火) 雨のため中止。
- 6月23日(水) D区の掘下げ続行。クビレ部の墳丘裾部~周湟にかけて多量に埴輪片が 出土する。
- 6月24日(木) 雨のため中止。
- 6月25日(金) 雨のため中止。
- 6月26日(土) D区の掘下げ続行。クビレ部であり周湟幅が16.5m もあるため一輪車による埋土の除去に苦労する。
- 6月28日(月) D区の掘下げ続行。
- 6月29日(火) D区の最後の地域 (クビレ部~後円部) をベルトコンベアーを使用して 掘下げる。炎天下,額に汗して一輪車を押し,走り回るが作業は変らず。
- 6月30日(水) D区の後円部周湟の掘下げを行なう。
- 7月1日(木) D区の周湟内掘下げ作業は全て完了。清掃後写真撮影。
- 7月2日(金) 農道の東にあるE区の掘下げ作業を行なう。
- 7月3日(土) E区の掘下げ作業完了。D区の平板測量を行なう。

- 7月5日(月) 塚山南古墳の北側周湟の掘下げ作業を開始する。
- 7月6日 (火) 同周湟内の掘下げ作業完了。出土遺物の平板測量を行なう。
- 7月7日(水) 発掘調査区全域の清掃を行い、その後写真撮影を行なう。
- 7月8日(木) 器財等を整理し,延32日間に及ぶ発掘調査を終了する。

# 第2章 塚山古墳群の環境

# 1 地理的環境

本古墳群は宇都宮市の中心から南へ約6.5 kmの地点の宇都宮市西川田町東原1663番地に所在する。地形的に見ると,宇都宮市の北西部から石橋町~小山市まで続き関東ロームが厚く堆積する台地である宇都宮西部台地(宝木段丘面)上に立地することになる。この台地は東を南流する田川と西を南流する姿川とに挟まれた地域であり,本古墳群の所在する地点で台地の幅は約4 km,標高は90 mを測する。また本古墳群から田川までは東へ約2.5 km,姿川までは西へ約2.5 kmであり,両河川の中間地点に位置することになる。

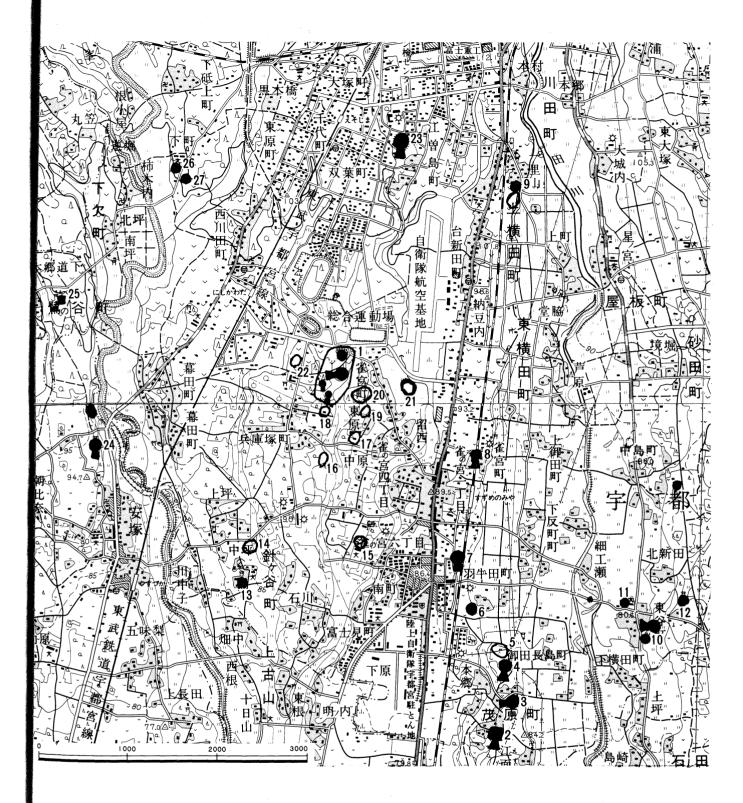
本古墳群周辺の微地形をみて,気ずくことは,宇都宮西部台地上を数条の小河川が南流しており,大きなものは自衛隊航空基地と総合運動公園の間を流れる西川田東谷田用水である。この河川は宇都宮の市街地の西部を流れる新川の末流であり,河川の狭い流域の低地は水田として利用されている。その東側を流れるのが総合運動公園内の池から流れる小河川であり,本古墳群の東~南に続く水田地域を形成している。この水田の最大幅は150mを測し,以前は兵庫塚沼と呼ばれていた地域と思われる。この沼は江戸時代までは常時水を湛えていたが,明治時代になり次第に沼は埋まり,明治時代末期に湿原化したといわれている。最近まで,その名残りと思われる声の類が見られたが,現在は全て埋立てられ新興住宅地化している。

本古墳群の西側は水田及び湿地となっている。本古墳群をとりまく地理的環境は総合運動公園から続く舌状台地の南端にあたり標高は90m前後。その周囲は標高86m~87mの低湿地であり、古墳時代に水田として利用した可能性も考えられる。

# 2 歴史的環境

宇都宮西部台地上には縄文時代から鎌倉時代までの多くの遺跡があり、特に多いのは台地の東端(田川の河岸段丘上)である。この段丘面上にある遺跡は下野薬師寺(国指定史跡)をはじめとして、集落、古墳、寺院跡などが連続的に続いている。このうち、本古墳群の近くに所在する遺跡について述べると次のようになる。

2, 愛宕塚古墳田川の 右岸段丘上に南面する前方後方墳である。全長48m, 前方部の幅は19m, 高さは1.6m, 後方部は南北(主軸長)27m, 東西22m, 高さ4.3mを測し,前方部の低い古墳である。昭和52年に久保哲三宇都宮大学助教授(当時)を主任とする発掘調査により,後方部の木棺直葬と考えられる主体部から小形仿製鏡,玉類,鉄鏃などが発見され,また,周溝内より底部穿孔の壺形土器が発見されている。



- 1. 塚山古墳群 2. 愛宕塚古墳 3. 大日塚古墳 4. 権現山古墳 5. 権現山北遺跡
- 6. 茂原多功神塚古墳 7. 雀宮牛塚 8. 綾女塚古墳 9. 大日塚古墳 10. 笹塚古墳(五領)
- 11. 双子塚古墳 12. 桜稲荷古墳 13. 八幡神社古墳(方墳) 14. 中坪遺跡(五領)
- 15. 雀宮中北遺跡(鬼高) 16. 兵庫塚遺跡(縄文中~後) 17. ブドウ園傍遺跡(縄文・奈良)
- 18. 下原遺跡(奈良) 19. 西原遺跡(縄文後·弥生後) 20. 二軒屋遺跡(縄文中·弥生後·土師)
- 21. 飛行場南遺跡(土師・古墳~鎌倉) 22. 旭マーケット前遺跡(縄文中・土師) 23. 雷電山古墳
- 24. 亀塚古墳 25. 鷺宮神社古墳(方墳) 26. 姿川中央小内古墳(円墳) 27. 姿川中央小南古墳(円墳)

第1図 塚山古墳群周辺の遺跡

- 3,大日塚古墳,西面する帆立貝式の前方後円墳で全長約35m,後円部径26m,高さ3.3m,前方部は高さ1.3mと低く,末発達の古墳である。西側にあった円墳からは銅鏃が発見されたことが知られている。
- 4, 権現山古墳 南面する前方後円墳で全長60m,後円部径40m,高さ5.6 m,前方部は幅21m,高さ3mを測する中期型の古墳である。
- 5,権現山北遺跡 昭和52年に宇都宮市教育委員会が主体者となり,発掘調査を実施した 結果,五領期,鬼高期,国分期の住居址が発見され,その中に塚山西古墳の前方部周湟底 部から出土した壺形土器と同形式と考えられる土師器が出土している点で注目される。
- 7, 雀宮牛塚古墳 南面する帆立貝式の前方後円墳であり、全長56.7m,後円部径39m,前方部幅17.7mを測したが現在は消滅している。明治10年の発掘の際、銅鏡、馬具類、短甲片、鈴釧、玉類などが出土しており、うち画文帯神獣鏡が熊本県江田船山古墳の出土鏡と同笵鏡であること、また墳丘形が塚山西古墳の平面プランと類以している点注目される。
- 8, 綾女塚古墳 南面する前方後円墳であったが、明治17年と大正元年の東北本線建設の ため墳丘の大部分は消滅したが、その際、正装した女子埴輪が出土したことで有名である。

田川と鬼怒川との間に挾まれた地域にも多くの遺跡が存在する。うち、最大級の古墳は 10 笹塚古墳である。西面する前方後円墳であり、全長約100 m、後円部径約63m、高さ 10.5m、前方部幅48m、高さ9mを測する中期の大形古墳であり、墳丘からは円筒埴輪片 が出土しており本古墳群出土の円筒埴輪との好比較資料である。

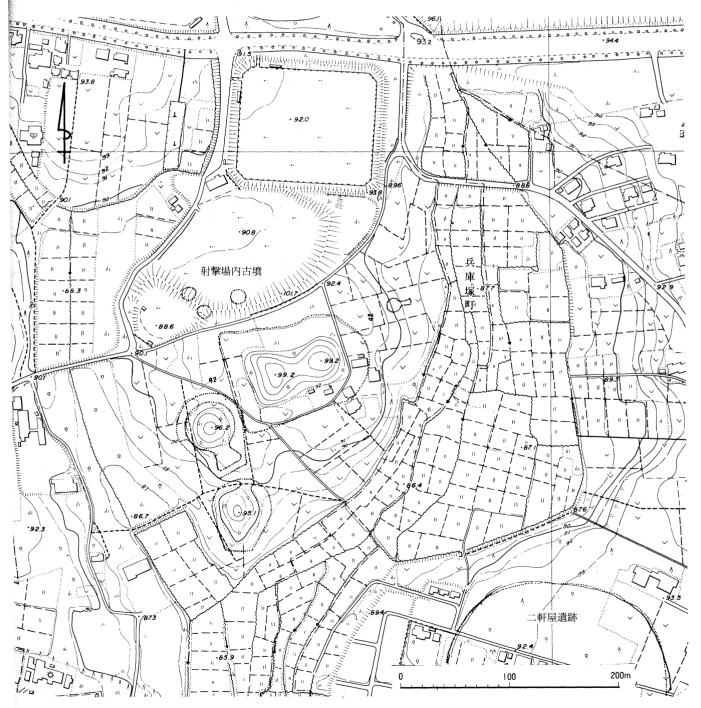
本古墳群の立地する宇都宮西部台地の中央部にも多くの遺跡が存在しており、本古墳群の周辺にも縄文時代~奈良時代の集落址が多く確認されている。そのうち**20**の二軒屋遺跡は縄文、弥生、土師の復合遺跡であるが、弥生時代後期の標式土器、二軒屋式土器の出土地として知られている遺跡である。

- 23 雷電山古墳 南面する前方後円墳であり、大正時代に多量の滑石製模造品(短甲、盾、剣、斧、鎌、勾玉、鏡、)などが出土したことで知られる古墳である。最近の公刊された 宇都宮市史によると、航空写真などを検討した結果、全長230 m、後円部径126 m、前方 部幅76mの前方部の開きの少ない柄鏡形の前方後円墳であるとされている。
- 註1 権現山北遺跡 宇都宮市教育委員会(昭54年)
- 註2 雀宮牛塚古墳 宇都宮市教育委員会(昭44年)

# 第3章 遺 構

# 1 塚山古墳群について

塚山古墳群とは、以前兵庫塚古墳群とよばれていたものである。兵庫とは、古代におけ る兵器及び食料の貯蔵庫が設置されていたことに由来する地名とされている。



第2図 塚山古墳群周辺の地形

この地域には江戸時代には兵庫塚村であり、宇都宮藩の戸田家の領地であった。その後、明治22年の町村制に基いて、近隣の9ヵ村が合併し姿川村となり兵庫塚は大字名として残り、さらに昭和33年4月に姿川村は宇都宮市に合併され、兵庫塚町として現在にいたっている。姿川村史の地名由来でも、昔兵庫某と称する豪族が住み、今尚残存する程の巨大な塚を設ける勢力家であったことから、いつとはなしに、その姓が村名になったとされている。

本古墳群が塚山となったのは、昭和28年11月に兵庫塚の主墳である前方後円墳が県指定 史跡に指定される際に、地元の人々が塚山と呼んでいるとの話しから史跡塚山古墳と正式 に命名されたものと思われる。その後昭和48年4月に2基の前方後円墳を県指定史跡に指 定する際に塚山西古墳、塚山南古墳となったものである。

| 姿川村史による兵庫塚の記述は次のとおりである。

兵庫塚1号墳(塚山南古墳) 前方後円墳で全長約35間,前方部の径約15間,後円部の径20間,高さは前方部3間,後円部は6間位である。前方部が南,後円部が北になっている。明治初年にこの塚を発掘し始めたところ,突然雷鳴が激しくなって,遂に発掘を中止したという。そして,その後に後円部の頂上に雷電社を祭祀したと伝えられる。

この古墳の南東は水田,西は以前沼地であったが今は湿地となっている。古墳とその附近は昔から美しい山林であったが,戦争中伐木開墾されて畑地となり,今は見るからに無残な殺風景な姿となった。

兵庫塚2号墳(塚山西古墳) 1号墳の北にある同様な前方後円墳である。以前森林が 繁していた頃は実に雄大な美観であったが,周囲はもより墳頂まで開墾されて,全くの赤 裸となり赤土を露呈している。戦後墳頂部だけ果樹類などが植樹された。全長径35間で前 方部が12間,後円部は23間,高さは前方部が3間,後円部が6間位である。この古墳を開 墾した当時封土の中から円筒埴輪が数個出土したが大部分破壌してしまった。

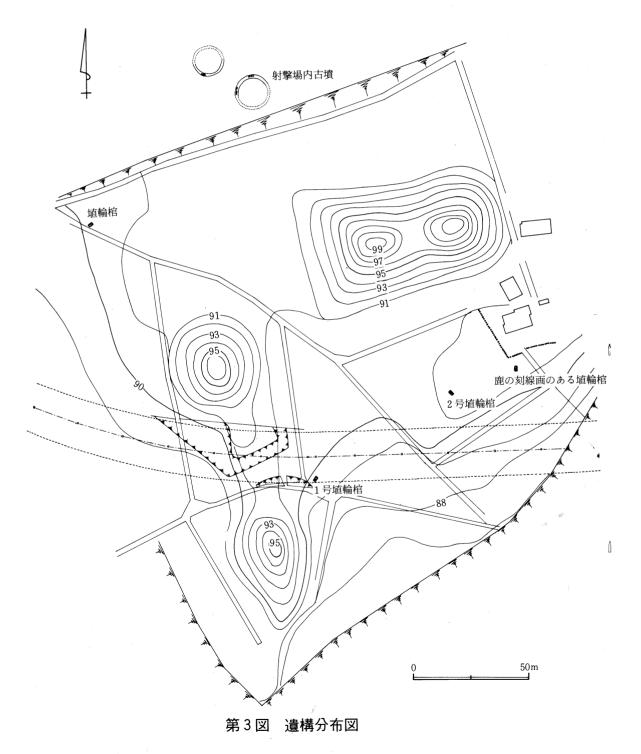
塚山古墳(兵庫塚3号墳) 前項古墳に近い東北方に大円墳2基が東と西に並列してあって、見た感じでは前方後円の一基の古墳のように見える。里人はこの塚を指して「きんたま塚」と呼んだ。この2つ続く塚は東西の径が56間、高さは東塚が6間半、西塚七間という巨大なものである。古墳全体は、まだ昔のままの雑木におおわれている。この塚は珍らしくも末発掘の古墳であるところから昭和28年11月県文化財保護委員会から指定を受けている。

以上が姿川村史の記述である。栃木県史(田代善吉著,昭和14年)では,次のように記述されている。

第54章 兵庫塚 河内郡姿川村大字兵庫塚にある。東北本線雀宮駅より約1里西北となる山林中にある。此附近に於ける大きな古墳にして有名である。わずか3~4間隔でて3個の古墳を有す,1つは前方後円墳にして,他の2つは円墳である。前方後円墳は長さ約25

間,周囲 120間と雄大なものである。高さは前方も後円部も略同様にて30尺である。他のものは2個とも円墳にして,高さ約15尺,周囲約80間である。本古墳を探らんとするには林道にして判り難きけれど,兵庫塚の部落の北端より右に曲って山林中を行く,又雀宮より北に向って前の反対の道をとるもよい。萱多く生じ,塚も隠る程繁茂している。

以上が姿川村史、栃木県史にみられる塚山古墳群の姿の変遷である。このことから、兵庫塚という地名は江戸時代以前から豪族の墓であることに由来し、村名として受け継がれてきたこと。また同古墳群の周囲は沼沢地であり、一段高い舌状台地から北部一帯は平地



-11-

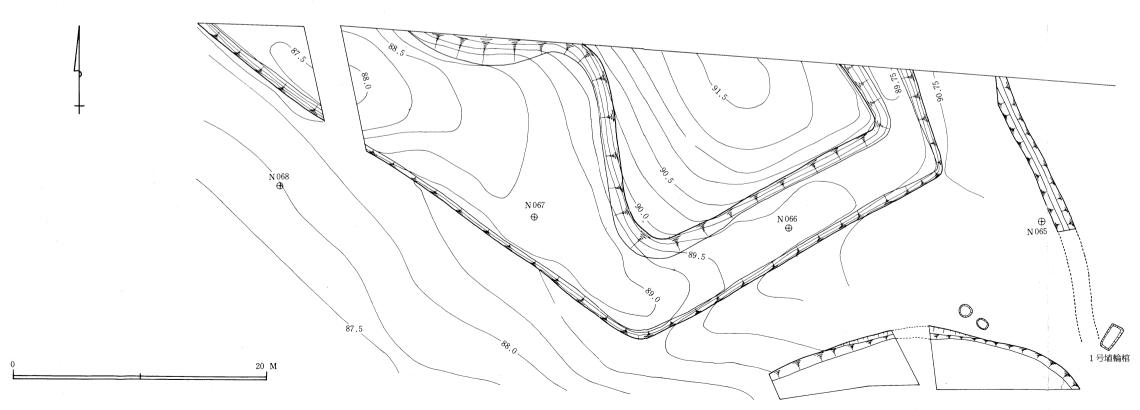
で100 mの範囲は一辺 2 mの正方形のメッシュを組み各地点の標高を図上におとす作業を実施した。その結果を示したものが第 5 図-1であるが,今回の報告書では 1 辺 2 mのメッシュでは図面が繁雑になるため 1 辺 4 mのメッシュの各地点の標高を図示した。道路用地内の標高をみると,前方部のL-1の地点が91.6 mで最高を示し,前方部の東側は90 m~91 mの平担面を有する。この地域が舌状台地の中央部である。この地域から東及び西に行くに従い低くなり沼沢地に続くことになる。西古墳は舌状台地の中央部より西側に寄って築造されているが,これは,塚山古墳が東に隣接してあるために制約されたものと思われる。

第5図-2は道路用地内の発掘調査の完了時における実測図である。東側は前方部隅角 部から東側縁部にかけて調査し、西側は前方部西側縁からクビレ部にかけて調査した。

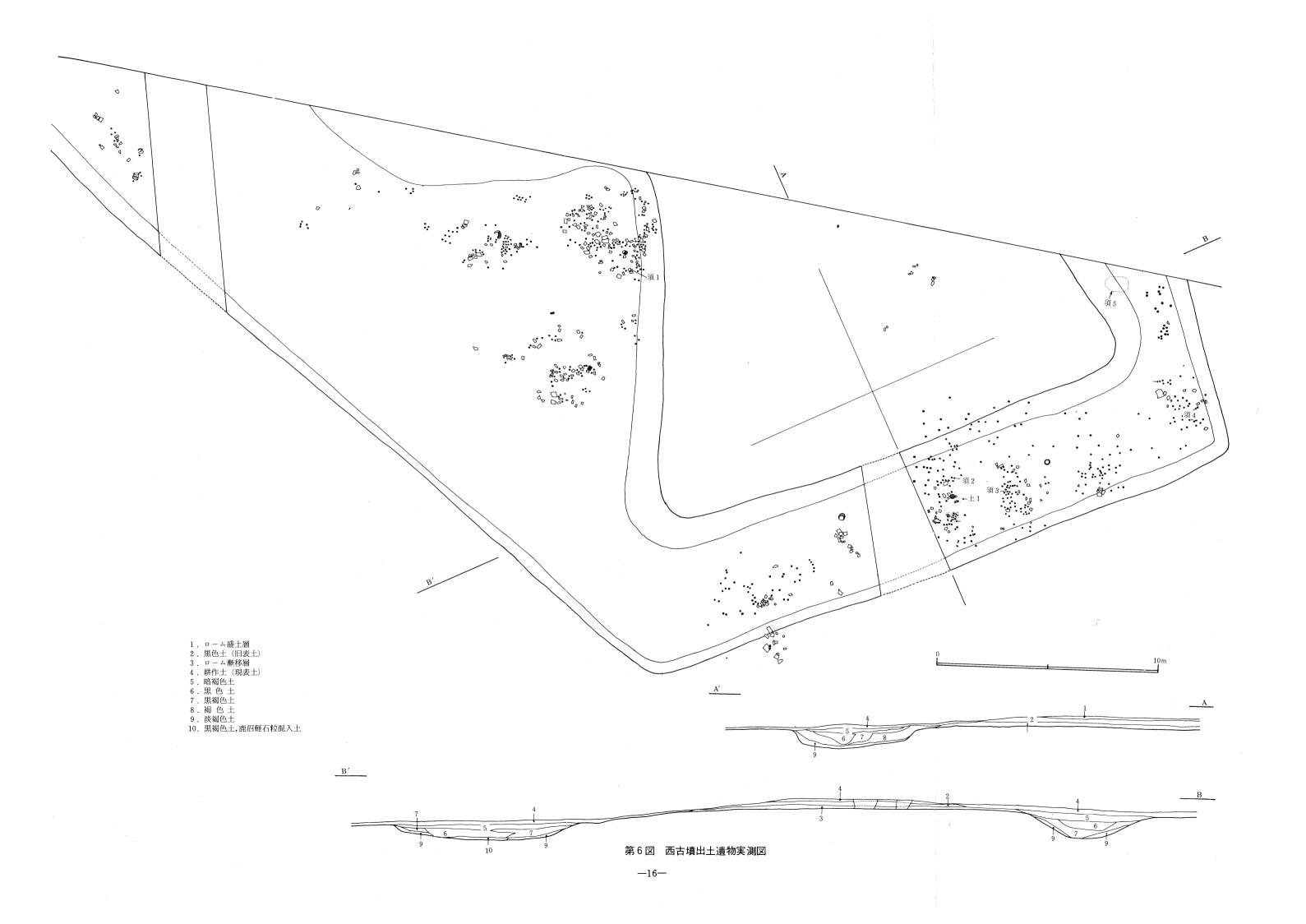
前方部前縁の幅は約 $20\,\mathrm{m}$  を測する。隅角部の形状は,東隅角部はそれ程の丸味をもたず,ほぼ $80^\circ$ の角度で前方部側縁へと続く。これに対し,西隅角部は大きな丸味をもち前方部前縁と側縁のなす角度は $70^\circ$ である。前方部の高さは東前方部側縁から計ると $60\,\mathrm{cm}$ ,西前方部側縁から計ると $1\,\mathrm{m}$ となる。前方部の盛土に伴う版築については第 $6\,\mathrm{図}$ の下にセクション図を示したが,主軸線上(A-A')のセクション図で見るとおり,ローム漸移層,旧表土の上にローム土の版築が厚さ $10\,\mathrm{cm}$ で一層だけ認められる。

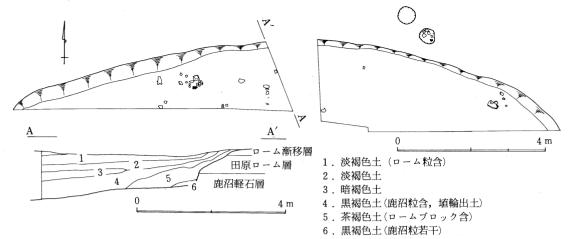
周湟は西側へ傾斜する地形上に立地しているため,東側のK-3の周湟底の標高は89.75 mを測するのに対し,西側に行くに従い徐々低くなり,西端のU-2の周湟底は87.75mと 2 m程低くなる。周湟の外縁形はN-8 の地点(前方部南西隅角部)からW-1 の地点まで一直線に伸びており,W-1 の地点から数 m先で後円部の円形の周湟外縁と交わるものと思われる。東側の周湟外縁もH-5 地点から北へ約10 m程直線で伸びているところまで調査を行った。以上のことから周湟の外縁形を推定すると第4図のとおり後円部の外縁径は約46 m  $\rho$  ビレ部北側付近からは直線で伸び前方部前縁の周湟外縁(幅約27.5 m)と交わる馬蹄形であると考えられる。しかし,東側の側縁部については直線で伸ばすと後円部の周湟幅がかなり狭くなるため第4図のとおり調査区と未調査区の推定線が屈折して交じわるように示した。東周湟外縁が西周湟と同様に直線で伸びるかどうかは,今後の調査待ちであるが,西へ傾斜する地形上に築造されていること,周湟外縁の隅角部の開きが西は115° であるに対し東は100° と異る点が留意される点である。

Y - 1 $X - 1$ 89.22				
Y-2 $X-2$ $W-2$ $V-2$ $U-2$ $T-2$ $S-2$ $R-2$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$				
Y = 3 $X = 3$ $W = 3$ $V =$		$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	G-3 $F-3$ $E-3$ $D-3$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
+ + + + + + + + + + + + + + + + + + +		91.60 91.36 $90.95$ 90.96 $1-4$ $1-4$ $1-4$ $1-4$	91.10 91.12 91.08 90.94 $ \begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	- $        -$
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	+ \ + \ + \ \ + \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	91.53 91.48 91.16 91.01 90.99	+ + + + + + + + + + 91.09 90.85	90.58 90.30 90.03
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	\ + \ + + \ \ +	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$ \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
V = 6 $V = 6$ $V =$	+ + + +	L-6 $+$ $91.0$ $+$ $90.92$ $+$ $90.92$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$ $+$	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	N 067  P-7 0-7 N-7 M-7	TI 7-N 066-K - 7 J - 7 H - 7	G-7 F-7 E-7 D-7 + -N 065.0†	$\begin{pmatrix} c_{-7} & b_{-7} & A_{-7} \\ + & + & + & + \\ + & + & + & + \\ & & & &$
$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$		90.38 90.60 90.73 90.75	90.71 90.85 90.77 90.66 G-8 F-8 E-8 D-8	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	+ \ + \ + \ + \ + \ + \ + \ + \ + \ + \	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	90.51 + + + + 90.47	90.16 89.85 89.52
88. 0 T-9 S-9 R- + + 89. 2	+ \ \ + \ \ + \ \ + \ \ + \ \ \ \ \ \ \	L-9 $K-9$ $J-9$ $I-9$ $H-9-9-90.00$ $90.05$ $90.12$ $90.16$ $90.14$	G-9-F-9-E-9-D-9-+ 90.12 + 90.22	$ \begin{array}{c ccccc} C-9 & B-9 & A-9 \\ + & + & + \\ 90.01 & 89.67 & 89.34 \end{array} $
3 R-+	+ \ + + + + + + + + + + + + + + + + + +	\ \ \ + \ \ + \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	C-10 B-10 A-10 + + + + + + + + + + + + + + + + + + +
88.	96 89.05 89.47 89.47 89.26 89.44	89.54 89.74 90.05 90.11 89.93		

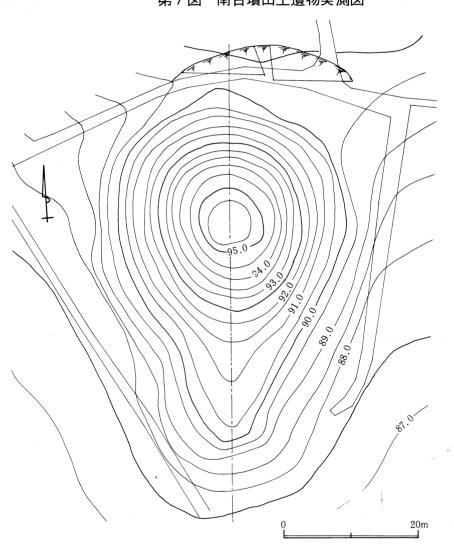


第5図 発掘調査区実測図(上 調査前の地形,下 調査後)





第7図 南古墳出土遺物実測図



第8図 南古墳実測図

られている。周湟外壁は隅角部からクビレ部にかけて全般的に浅く壁高は40cm~50cmを測する程度である。また、周湟外縁は直線で後円部に向って伸びるのに対して、前方部側縁は強い角度でクビレ部に向うため、クビレ部の周辺に広い周湟底をつくることになり周湟

幅は最大16.5mを測する。

遺物の出土状態 今回の塚山西墳の調査における出土遺物は大部分が円筒埴輪片であるが、その他の遺物として注目されたものは前方部前縁の中央部周湟底面より出土の土師器の高坏と壺と円筒埴輪片に伴って出土している須恵器の器台片である。

前方部の墳丘については地山であるローム層まで掘り下げたが埴輪列を立てるために掘られたピットは1穴も発見することはできなかった。周湟の外側についても同様1穴も発見されていない。このことについては、周湟内における多量の埴輪片の出土状態から考えて埴輪列に伴うピット列が存在しなかったとは考えられず、戦後の開墾、その後の耕作により削平されピット列は消失したと考えるのが適切であろう。

円筒埴輪片の出土状況は第6図のセクション図の6層(黒色土),7層(黒褐色土)からの出土であり、何れも周湟底より30cm~50cm浮いた状態で出土していること。また、埴輪片は墳丘から自然に転り落ちて横転しているという状態ではなく、人為的に割られ、そして、周湟内に投げ込まれたと考えざるをえない状態の出土であった。つまり、埴輪片は大部分が黒色土中に2重~3重になって出土しており、調査中に整理の段階で接合可能だと考えられるような同一個体が一箇所から出土することが、ほとんど認められなかったのである。

遺物の出土は墳丘内部及び前方部前縁の周湟外からも若干認められるが大部分は周湟内である。埴輪片の出土の多い地域は①前方部の南東隅角部の周湟外縁寄り。②前方部前縁の中央部周湟の全面。③西クビレ部周辺の墳丘寄りであった。須恵器については須1と須2は接合可能であり器台の口縁部(第15図1),須4,須5は器台の三角形の透しの部分,須6は同じく方形透しの部分である。

# 4 塚山南古墳

塚山西古墳の南に隣接し、舌状台地の南端に位置する帆立貝式の前方後円墳である。現 状は雑木と篠竹に被われ墳丘内に入ることも困難な状態である。墳頂部には前述したよう に雷電社の小さな大谷石の社跡があり、その脇に盗掘壙が1穴掘られている。

今回の調査では後円部の周湟の一部だけであったため古墳全体について述べることはできないが,第8図の墳丘実測から考えられることは次のとおりである。墳丘のコンターを見ると西古墳より間隔が密であることに気ずく。後円部の勾配は西古墳が $18.5^\circ$ であるのに対し,南古墳は $22^\circ$ を測する。また墳頂部の平坦面を見ると西古墳は $12m\times14m$ の平坦面を有するのに対し,南古墳は $6m\times6.5m$ の平坦面であり墳頂部に埋葬施設をもつには平坦面が狭い感じを受ける。

実測図から推定される墳丘の規模は全長は $55\,\mathrm{m}\sim60\,\mathrm{m}$ の間,後円部は直径が $35\,\mathrm{m}\sim40\,\mathrm{m}$ の間,高さは約 $6\,\mathrm{m}$ ,前方部の形状は推測しがたいが西古墳に類似したものであろうと思

われる。主軸の万向は $N-9^\circ-E$ であり $10^\circ$ 前後,前方部が西へ寄った方向であると推測される。

周湟調査は道路用地内の後円部周湟の一部であり、長さ37m,周湟幅は最大幅5.5mの部分だけである。周湟の堀り方は第7図の周湟セクション図のとおり外壁は約30°の緩傾斜で堀り中間地点から約70°の急傾斜面に変り周湟底に続く。周湟底は中央部に向って徐々に深くなり最大深は1.3mを測するが、周湟内壁の立上りは調査区外になるため確認されていない。

遺物の出土状況についてであるが、周湟外に円形のピットが 2 穴発見されている。西のピットは直径 1 m、深さ20cm、東ピットは不整形であるが径約90cm、深さ20cmでピット内から円筒ハニワ片が 6 片出土している。周湟内からの出土遺物は全て円筒埴輪である。東端にある完形にちかい円筒埴輪(H-1)は周湟底から約10cm浮きの状態で出土しているが、そのすぐ北東寄りにある 3 片は50cm浮きの状態である。西寄りの地点からも多くの埴輪片が出土している。これらの埴輪片の出土地点は第 7 図のセクション図の淡褐色土層(3)及び暗褐色土層(4) からであり西古墳と同様で周湟底よりかなり浮いた状態の出土状況といえる。

# 5 塚山古墳周辺の埴輪棺

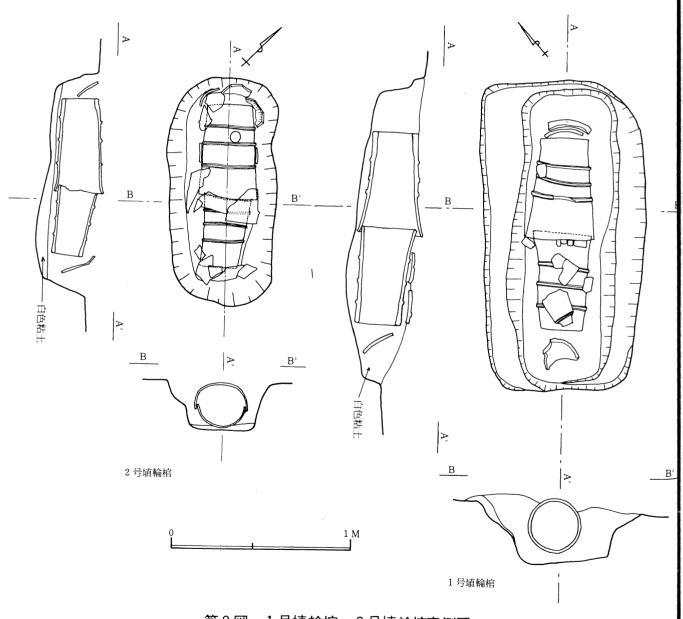
現時点(54年8月)までに発見されている棺数は3基の前方後円墳の周辺から4基,射撃場内から5基,計9基である。

1号埴輪棺 塚山南古墳の周湟から北東約4mの地点で発見された埴輪棺である。西古墳の東側を走る幅1.3m程の溝を追って表土を除去していく作業中,白色粘土を充填した長方形の土壙を発見したことにはじまる。土壙は長径1.9m,幅約1mの不整形な隅丸長方形である。深さは,地山が南へ傾斜しているために,北側が深く約30cm,南側は浅く13cmを測する。堀り方は,側壁においては外側を45°前後の傾斜角で堀り,埴輪棺の入る中央部は70°前後の急傾斜で堀っている。底面,壁面共に雑な堀り方である。

埴輪棺には2個体の円筒埴輪を使用し、全長は $1.2\,\mathrm{m}$ 、主軸の方向は $N-40\,^\circ$ —Eである。埴輪は北東に置かれているものが大形であり器高 $62\,\mathrm{cm}$ 、口縁部径 $43\,\mathrm{cm}$ を測する。この口縁部にやや小形の円筒埴輪の口縁部が約 $4\,\mathrm{cm}$ 程入り込む形式をとり、口縁部間の透間には方形の埴輪片が詰め込まれている、円形の透孔の外側には目張りのために埴輪片を置き、また、円筒埴輪の両端の円形空間を閉塞するために大形の埴輪片を置いて、その周囲は白色粘土を用いて丁寧に被い固定させ、さらに土壙内に白粘土を充填させている。

- **2号埴輪棺**,発掘調査終了後地主の山崎氏から埴輪棺が発見されたとの連絡があったため石川均,熊倉直子両調査員が現地に急行し調査したものである。
  - 1号埴輪棺の東北東約70m,道路用地の北15mの畑地の中にある。土壙は長径1.4m,

幅約65cmの不整形な平面形を呈し,深さは42cmを測する。掘り方はやや雑な感を受ける。 埴輪棺の本体には2個の円筒埴輪を使用している。北側の円筒埴輪は完形であり口縁部を 南に向け2段目の円形透孔を上面に向けて置かれている。南側の円筒埴輪は口縁が欠損し ているが北の埴輪の口縁部と合せるように接合されている。埴輪棺の全長は1m,主軸の 方向はN-45°Wであり,棺は土壙の底面に厚さ3cm~7cmで敷かれている白色粘土の 上に置かれている。南北両端の埴輪基部の円形空間を閉塞するために円筒埴輪片を用い, さらに白色粘土を充填させて埴輪片を個定させているが,南埴輪は円形空間の部分だけを 塞いでいるのに対し,北埴輪は基部全体を囲むような状態で埴輪片が置かれている。第9 図では円筒埴輪を被う埴輪は3片しか示されていないが,全面を被うように埴輪片が乗せ られており充填材として白色粘土が用いられている。



第9図 1号埴輪棺,2号埴輪棺実測図

# 6 射撃場内埴輪棺

射撃場とは戦後県営総合運動場の一部として建設されたのであるが駐車場として改修されることになり、高さ約9mの土堤の削平工事中に多量の埴輪が出土したため2日間工事をストップし緊急調査を実施したものである。

円形周湟 2 基があったことは判明しているが東埴輪棺については埴輪棺の上半分はブルドーザーにより削除され周囲も削平された状態であるため周湟の有無は不明である。しかし、周湟内出土の4 基の埴輪棺は、いずれも粘土を使用していないのに対し、東棺は周囲に白色粘土を使用している点を考えると、1 号、2 号埴輪棺と同様土壙を堀って構築しているとも思える。

南周湟は塚山古墳の前方部前縁の北約50mの地点を中心とする周湟で,直径は外縁周で約14.5mを測すると推定されるものである。周湟の幅は,周湟の最も残りよい西埴輪棺の地点で1.5mを測する。周湟の内側に墳丘の盛土があったかは全て削平された時点であるため不明である。この周湟内に西と北に埴輪棺が2基発見され,さらに,北棺から約6m西の周湟内からは,可愛らしい水鳥の埴輪の頭部(第16図1)が出土している。

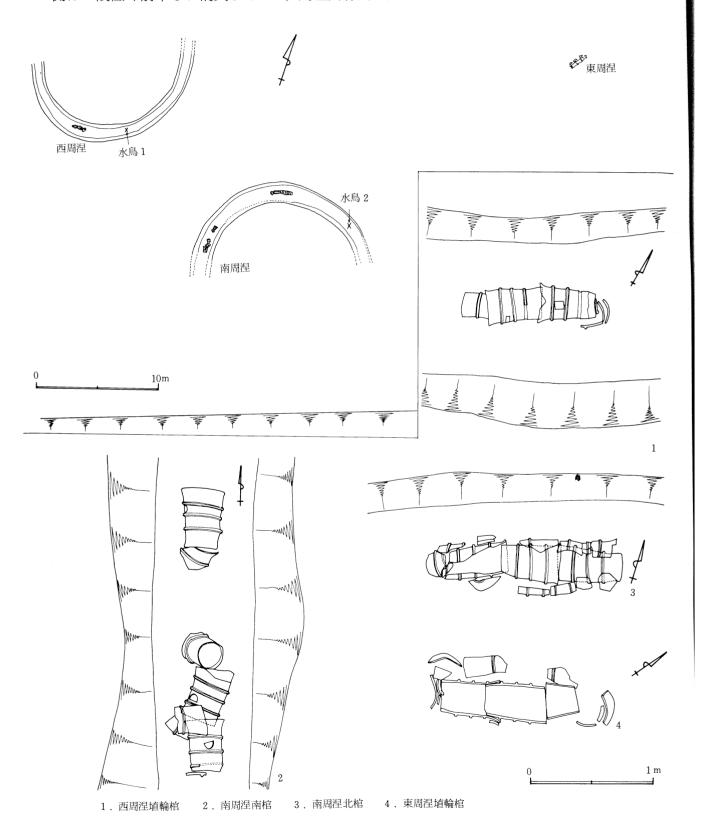
西埴輪棺(第10図2) 周湟幅1.5 m, 残存する深さ35cm~45cmの周湟のほぼ中央に主軸を南北に向けて円筒埴輪が4個並んでいる。中間が抜けているが4個の埴輪の長さは2.3 m となる。しかし,他の3埴輪棺を見ると長さは1.4 m 前後であり,本棺は長すぎるので西埴輪棺は連続する2基の埴輪棺が並んでいたと思われる。南にある3個の円筒埴輪をA棺とし,北側にある1個の埴輪棺をB棺とする。A棺は南の埴輪が原位置にあると考えられる。基部は剝離しており,これは構築の時に基部の消失した埴輪を使用したものと思われる。基部の円形の空間を塞ぐため使用した円筒埴輪片が1片だけ残っている。中間の埴輪は口縁を南に向け,口縁部は南埴輪の口縁部を接合させ,その透間を塞ぐため大形の埴輪は口縁を南に向け,口縁部は南埴輪の口縁部を接合させ,その透間を塞ぐため大形の埴輪片を2片乗せている。基部は割れた状態で消失している。北側の埴輪は胴部が倒立した状態で置かれている。中間と北側の2個は構築後動かされたものであろう。

B棺は円筒埴輪1個と朝顔形の円筒埴輪片が1片だけ残存している。この円筒埴輪は完 形品である。基部を南に向け、閉塞用の埴輪片があることから南側の埴輪であり、北側に あった1個乃至2個の埴輪は消失してしまったものと考えられる。

北埴輪棺,(同図3)円筒埴輪3個を使用し,主軸をN-75°-Eに向け構築している。棺の全長は1.6m,東側と中間の埴輪は口縁部と口縁部を接合させ,西側の埴輪は口縁部を中間の埴輪の基部を入れ込む形態をとっている。埴輪棺の円形空間を閉塞するために東側は円筒埴輪片,西側は朝顔形埴輪片を使用している。さらに,3個の円筒埴輪の全面を被うために円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片を2重に張りつけている。この多量の埴輪片を整理の段階で接合した結果,円筒埴輪4個体,となったことから,完形の埴輪を割りながら張り付けて

いったと思われる。これらの埴輪片を被うものは全て黒色土である。

西周湟埴輪棺, (同図1) 西周湟は南周湟の北西約24mの地点を中心とする周湟であり,北側は1段低く削平され消失していた。周湟外縁周の直径は約13.5m,周湟の幅は90cm前後で



第10図 射擊場内埴輪棺実測図

あるが,埴輪棺のある地点は広くなり最大幅1.7mを測する。また埴輪棺の東約4mの周湟内の黒色土中からは水鳥の埴輪の頭部が出土している。

埴輪棺は周湟の南側にあり、主軸の方向はN-88°-Wとほぼ東西に向けいる。棺の全長は1.1m、東側の円筒埴輪は基部を東に向けているが基低部は粘土紐の接合部から剝離しているものを使用し、透しは方形である。中間の円筒埴輪は完形であり、透しは半円形で基部は東側の埴輪の口縁部に入り込む形をとっている。西側の円筒埴輪は基部から胴部まで埴輪を使用し胴部は中間部の埴輪の口縁の中に入り込んでいる。埴輪棺の構築法は、まず周湟内の黒色土中に大きく割った円筒埴輪の破片を敷き、その上に2個体半の円筒埴輪棺を置き東西両端の埴輪の円形空間を閉塞するために埴輪の破片を2重に置き、さらに、埴輪棺の周囲は円筒埴輪片で全面を被っている。なお、埴輪片等を固定するため粘土などの使用は認められない。

東埴輪棺, (同図4) 南周湟の中心から北東へ約30mの地点に位置する。主軸の方向はN-40°-E, 棺の全長は1.3 m 前後と思われる。埴輪棺の上半部はブルドーザーにより持ち去られているが, 北東の円筒埴輪と中間の円筒埴輪は口縁部を接合させ, 南東の円筒埴輪の口縁部に中間の埴輪の最下段のタガまでを入り込ませる形をとっている。埴輪棺の両端は円筒埴輪片を2重に置いて閉塞しており, 埴輪棺の周囲は円筒埴輪, 朝顔形埴輪, 器材埴輪である短甲形埴輪も使用して被っている。また, この埴輪棺だけに白色粘土が使用されており, その範囲は長さ147cm, 幅57cmの隅丸の長方形を呈している。このことは, 前述したように, 周湟内に構築したと考えるより土壙内に円筒埴輪3個体と埴輪片, 白粘土を用いて構築したと考える方が適切であると思われる。

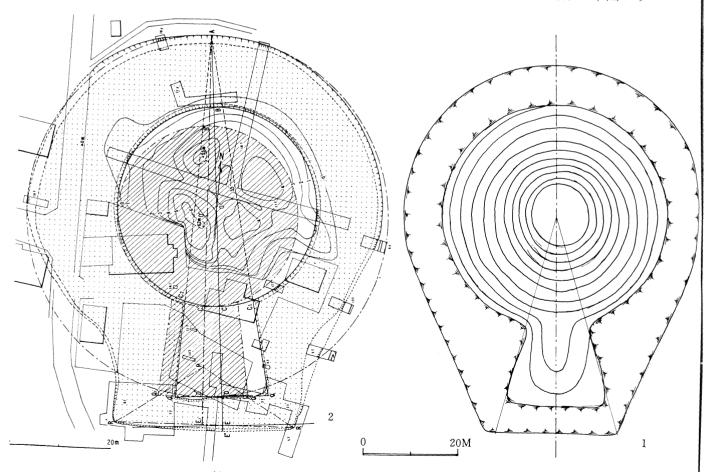
## 7 遣構のまとめ

(1) 塚山西古墳 本古墳群は狭い舌状台地上に3基の前方後円墳と2基の円形周湟内に4基の埴輪棺,前方後円墳の周辺には5基の土壙を伴う埴輪棺があったことが確認された。これらの遣構の築造の時期は出土した円筒埴輪の編年(遣物の章で後述)から主墳の塚山古墳は5世紀中葉~5世紀末,西古墳,射撃場内埴輪棺,鹿の刻線画のある埴輪棺は6世紀前葉,南古墳と1号,2号埴輪棺は6世紀中葉という年代であることが判明した。つまり,3基の前方後円墳は約1世紀の間に次々と築造され,それらに伴って,それぞれの円筒埴輪棺も構築されていったことが理解できる。

次に今回の発堀調査の中心をなした西古墳についてまとめることにする。前方部だけの調査であったが古墳全体を推定復元したものが第11図-1である。主な計測値は全長約64m,後円部径約46m,前方部長約18m,前方部幅約22mの平面プランをもち,墳丘の高さは後円部の約5mに対し前方部が約1.5mと極端に低い帆立貝式の前方後円墳であると考えられる。平面プラン上の特色としては次の4点をあげることができる。①前方部幅が後円

部径の約号と極端に狭いこと。②前方部側縁延長線の交点が後円部の中心点と一致すると推定されること。③上田宏範氏の前方後円墳平画プランの形式で分類すると6:0:2.5,または6:0.5:2.5の比率になると考えられA型式の中に入るが4世紀型の古墳とはならず特異なプランであること。④周湟の外縁形であるが前方部外縁幅は約29m,後円部外径(62m)の約号と非常に狭いため馬蹄形状の特殊な外縁形となっていること。通常の盾形の周湟とならず馬蹄形の周湟になったことは,舌状台地の西端の傾斜面に立地するという占地の問題もあると思われるが,発堀調査の際クビレ部の掘り上げに多くの労力を必要としたことを考えると労力の消力のために馬蹄形の周湟外形とったと思われる。

次に本墳と同形の帆立貝式古墳の好比較資料として雀宮牛塚古墳をあげることができる。 牛塚古墳は本古墳の南東2.5kmの地点にあり,明治10年の発掘の際,舶載鏡,鈴杏葉,短甲 片,勾玉などが出土し,うち画文帯神獣鏡は熊本県船山古墳などと同笵鏡であり築造の時 期は5世紀後半とされる古墳である。墳形については昭和44年の発掘調査により推定復元 されており,その計測値は全長56.7m,後円部径39m,前方部長17.7m,前方部幅17.7m である。周湟外形は馬蹄形に近い形状であり,前方部幅は後円部径の支以下と狭い帆立貝 式の前方後円墳であることなど塚山西古墳と規模,形状共に類似した構築法による古墳と いえる。さらに,本古墳群の南西3kmの姿川の西段丘上にも塚山西古墳と同様な平面プラ



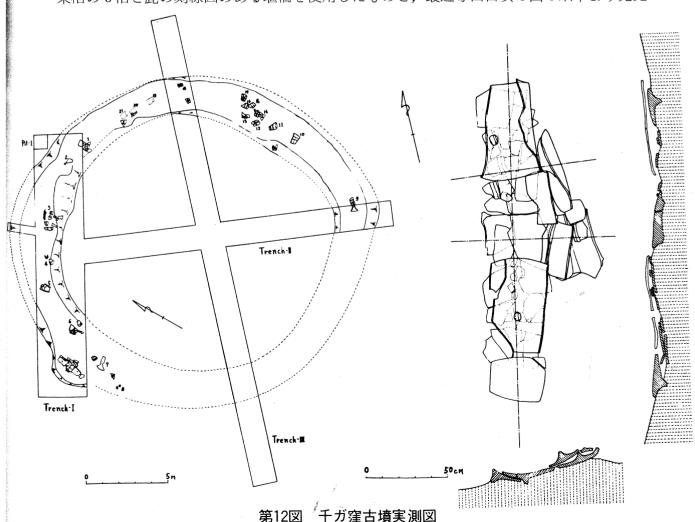
第11図 雀宮牛塚古墳実測図及び西古墳復元図

ンをもつ亀塚古墳(県指定)があり、推定規模は全長約5.6m, 後円部径3.6m, 前方部長20m, 前方部幅18mと雀宮牛塚とほぼ同タイプの古墳である。

以上のことをまとめると,塚山古墳群は5世紀末葉頃全長100mの大形の前方後円墳が築造され,次の代の6世紀前葉西古墳,さらに次の代の6世紀中葉に南古墳が築造され,父子3代の人物のために築造されたものであり,しかも塚山古墳は前方部の雄大な古墳であるのに対し,次の代の西及び南古墳は前方部が極端に制限された帆立貝式の古墳に変化をする点を考えると,大和政権により5世紀の後半のある時期に第2回目の古墳築造に対(3)

また、ほぼ同じ時期に半径約3kmの地域に同タイプの帆立貝式古墳が塚山西、雀宮牛塚、 亀塚と3基あり宇都宮南部における前方後円墳を築造でき首長層の勢力範囲を知る好資を 得ることができ発掘調査の成果を増すことができたといえる。

(2) 埴輪棺 今回の発掘調査で発見された埴輪棺は7棺であるが,その他に2基が確認されており計9棺となる。これらの埴輪棺は長方形の土壙内に構築されるものと,円形周湟内に構築されるものとに大別される。土壙を伴うものは1号,2号埴輪棺と射撃場内の東棺の3棺と鹿の刻線画のある埴輪を使用したものと,最近塚山古墳の西の畑中より発見



されたものを含め 5 棺が確認されている。これらの埴輪棺の特色は①土壙は1号棺がやや 丁寧な掘り方であるが,他は雑な堀り方である。②土壙内の充填土としては白粘土が使用 されている点である。円形周湟内出土の埴輪棺の特色としては①周湟底から浮いた状態, つまり黒色土中に構築されており周湟構築時から時間を経た後につくられている。②南周 湟北棺と西周湟の 2 棺は下に埴輪片を敷き,その上に本体である円筒埴輪を置き,棺の周 囲全面を埴輪片で被っており埴輪片を固定させるための粘土等は使用されていない。③南 周湟北棺の東埴輪,同じく西棺の南埴輪は基部の剝離した埴輪が使用されており 2 次使用 と考えられる。

円形周湟内の埴輪棺についてまとめると,墳丘についてはブルドーザーによる削平のため不明であったが埴輪棺の埴輪は2次使用されたものであり,しかも,塚山西古墳の埴輪より若干古い形式の埴輪であることを考えると墳丘をもった円墳があり,その円墳に使用された埴輪を2次使用したと考えられる。次に構築時であるが埴輪棺の全面を被う多数の埴輪片が粘土等の接着剤を使用されずに落下もせずに出土している点を考えると,周湟内に黒色土が自然堆積した状態の時点で周湟内に土壙を掘り埴輪棺を構築し,その後多数の埴輪片が落下しないよう黒色土を埋戻したと考えられる。

以上をまとめると9基の埴輪棺の規模は,長さでは最大は南周湟北棺の1.45m,その他は1 m~1.2mで幅は内径で20cm~30cmである。このことは北棺を除くと成人が直葬されたとは考えられず再葬用の埋葬施設であろう。埴輪棺の構築法には土壙を掘るものと,円形周湟内に構築するものがあり,使用した埴輪は塚山古墳のものはなく,2基の円墳,西古墳,南古墳のものであり,周湟内の棺は基部剝離の埴輪使用から立てられていた埴輪を引き抜き再使用していること,土壙を伴う埴輪棺は1号,2号,鹿の刻線画のある棺共に完形品であり未使用の埴輪の可能性もある。これらの棺の被葬者については3基の前方後円墳,2基の円墳の被葬者との関連は十分に考えられるが出土遣物は皆無であり身分の高くない陪從者であるか,または古墳築造に携わった工人集団にその可能性があると思われる。

埴輪棺は東日本での発見例は少なく、本県では千が窪古墳(芳賀郡芳賀町給部)の1例があるのみである。同古墳の概略は次のとおりである。直径17mの円墳であったが墳丘は削平されて不明。周湟内からは浮いた状態で円筒、朝顔形、楯、鞆、靭、大刀の器材と人物埴輪等が横転して出土している。埴輪棺は西周湟外縁を張り出させた状態で掘られ部分にあり、ローム層に密着させて楯形埴輪片を敷きつめ、その上に同筒埴輪を3個体を接合して長さ1.65mの埴輪棺をつくっている。埴輪棺は円墳築造後に周湟を利用したとされており、この点本古墳群と同じである。また、周湟外からは鬼高期の甕棺も出土しており埴輪棺も含め再葬墓的色彩が強いとしている。

- (1)雀宫牛塚古墳 宇都宮市教育委員会 昭和44年
- (2)栃木県教育委員会が作成した墳丘測量図から計測した。

- (3)5世紀における古墳の規制 小野山節 (「考古学研究」第16巻第3号 昭和45年)
- (4)千が窪古墳 芳賀町教育委員会 昭和42年

# 第4章 遺物

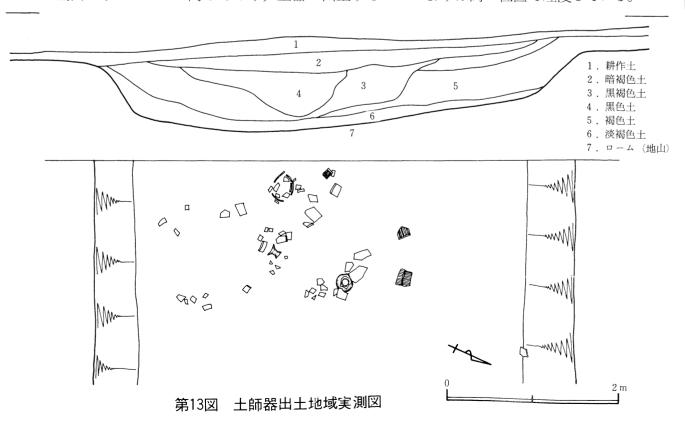
# 1 土 師 器

#### 出土状態

塚山西古墳の中軸ライン上にある前方部南側の周溝内から土師器の壺形土器と,高坏形土器 2 個体が出土した。これらの土器は、いづれも破片で、乱雑に群在しており、意識的に埋置された状態ではなかった。

土器の出土する範囲は、周溝のほぼ中央部から、南北 2.4 m、東西 1.4 mである。周溝のほぼ中央付近には、壺形土器の口縁部が倒立する形でみられ、その付近には、壺形土器の胴部破片が散乱していた。この地点から 0.8 m ほど南には、高坏形土器の脚部が横転してみられた。また、そのまわりには、高坏形土器の坏部の破片と壺形土器の破片が接近してあった。この周溝の南壁立上がり付近から、壺形土器の破片 3 片が重なり合って出土した。

周溝内におけるこれらの土器の層位は、三層に分けられる周溝の埋土の中でも最下層に位置づけられる。また土器片は、周溝底面に接して出土している。土器の含まれる埋土は、ローム粒の混入する淡褐色土である。これらの土器群と接して出土する円筒埴輪は、周溝の底面から20~30cmの高さであり、土器の出土するレベルよりは高い位置で埋没している。



土器の含まれる層と埴輪の含まれる層は、前者の層が下にある。したがって埴輪の埋没時期よりも土器の埋没時期が早いことがいえる。

これらの土器が周溝内で使用されたものかどうかについて考えると、土器の出土する周溝の底には、土器の使用した状況は考えにくい。また、破損した土器の破片が乱雑に一括してみられる事。以上の事実から、これらの土器は周溝内に自然転落したか、あるいはなげ込まれたものと考える事が妥当のように思える。

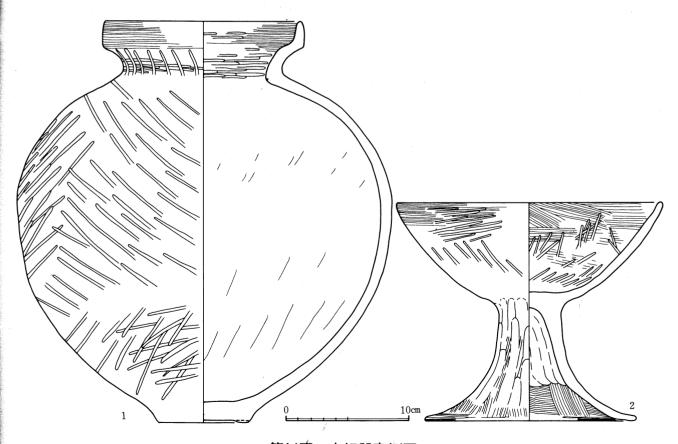
#### 壺形土器(第14図1)

土器の法量は,器高32cm,口径16cm,底径7.3 cm,胴部最大径で33cmである。約2分の1ほど現存する。

器形は、球形を呈する胴部から頸部で「く」の字状に外反し、口縁部で直立する。底部にはドーナッツ状の粘土環が貼り付けられている。

器面調整は、頸部から胴部下端まで、斜め方向の篦磨きが施され、頸部では縦方向の篦磨き後さらに横方向の篦磨きが施されている。内面はなでによって整形され、頸部は横方向のへう磨きがなされている。色調は赤褐色で焼成及び胎土は良好である。

この壺形土器に類似するものとして小川町谷田遺跡出土の壺形土器, 矢板市石関出土の壺形土器, 権現山北遺跡 7 号住居址出土甕形土器がある。谷田遺跡, 石関遺跡の壺形土器は器形的にみると複合口縁なので, 本古墳出土の壺形土器に比較するとやや前出的な要素も



第14図 土師器実測図

含まれる。権現山北遺跡の甕形土器の場合は、器形、大きさ、調整技法ともに本古墳出土 の壺形土器と共通している部分が多い。

高坏形土器(第14図2)

土器の法量は、器高17.5cm, うち脚部の高さ9cm, 脚底部での径17cm, 坏部の口径21.5 cmで約3分の2ほど残在している。

器形は、坏底部でわずかな稜を有し、ほんの少し内湾しながら口縁部に至る。脚部はわずかに外反しながら裾部でラッパ状に開く。

器面調整は、坏部外面で斜め方向の篦削りの後、斜め及び横方向のわずかな篦磨きがみられる。脚部では、刷毛目のあとに縦方向の篦磨きが施されている。坏部内面では、横方向の刷毛目のあとに斜方向の篦磨きがみられる。脚部内面では、刷毛目を施した後、縦方向のヘラなでがみられる。

胎土は、砂粒、長石、雲母が混入し、色調は黄褐色で、焼成は良好である。

この高坏形土器に類似するものとして小川町谷田遺跡の高坏形土器,矢板市石関出土の高坏形土器,栃木日産内の大野遺跡,K-14号住居址出土高坏形土器,位野市上敷遺跡  $A \boxtimes 3$  号住居址, $B \boxtimes 第 1 - A$  号住居址出土の高坏形土器等がある。これらの諸例の高坏形土器は坏底部の稜が比較的明瞭に残っているのに対し,本例の場合は,稜がかすかに残っているにすぎない。また,脚部も前記の諸例に比較して短くなってきている。

こういった土器の現象面をとらえるならば、本例の場合、和泉的な要素というよりも、 それよりも後出的な意味合いが強い。しかし、本例の高坏形土器の器面調整にみられる刷 毛目の手法は、古い要素を保持している。

以上前述した各遺跡の時期は和泉期の範疇に入れられるものであり、本古墳出土の土師 器はそれよりも後出するものとして把えておきたい。(熊倉直子)

- 注(1) 大金宣亮「那須郡小川町谷田遺跡出土の土師式土器」『栃木県考古学会誌』第2・3合併集 1968・9
  - (2) 平野隆夫「矢板市石関出土の土師器」『栃木県考古学会誌』第 2・3 合併集1968・9
  - (3) 『権現山北遺跡』宇都宮市教育委員会 1979・3
  - (4) 益子覚 「大野遺跡 K-14号竪穴住居址」『栃木日産遺跡』倉田芳郎編駒法大学考古学研究会  $1971 \cdot 12$
  - (5) 竹沢謙, 石川均, 山ノ井清人『上敷遺跡』栃木県教育委員会 1976・3

# 2 須 恵 器

周溝内の埴輪中に10数点伴出したものであるが、いずれも破片で、それらを接合して器 形を複原できるものはない。しかし小片は各々器台・高坏・甕・鉢の一部であることは推 定でき、それがいずれも比較的古い様式の特徴を保持している。

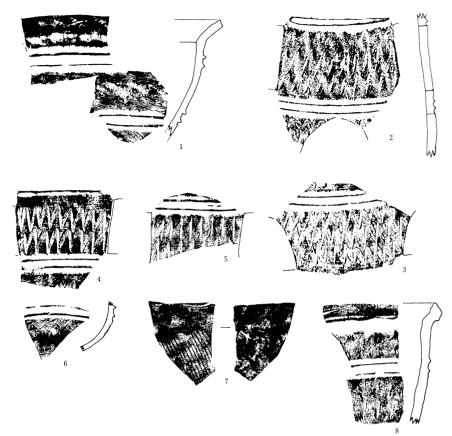
第15図1~5は器台の破片である。これらが同一個体を形成したものであったとは明言 できないが、2と3、4と5が各々同じ個体の一部であることは判然としている。各々が 特徴的な凸帯と発達した波状文帯を有している。1は器台の台部,2~5は同脚部の一部 である。台部の体部外面には断面三角形の深い凸帯が2本1組として、上・下2ヶ所に巡 らされ、その中間に2段の波状文が描かれ、同種の文様は凸帯の下方にも見ることができ る。深い台部は口縁に至り大きく反曲して終っている。胎土は精製され、表面は黒灰色に 焼成され,堅緻である。表面には高温焼成の際に胎土から吹き出る成方が黒点となって現 われている。同一個体と思われる口縁部の小片が1点みられる。図2~5は器台脚部の破 片である。各々中段と最下段の文様帯と思われるが、2・3と4・5は別の器台と思われ る。2条1組の凸帯は前述の台部のそれに比し、やや浅いが凸帯の両端を沈ませることに より,凸部(帯)を浮き出させている。2の破片は下段に三角形,上段に長方形のスカシ が、3には三角形のスカシがみられる。割れ口の状況から推測すると三角形のスカシ部分 が脚部の最下段の文様帯となりそれである(端部欠)。従って文様帯には3段の波状文を入 れ、スカシは中膨らみの三角形と長方形を干鳥状に開けている。4・5は文様帯が前者よ りやや狭く、2段の波状文に長方形のスカシがみられる。他に3と同一個体の小片が1片 ある。

6 は高坏の坏部の破片であろう。シャープな 2 条の凸帯を有し、その下部に波状文がみられる。断面のカーブから深い坏部が推測される。この脚部と思われる遺物を探すことはできない。

7は甕の破片であろう。表面には細かな格子目の叩きがみられ、内部は即き痕が擦り消され平滑である。他に表面に平行叩き、内面擦り消し、頸部に波状文のある小片が出土している。

8 はやはり発達した波状文, 凸線を有する口縁部の破片であるが, 断面がやや外側に膨れをもつもので, 広口の鉢の1部と推定できよう。

これらの須恵器は出土地点は異っても、器状の特徴から各々は大きな時間の経たりをもつものではない。部分的な小片のみからの断定は避けるべきであろうが大阪陶邑古窯址群の製品と比較しても、本出土の須恵器がかなり古式な様相を示していることは肯定できよう。特に器台の示す特徴は、それを明確にしてくれる。上・下2段の凸帯と発達した波状



第15図 須恵器実測図

文をもつ深く大きな台部(推定口径38cm),脚部にみる複数の波状文帯とスカシの特徴は陶色の1期の段階の製品の様式に共通し,甕の叩きや内面を擦り消す技法も,これらの時期比定を越えるものではない。従って,最も特徴的な器台を主としてみるならば,陶邑におけるT K 208 の段階に比定できるものと思われる。

これらの須恵器が如何なる経路で本古墳に埋納されたのかは、さらに検討の余地があろうが、伴出する土師器(甕)の形態は本古墳に近い宇都宮市権現山北遺跡(16号住居址)においてTK208~TK23比定の須恵器(高坏)を伴出した土師器に共通することがうかがえる。この形態の土師器の分布範囲は地域的にもかなり限定されており、地域性、在地性の強い、時間的にも短い形態の土器と考えている。本古墳と権現山遺跡出土の土師器と須恵器の伴出関係からその時間位置がそれほど矛盾しないものとして導びかれるならば、伴出する本古墳の埴輪にも同様な時間を与えることが可能であると思われる。

須恵器については星田享二氏との会話の中で得るころがあったことを付記したい。

(大金宣亮)

#### 参考文献

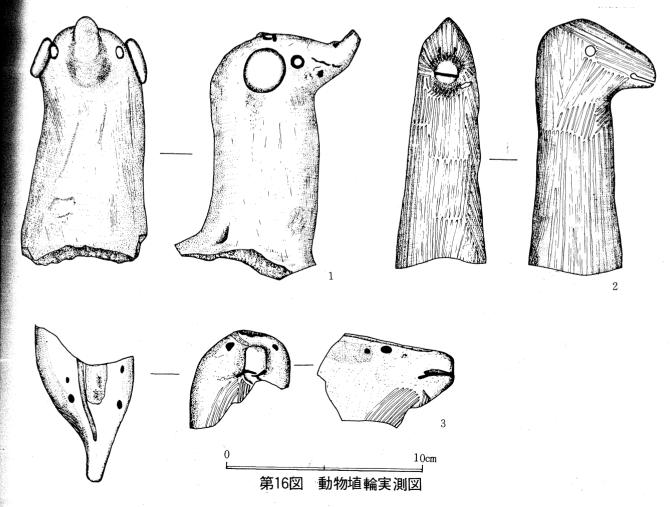
田辺昭三『陶邑古窯址群』 I (平安学園研究論集第10号) 1966 大阪府教育委員会『陶邑』 (大阪府文化財調査報告書・第28~30輯) 1977~1978 宇都宮市教育委員会『権現山北遺跡』 (宇都宮市埋蔵文化財調査報告・第5集) 1979

# 3 動物埴輪

水鳥埴輪(1) 射撃場内南周湟の北東部周湟内の黒色土中より出土したものである。 はじめ、上向きの鼻、丸い可愛らしい眼、ボタンを張りつけたような丸い耳、を見た時、 モグラかイタチなどの小動物を連想した。しかし、ボタンのような耳をつけた鳥の埴輪は にわとりなどに見られ、また、水鳥類の特色である鼻孔が嘴の付根の部分に認められ、さ らに上にやや反った扁平な嘴の形状から雁、鴨などの水鳥の埴輪であると考えられる。

頭部から頸部までの器高は 12.5cm, 頸部の中間部での縦幅は5.2cm, 横幅は5.5cmを測する。頸部から頭部までは粘土紐を輪積みにしており, 内面に輪積痕が7段認められ, 粘土 紐の厚さは1cm前後である。整形および調整はナデによって行われ, 頭部から頸部に向って縦方向のナデ痕が全面に認められる。

左耳は $2.5 \text{cm} \times 2.2 \text{cm}$ ,厚さ6 mmの楕円形のボタン状の粘土を張付けているが,右耳は欠損している。眼は篠竹の輪を利用し,静かに回転させながら抜取っている。嘴は頭部から水平に伸び鼻孔の部分から先端に向っては約 $45^\circ$ の角度で上向きになる。嘴の幅は約1.7 cm,付根の部分には鼻孔が2 穴浅くあけられており,さらに,嘴の先端に2 条の へっ状工具による線刻が認められる。



水鳥埴輪(2) 西周湟の埴輪棺の東から出土したものである。頸部から上だけであるが器高は12.8cm, 頸部の中間部での縦幅は4cm, 横幅は3.7cmを測する。頭部は後頭部から嘴の先端までの幅は6cm, 眼は直径4mmの細い丸棒を回転させながら差し込み左右両眼を貫通させている。嘴は下部が欠損している。上部は先端に丸味をもたせ, ヘラ状工具で切り込み上下の嘴を作り, さらに上嘴に長さ6mmの細長い鼻孔があけられている。

頸部は粘土紐による巻上げ法で作られ、厚さは1cmを測する。頭部は粘土塊を整形して作ったものを頸部に差込む形態をとっている。全面にわたりハケによる調整が行われており、頸部から頭部にかけてはタテハケ、嘴はヨコハケ痕が明瞭である。

鳥形埴輪(3) 塚山西古墳の西周湟内の覆土より出土したものである。前頭部から嘴の部分だけであるが、頭部には竹ヒゴのような丸棒による刺突痕が左右に2穴づつあけられており、前が眼、後が耳と考えられる。頭頂部には鶏冠のような突起物が剝離した痕跡が認められる。嘴は鋭く猛禽類を想像させるものがあり、口部はヘラ状工具により左右から切り込んでおり、工具の動きにスピード感が認められる。頸部は一部だけであるが前述の水鳥埴輪に比べると太さが感じられる。右側の嘴の下にはハケ目が一条認められる。

以上の点から本埴輪は雄の鶏か鷹のような猛禽類であろうと思われる。

#### **4 短甲形埴輪**(図版 4)

射撃場内の東埴輪棺の本体を被うため破片にして使用したものと思われる。東埴輪棺はブルドーザーにより上半部は消失しており,その後散乱した埴輪片を集めたため,破片数が少く短甲形埴輪と判明するまでに時間を要した。焼成は良好で,胎土の色調は黄白色を呈し砂粒の混入も少なく全体を柔く焼きあげている。なお赤色顔料等の塗布は認められない。器高は前胴上端まで42.5cm,後胴上端までが49cmである。前胴は高さ26cm,幅は上端部で24.5cm,帯板で26cm(欠損のため推定)、裾板で28.5cm(同じく推定)を測する。竪上部外縁に連続するへうによる沈線は革綴りを表現するものと思われる。竪上部は横走する沈線で区切り,上部はへうによる沈線の連続する三角文を6個つけている。下部は竪長の三角文を左に2個,右に1.5個つけ,中央に縦の平行する沈線をつけている。この平行沈線の竪上上部と長側部は欠損していて不明であるが,前胴の上端から裾板まで連続するとすれば引合板になると思われる。調整法は全面ヨコナデを施した後に,ヨコハケさらにタテハケ調整を行っているがタテハケの間隔が荒いためタテ,ョコのハケ目が交叉している。

竪上と長側の間に幅2.3cm, 高さ0.3cmの凸帯が一周しており帯金を表現したものであろう。調整法はヨコナデである。長側の部分は欠損しているが後胴から考えて連続する三角文が1列施文されていたと考えられる。裾板の部分は幅7cmの1片だけであるが上下2列のヘラによる沈線が施文されており革綴りを示すものであろう。調整はヨコナデである。

後胴は高さ32.5cm, 上端幅は31cm, 上端から1.5cmのところに横走する沈線をひき上部

左下り、下部右下りの2列の連続する沈線が施文されている。その下に幅2cm~3cmの無文帯があるが、この部分までが押付板であろう。竪上部は沈線による上部隅丸の長方形区画中に三角文が6個施文されており、その下は無文帯である。長側部は左側の一部が残存しており3個の三角文があるが前胴まで連続する三角文であろうと思われる。調整は竪上部がヨコハケ後にタテハケ、長側部はタテハケである。

基部は高さ17cm,外径20cmを測し、調整は全面タテハケであり、透孔は直径 4.5 cmの円形孔が 2 孔あけられている。埴輪の内面は底面から裾部までは指による斜めの強いナデであり、裾部から竪上上端まではヨコナデであるが中間部に不規則なハケ目が認められる。以上のことから本埴輪は三角板革綴短甲を表現した器財埴輪である。

#### 5 **鹿の刻線画のある円筒埴輪**(図版1~3)

戦後、山崎三郎氏の畑地中より埴輪棺として出土したものである。塚山古墳の後円部南 周湟外の傾斜地からの出土であり今回の発掘調査とも関連性があるため資料として紹介す るものである。

器高51cm,口縁部外径31.5cm,基底部外径22cm,器厚は口縁部で0.8 cm,基底部で2 cm を測し,焼成は良好で淡褐色を呈し須恵器の竪さを感じさせる。基部を除く器面には赤色 顔料の塗布が認められる。

口縁部はやや左下りのタテハケによる調整を行った後に、上端の幅  $2 \, \mathrm{cm}$  の部分は連続するヨコテデによる調整を行っている。口縁部の中央にはヘラ描きによる  $4 \, \mathrm{頭}$  の鹿の刻線画があり、メス、オス、メス、オスの順序で描かれている。メス鹿は体長(鼻先~尾)  $10 \, \mathrm{cm}$  と  $8 \, \mathrm{cm}$  であり、描き方の順序は①顔→胸→腹②後頭→背→尾③顔面のくの字状④耳の刻線  $2 \, \mathrm{a}$  な(付根→爪先)の順序である。オスは体長は $12.3 \, \mathrm{cm}$  と $13.3 \, \mathrm{cm}$  であり、描き方はメスと同じ順序で最後に  $2 \, \mathrm{a}$  本の角を描いている。ヘラによる刻線にはスピード感が認められる。

3 段目はタテハケ調整後、3 頭目のメス鹿の下の部分に刻線で×印を描いている。まず、左上→右下に向って切り、次に右上→左下に切って交叉させている。×印の左右に透し孔が2 孔切られており、大きさは10cm×6.8cm、10cm×6.9cmで形状は横長、右下りの楕円形である。2 段目はタテハケによる調整。基部は断面が内弯するように整形し、その後タテハケによる調整を行っている。底面には板の木目と考えられる痕跡を押しつぶすようにして太さの異なる篠竹痕と思われるものが8本認められる。つまり回転台の木目痕と乾燥時の竹痕が認められることになる。

タガは3本まわされており最下段は幅0.9cm,高さ0.7cm,中段は幅1.1cm,高さ0.9cm, 上段は幅0.7cm,高さ0.5cmを測し断面形は台形である。タガと本体との接合をよくするために本体をヘラで削り内弯させ、タガどの接触面を多くする工夫が認められる。タガの上 部,下部共に本体と密着させるためにハケの端部を隅丸にした工具で入念に調整しており タガと本体との接合痕は完全に消されている。タガの側面の調整工具もハケを使用してい る。

内面は基部に荒いハケ目痕が認められる他は透孔まで輪積痕を消すため左下→右上に向かって約60°の角度で指の腹を用いて、やや荒い手法のナデが行われている。透孔より上部は丁寧なやや傾斜する横ナデ、口唇部の幅2cmの部分には横ハケ調整が行われている。

円筒埴輪(図版3-2)埴輪棺として鹿の刻線画のある埴輪とセットで出土したものである。器高50cm,口縁部外径34cm,基部外径22cmを測し,焼成は良好で淡褐色を呈する。赤色顔料は上部2段までは塗布されていたことが認められる。

口縁部はタテハケによる調整をし、上端の幅 1.5 cm部分はヨコハケによる入念な調整をしている。次の 3 段目はタテハケによる調整を行い、中央にはヘラ切りによる×印があり左下→右上に向かって13.5 cm,次に左上→右下へ14 cmの長さで切られている。透孔は 9 cm×6.5 cm,10 cm×6.2 cmの横長の楕円形のものが 2 孔へラ切りによりあけられている。 2 段目もタテハケ調整,基部はヘラ削りにより整形し底面に接して丸味をもたせた後にタテハケによる調整を行っている。

タガは3本まわっており、断面は台形を呈し調整は全てハケにより入念に行われている。 内面は底面から透孔付近までは粘土の輪積み痕を消すために指を斜めに引き上げるように して入念に痕跡をつぶしている。透孔の周辺は指による横ナデ、上部の口縁部まではハケ による調整をしており、ハケの幅は確認できるもので4.2 cmを測する。さらに口唇部の幅 2.5 cmの部分は丁寧なヨコハケによる調整を施している。

# 6 西古墳出土の円筒埴輪

**A区** A区出土の埴輪は、前方部東側周湟のごく一部と前方部東側マウンドから検出されたもので、すべてが破片である。A区で検出された特徴的な埴輪について述べる。

- **A** 1 タガを含んだ小破片である。タガの断面は側辺が内彎する台形状を呈している。 タガの調整は,板状工具で上辺・側辺・下辺の三辺を一度に連続的にヨコナデしている。 工具を止めたさいの工具痕が,縦の条線となって残っている。外面調整はタテハケを,内 面調整は不定方向の指によるナデを施している。
- **A-2** 口縁部の小破片である。口縁部が短く外反する。外面調整は口唇部にヨコナデを施し口唇部以下にはタテハケを施している。内面調整は、まづヨコハケを施しておいてから口唇部にヨコナデを施している。
- **A-3** 朝顔形円筒埴輪の口縁部破片である。口唇部は内外共にヨコナデを施している。 外面にはタテ及び斜位のハケを、内面にはヨコハケを施している。
  - A-4 透孔付近の小破片である。透孔の右側にヘラ書きによる「E」形の線刻が見ら

れる。外面調整はタテナデ、内面調整は横及び斜位のハケを施している。

- **A-5** タガを含んだ小破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコ及び斜位のハケを施している。
- A-6 基部の破片である。外面調整はタテ及び斜位のハケを、内面調整はヨコ及び斜位のハケを施している。
- **A-7** 基部の破片である。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコ及び斜位のナデを施している。底部調整状のヨコ位の連続したヘラ削りの様なものも見られる。透孔の形は不明であるが二段目に見られる。

番	号	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	香 形 状	線刻	調整外面	備 考
曲	73	各部の寸法	基部径	形 状	形状	透孔形状 縦×横	形状	四 内面	7/H <del>1</del> 5
	1	残 8.8	_			円か半円		タテハケ	タガの調整方法に注意
A -	- 1	-+-+-+-	<del>-</del>	<del>-</del>	1E	- × -	_	不定方向のナデ	タルの調整力伝に任息
	0	残10.2	(36.8)	C		<del></del>		タテハケ	
A -	- 2	-+-+-+-	<del>-</del>	С		- × -	_	ヨコナデとヨコハケ	·
	2	残 7.5	(57.2)	В		_		タテ及び斜位のハケ	却変形でする
A -	- 3	-+-+-+-	_	В		- × -	_	ヨコハケ	- 朝顔形である。
,	4	残 9.5	· <u>-</u>			円か半円		タテナデ	
A -	- 4	-+-+-+-	_	_		- × -	Е	ヨコナデ	·
A -	_	残14.5			1.0	円か半円		タテハケ	
A -	- 5	-+-+-+-	_		1E	- × -	_	ヨコ及び斜位のハケ	
Α-	c	残10.7				_		タテ及び斜位のハケ	粘土帯で基部が造られてい
A -	- 0	-+-+-+-	(21.4)			- × -	_	ヨコ及び斜位のハケ	る。
Α-	7	残21.3	_		1.5	円?		タテハケ	透孔は二段に2,三段に2
A	_ ′	-+-+-	(26.3)	_	1E	- × -		ョコ及び斜位のハケ	の4個?。底部調整か?

- **B区** B区出土の埴輪は、前方部東側周湟から検出されたもので小破片が多い。以下B区で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- B-1 二段目付近の破片である。タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形と思われる。 透孔の右側に線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のハケを施し ている。
- **B-2** 二段目付近の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケとナデを施している。
- **B-3** 透孔付近の小破片である。透孔の右側に「E」形の線刻が見られる。
- **B-4** 基部と二段目の一部である。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、 内面調整はタテナデを施している。
- **B-5** 口縁部の破片である。口縁部が直線的に立ち上りほとんど外反しない。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを上半に、下半には斜位のハケを施している。
- **B-6** 小破片である。外面調整はタテハケを施している。線刻が見られる。
- **B-7** 口縁部の破片である。口縁部がほとんど外反しない。タガの断面は台形を呈する。

外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のナデが一部に見られ,その後にヨコハケを一部施 している。

- B-8 小破片である。外面調整はヨコハケを施している。透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。
- B-9 口縁部の小破片で直線的に立ち上り口縁部が短く外反する。外面調整はタテハケ, 内面調整はヨコハケの後に一部ヨコナデを施している。
- B-10 口縁部の破片で直線的に立ち上り外反がない。外面調整は斜位のハケ,内面調整は310 は320 は330 に立ち上り外反がない。外面調整は斜位のハケ,内面調整は330 に
- B-11 タガ付近の破片である。タガの断面は台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。B-1 と技法が同一である。
- B-12 口縁部のみが一周し、口縁部が短く外反する。外面調整はタテハケ、内面調整は ョコハケを施し上半に一部ョコナデも見られる。
- **B-13** 小破片である。外面調整はタテハケを施している。線刻が見られる。C-8, C-16等と同一である。
- **B-14** 口縁部から透孔付近の破片である。わずかに、ゆるやかに口縁部が外反する。タガの断面は台形を呈し、透孔は半円形である。外面調整はタテ及び斜位のハケを施し、内面調整は斜位のナデを施す。
- B-15 口縁部,三段目等を部分的に欠損する。口縁部が短くやや鋭く外反する。胴部の膨らみはほとんどない。基部内面の粘土帯との接点に段差がある。タガの断面は台形を呈し,側辺が内彎している。透孔は円形である。透孔の右側に「A」形の線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコ及び斜位のハケを施している。基部の外面にへう状の回転された削りの調整がある。粘土帯一枚で基部が造られている。
- B-16 口縁部と三段目付近の破片である。口縁部はほとんど外反がなく直線的に立ち上る。タガの断面は台形を呈する。透孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ,内面調整は不定方向のナデを施している。口縁部内面に左上から右下に線刻が三本平行して描かれている。
- B-17 口縁部の下半と三段目付近の破片である。タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形と思われる。透孔の右側に「E」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のナデを施している。
- B-18 透孔付近の小破片である。透孔の右側に「F」形の線刻が見られる。

. TV.	号	器高	口縁部径	口縁部	タガ	透孔 <mark>形 状</mark> 縦×横	線刻	調整外面	備 考
番	7	各部の寸法	基 部 径	形状	形状		形状	内 囬	, J
_	1	残23.8	_	_	1B	半円?	A ?	タテハケ	_
В-	1	-+12. 0+-+-			15	-×-	11.	斜位のハケ	
	0	残14.8		_	_	半円?	_	タテハケ	<u> </u>
В-	2	-+-+-+	_			-×-		斜位及びヨコハケとナデ	/
	_	_		_	_	_	Е		
B –	3	-+-+-	-			$-\times-$	E		
		残18.1	_		1.	_		タテハケ	タガ調整にヘラ状工具を使
В-	4	11.5+-+-+-	_	_	1E	-×-	_	タテハケとナデ	用
		残16.0		Α		半円?		タテハケ	
В –	5	-+-+-+14.5	(30.4)	A	_	-×-	_	ョコ及び斜位のハケ	
		_	_					斜位のハケ	
В —	6	-+-+-+-	_	_	_	-×-		_	
-		残20.1	(32, 4)			_		タテハケ	
В —	7	-+-+-+14.5	· -	A	1C	-×-	_	ヨコ及び斜位のナデとハケ	· .
		_	_					ヨコハケ	
В —	8	-+-+-	_	-	_	-×-	A		
		残13.9	(42.2)			_		タテハケ	
В-	9	-+-+-+13.5	_	A	_	-×-	_	ョコハケの後ョコナデ	-
O .		残 9.0	(32.8)			_		斜位のハケ	
В —	10	-+-+-+-	_	A		-×-	-	ヨコハケ	•
		残20.4				_		タテハケ	
В-	11	-+-+-+-	_	-	1B	-×-	_	斜位のハケ	
		残14.4	(32.6)			_		タテハケ	
В-	12	-+-+-+-	-	C	-	_×-	-	ヨコハケとヨコナデ	
W			_				連続し	タテハケ	
В-	13	-+-+-+-		-	-	-×-	た葉脈状		$\dashv$
		残24.4				半円	1/\	タテハケ	
В-	14	-+-+-+13.9		A	1E	-X-	_	斜位のナデ	
		54.7	27.9			円		タテハケ	外面基部に底部調整らしい
В-	-15	11.1+10.4+ (10.4)+(14.1)	(21.0)	C	1E	9.5×7.7	A	斜位のハケ	している。
		(10.4)+(14.1) <b>残</b> 29.0	32.9		-	9.5×7.7	-	タテハケ	8 0 00 0
В-	-16	<del>残</del> 29.0 -+-+ (10.2)+12.1	34.9	A.	1 F	- × -	_	タテハケ	
<u> </u>		(10.2) +12.1 残21.0			<u> </u>	半円?		イルプロのデナ タテハケ	
В-	-17	残21.0 -+-+-+	_	_	1E	手円 ?	E	斜位のナデ	
						ļ			<del></del>
В-	-18			-	-	円か半円	F	タテハケ	4
		-+-+-	<u> </u>	1	1	×	L	_	

- C区 C区出土の埴輪は前方部西側周湟から検出されたものである。以下C区で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- **C-1** 基部の破片である。粘土帯一枚で基部下半を造っている。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整は上半は粘土紐をつぶしたままで胴部に移るくらいの所からョコハケを施している。
- **C-2** 基部の破片である。粘土帯一枚で基部下半を造っている。外面調整はタテハケ, 内面調整は斜位のハケを施している。基部外面にヘラ状の回転された削りの調整が一周し ている。
- **C-3** 基部から二段目にかけての破片である。タガは台形を呈し、側辺は内彎している。 粘土帯の数は調整が良くなされているので不明である。外面調整は削りに近い、タテ及び

- ョコハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **C-4** 三段目付近の破片である。タガは三角形にやや近い台形を呈する。透孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。
- C-5 基部付近の破片である。タガの断面は三角形を呈する。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のナデを施している。基部外面にヘラ状の回転された削りの調整が一周している。
- C-6 基部の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- C-7 基部の破片で外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施し、一部に斜位のハケも見られる。
- **C-8** タガ付近の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。 外面には葉脈に似たへう描きの線刻が見られる。
- C-9 二段目の上半から口縁部にかけての埴輪である。口縁部が短く,ややゆるく外反する。タガはすべてはがれてしまっている。透孔は円形で透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部は横ハケをそれ以下には斜位のハケを施している。
- **C-10** 口縁部と三段目にかけての破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。タガがはがれてしまっている。透孔は円形と思われる。外面はタテハケの調整で、内面はヨコハケと一部に斜位のハケを施している。
- **C-11** 基部から三段目にかけての破片である。タガの断面は台形を呈する。外面はタテハケ、内面は斜位のハケを施している。
- C-12 でく小さな破片である。C-8 と同じ葉脈状のヘラ書きが外面に描かれてある。
- **C-13** 基部下半を欠損している。口縁部の外反がほとんどない。タガの断面は台形で側辺と下辺が内彎している。透孔は半円形と思われる。透孔の右側に「F」形の線刻が見られる。外面はタテハケ,内面はヨコナデと斜位のナデを指で施している。
- **C-14** 口縁部の破片である。口縁部の外反がほとんどない。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- C-15 口縁部,二段目等の一部を欠損している。口縁部の外反がゆるく,胴部の膨らみはほとんどない。タガの断面は台形を呈し,側辺が内彎している。透孔は円形で,透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面はタテハケを,内面には,口縁部にヨコハケ,それ以下には斜位のハケ調整を行っている。基部外面にヘラ状の回転された削りの調整が一周している。
- C-16 小破片である。 C-8, C-12と同様な葉脈状のヘラ書きを施している。
- **C-17** 口縁部から三段目にかけての破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。タガの断面は台形で透孔は円形である。外面はタテハケ、内面はヨコハケを調整に施してい

る。

- C-18 基部の下半を欠損している。口縁部の外反がまったくない。タガの断面は長方形である。透孔は半円形で透孔の右側に「F」形の線刻が見られる。外面はタテハケ,内面は斜位のナデを施している。
- **C-19** 基部から二段目にかけての破片である。タガははがれている。外面にはタテハケ、内面は斜位のハケを施している。
- **C-20** 基部から二段目にかけての破片である。タガは長方形の断面を呈する。外面にはタテハケ、内面には斜位のハケを施している。基部外面にヘラ状の回転された削りの調整が一周している。

						·		·	
番	异	器 高			タガ	透孔形状 縦×横	線刻	調整外面	備考
# —		各部の寸法	基部径	形状	形状	~ 光縦×横	形状	内 面	, ·
c-	- 1	残13.5		_		<u> </u>	_	タテハケ	基部は粘土帯一枚で造られ
L		-+-+-	22.2			-×-		→部斜位のハケ	ている。
c-	- 2	残15.5		_	_		_	タテハケ	基部にヘラ削り状の底部調
Ľ.		13.0+-+-+-	21.7			-×-		斜位のハケ	整あり。
c-	- 3	残20.0		_	1E		_	タテハケ	基部は粘土帯によって造ら
Ľ		11.9+-+-+-	24.0			-×-		斜位のナデ	れているが枚数不明。
c -	- 4	残18.0		_	1F	円 ?	_	タテハケ	
Ľ		-+-+9.8+-	_			-×-		斜位のハケ	
c-	- 5	残17.0	_		1F	_		タテハケ	│ 基部は粘土帯で造られている。
L		-+-+-	21.0		11	-×-		斜位のナデ	底部調整状へラ削りあり。
C -	- 6	残13.5		_	_	<u> </u>	_	タテハケ	基部は粘土帯で造られてい
Ľ		11.0+-+-+-	19.0			-×-		斜位のナデとハケ	る。
C -	- 7	残15.1		_		<del>-</del>	_	タテハケ	基部は粘土帯で造られてい
Ľ	'	11.2+-+-+-	_			-×-		斜位のナデ	る。
<sub>C -</sub>	_ Q	残16.0		_	_	_	一部	タテハケ	
	0	-+9.4+-+-		_		-×-	葉脈状	ヨコハケ	
С-	- 0	残31.5	32.4	С		円	Α.	タテハケ	·
	9	-+-+10.4+13.8	_			8.0×7.0	A	ヨコハケ	
_ ا	-10	残23.1	(30.6)	D		円 ?		タテハケ	
L	-10	-+-+-+13.0	_	В	_	-×-	_	ヨコハケ	1
C-	-11	残31.0	_		1C	半円?		タテハケ	基部は粘土帯で造られてい
L	-11	11.6+10.0+-+-	(20.4)	_	10	-×-	_	斜位のハケ	る。
_ ر	-12	_	_		_	<del>-</del>	٨	タテハケ	
	-12	-+-+-+-	_		_	-×-	1	_	
C	-13	残42.5	31.7	A	1B	半 円	F	タテハケ	
	-19	-+8.8+ $(8.2)+(16.3)$	_	A	ID	-×-	Γ.	斜位のナデ	
	-14	建 8 5	(29.5)			_		タテハケ	
	-14	-+-+-	_	A	_	-×-		ヨコハケ	
C .	1 5	53.5	(28.7)	0	1.5	円	٨	タテハケ	
	-15	12.2+10.7+ 9.8+(12.4)	21.1	С	1E	8.5×7.0	A	斜位のハケ	- 底部調整状へラ削りあり。
	-16	_	_			_	葉脈	タテハケ	
Ľ	-10	-+-+-+-	_	_	_	-×-	状	_	
C	17	残25.0	(28.6)	D	117	円 ?		タテハケ	
L	-17	-+-+-+(12.2)		В	1E	-×-		ヨコハケ	
C	10	54.8	28.6		-1 D	半 円	Г	タテハケ	
L	-18	54. 8 13. 1+9. 6+ 9. 0+ (15. 4)	(22.2)	A	1B	9.0×6.5	F	斜位のナデ	
L	-19	残28.5				_		タテハケ	
	-19	(11.8)+(10.7)	(22.4)	_	_	-×-	1 -	斜位のハケ	
C	0.0	7柱20 Q	_			- 1		タテハケ	1000000000000000000000000000000000000
L	-20	11.7+-+-+-	24.6	-	1B	-×	_	タテナデ	- 底部調整状へラ削りあり。
			·		-	<del></del>		<del></del>	

- D区 D区出土の埴輪は前方部西側からくびれ部にかけての周湟から検出されたものである。以下D区で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- D-1 基部から三段目にかけての破片である。タガの断面は長方形を呈する。透孔の一部が見られるが,形状は不明である。透孔の左側に「G」形と思われる線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のナデを施している。基部の整形は粘土帯で一枚である。
- **D-2** 朝顔形円筒埴輪の朝顔部である。口縁部が水平に近く大きく開いて外反する。外面はタテハケの後に、口唇部とタガにヨコナデを施している。内面は全体にヨコハケを行い、その後に口唇部にヨコナデを施している。
- **D-3** 朝顔形円筒埴輪の三段目からくびれ部にかけての破片である。三段目のタガは台形の断面を呈し、くびれ部のタガは三角形の断面を呈する。外面調整はくびれ部は斜位又はヨコハケ、三段目はタテハケで、内面調整は斜位のハケを施している。
- **D-4** 基部の上半から三段目にかけての破片である。タガの断面はやや三角形に近い台形を呈している。透孔の一部だけなので形状は不明である。外面調整はタテハケを,内面調整は斜位のハケを施している。
- **D-5** 基部の上半から三段目にかけての破片と思われる。タガの断面は台形を呈し、タガの調整はヨコナデでヘラ状のものを当てている。これは鹿の線刻がある埴輪と同一技法である。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **D-6** 基部から二段目にかけての破片である。タガは台形を呈し側辺は内彎している。 タガの調整はヨコナデであるがヘラ状のものを当てている。技法は鹿の線刻が描かれてい る埴輪の技法と同一である。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のナデを施している。
- D-7 三段目と口縁部下半の破片である。タガは三角形に近い台形を呈している。透孔は円形で透孔の右側に「A」形の線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位及びョコハケを施している。朱が一部に付着している。
- **D-8** 基部から三段目にかけての破片である。タガの断面は長方形に近い台形を呈している。外面調整はタテのヘラ削りを施し、内面整整にはヨコナデと一部にタテナデが施されている。
- D-9 基部から三段目にかけての破片である。タガの断面は三角形に近い台形で低い。透孔は一部しか判らないが半円形と思われる。透孔の右側に「A」形の線刻が一部見られる。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケ及び一部に斜位のハケを施している。基部外面最下にはヘラ削り状の底部調整が見られる。
- D-10 二段目から口縁部にかけての破片である。口縁部がわずかに外反する。胴部がわずかにふくらみをもつ。タガの断面は台形を呈する。透孔は円形である。透孔の右にヘラ書きによる「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケと斜位

のハケを施している。

- **D-11** 基部上半から三段目にかけての破片である。タガの断面は台形を呈する。透孔は三段目に一部見られる程度なので形状は不明である。外面調整はタテハケ、内面調整は指による斜位のナデを施している。
- **D-12** 基部上半から二段目にかけての破片と思われる。タガが剝落している。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **D-13** 口縁部の破片である。口縁部が短く、ややゆるく外反する。外面調整はタテハケ、内面調整は連続的なョコハケを施している。
- D-14 基部の破片である。外面調整はタテ及び斜位のハケ、内面調整は斜位の指による ナデを施している。基部最下の外面にヘラ削りの底部調整が見られる。
- D-15 口縁部,基部等大きく欠損している。口縁部が短くややゆるく外反する。胴部の膨らみはみられない。基部はしもぶくれになっている。タガの断面は台形を呈している。透孔は円形で透孔の右側には「A」形の線刻が一部欠けているのが見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は連続的なョコハケを施している。
- **D-16** 三段目上半から口縁部にかけての破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。 タガの断面は長方形に近い台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整はヘラ状の 連続的なナデを施している。
- **D-17** 二段目上半から口縁部下半の破片である。タガの側辺は内彎し、断面は台形を呈し、ヨコナデを施しているが、ヨコナデにはヘラ状のものを当てている。これは鹿の線刻画のあるものと同一技法である。透孔は円形で透孔の右側には「B」の線刻がみられる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位の指によるナデを施している。
- **D-18** 三段目上半から口縁部にかけての破片である。口縁部は直線的でほとんど外反がない。タガの断面は台形を呈しているが外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のハケの後にナデを施している。
- **D-19** 口縁部の破片である。口縁部は直線的で外反がない。外面調整は斜位のハケ,内面調整はヨコハケを施している。
- **D-20** 三段目から口縁部にかけての破片である。口縁部は直線的で口唇部が短くわずかに外反する。タガの断面は長方形で,側辺,下辺が内彎している。透孔は円形を呈し,透孔の右側には「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は上半に連続的なョコハケ,下半には斜位のハケを施している。
- **D-21** 口縁部の破片である。口縁部は直線的であるがわずかに外反する。外面調整は斜位のハケを内面調整はヘラ状のもののナデが上半に、下半には横及び斜位のハケを施している。
- D-22 口縁部の破片である。口縁部は直線的で外反がない。外面調整は斜位のハケ,内

面調整はヨコ,及び斜位のハケを施している。

- **D-23** 口縁部の破片である。口縁部が短くやや鋭く外反する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを中間に、下部には斜位のハケを施している。
- D-24 外面調整タテハケの後に、ヘラ状の工具で線刻された小破片である。線刻は葉脈状と思われる。
- D-25 タガを含む小破片である。外面には「B」形と思われる線刻の一部が見られる。
- D-26 二段目上半から口縁部にかけての破片である。表面が荒れている。タガの断面は丸味を持った台形を呈している。透孔は円形で透孔の右側には「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケを施している。
- **D-27** 二段目上半から口縁部にかけての破片である。タガの断面は台形を呈している。 透孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコ方向のヘラ状のナデを施している。
- D-28 三段目上半から口縁部下半の小破片である。透孔は、半円形の可能性が強い。透孔の右側には「A」形の線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを施している。
- **D-29** 三段目,透孔付近の破片である。透孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位のハケを施している。
- **D-30** 口縁部の破片である。直線的に立ち上り、外反がない。外面調整は斜位のハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- **D-31** 口縁部の破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。外面調整はタテハケ, 内面調整は連続的なヨコハケを上半に施し、下半には斜位のハケを施している。
- **D-32** 二段目から三段目にかけての小破片である。タガの断面は三角形を呈する。透孔は半円形と思われる。外面調整はタテハケの後にヨコハケ,内面調整は斜位のナデと一部にハケが施してある。
- **D-33** 外面調整タテハケの後にヘラ状工具によって線刻された小破片である。線刻は葉脈状になっている。
- D-34 口縁部の小破片である。口縁部が短く、ゆるく外反する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- **D-35** 基部から二段目にかけての破片である。基部は下ぶくれになっている。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。
- D-36 二段目上半から三段目にかけての破片である。タガの断面は台形を呈している。 透孔の形は一部なので不明である。透孔の右側に「A」形の線刻の一部が見られる。外面 調整はタテハケ,内面調整は斜位のハケを施している。
- D-37 外面調整タテハケの後にヘラ状の工具によって線刻された小破片である。内面調

整は斜位のハケを施している。線刻は木の葉の葉脈を表わしている様に見える。

- D-38 線刻のある小破片である。線刻は鹿の前足に当る部分と思われる。
- **D-39** タガを含む小破片である。タガの断面は台形を呈している。外面調整タテハケの後にヘラ状のもので線刻されている。線刻は葉脈の様な形をしている。
- **D-40** 口縁部の小破片である。直線的に立ち上り外反がない。口唇部にはヨコナデが施してある。その下部からはタテハケを施している。そのタテハケの後に斜めに格子縞が描かれている。
- **D-41** 外面調整タテハケの後に線刻された小破片である。線刻は鹿の後足付近を描いている。
- D-42 外面調整タテハケの後に線刻された小破片である。線刻は鹿の前足付近を描いている。
- **D-43** 口縁部の破片である。直線的に立ち上り外反がない。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケとヨコナデを施している。外面には線刻が描かれている。雄の鹿が左側に,右側には弓に矢が付いているものが二個描かれている。弓と矢の線の右側のものは弓の弦まで描かれている。
- **D-44** 口縁部の小破片である。直線的に立ち上り外反がない。口唇部には横ナデが施してある。その下部からはタテハケを施している。そのタテハケの後に雄の鹿のツノが描かれている。
- **D-45** 線刻のある小破片である。タテハケの後に鹿の胴から後足にかけてが描かれている。
- **D-46** 線刻のある小破片である。タテハケの後に「B」形の線刻の一部が見られる。
- **D-47** 基部下半の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整は下半は粘土帯のままで上半には斜位のナデを施している。
- D-48 線刻のある小破片である。タテハケの後に葉脈状の線刻が描かれている。
- **D-49** 三段目の透孔付近の小破片と思われる。透孔は一部なので形は不明である。透孔 の右側に「E」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケを施している。
- **D-50** タガ付近の小破片である。外面に葉脈状の線刻の一部が見られる。
- **D-51** 線刻のある小破片である。タテハケの後に連続的に大きな三角文を描き交互にその三角を斜めの格子縞でうめている。
- D-52 線刻のある小破片である。外面に葉脈状の線刻の一部が見られる。
- **D-53** 線刻のある小破片である。外面に葉脈状の線刻の一部が連続して描かれている。
- D-54 線刻のある小破片である。外面に葉脈状の線刻の一部が見られる。

.717	[i	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	€7.形 状	線刻	₩ 外面	J++:
番	号	各部の寸法	基部径	形状	形状	透孔形 状縦×横	形状	期 整 一	備考
		残29.4		12 1/2		_		タテハケ	基部は粘土帯1枚で造られてい
D –	1	11.9+9.1+-+-	21.3	_	1B	-×-	G	斜位のナデ	る。タガにはヘラ状工具使用。
		残17.5	53. 2					タテハケ	
D -	2	-+-+-+11.6	-	В	1E	-×-	-	ヨコハケ	朝顔形である。
		残17.5						タテハケ・ヨコハケ	外面のヨコハケはくびれ部
D -	- 3	7天17.3		_	1D		_	斜位のハケ	一である。
						円 ?		タテハケ	CWSO
D -	4	残21.0 -+9.6+-+-		_	1F		_		
						-X-		斜位のハケ	カギの細曲に、ついかよう
D -	- 5	残14.4		_	1C	円か半円	_	タテハケ	タガの調整にヘラ状のもの
		-+9.9+-+-				-×-		斜位のナデ	を当てている。
D -	- 6	残19.8		_	1F		_	タテハケ	タガの調整にヘラ状のもの
		11.3+-+-+-	19.9			-×-		斜位のナデ	を当てている。
D -	- 7	残18.0		_	1F	円	A	タテハケ	   朱が付着している。
	•	-+-+-			**	$7.0 \times 5.5$		ョコ・斜位のハケ	
D -	- 8	残27.1		_	1B	円か半円		タテ削り	基部は粘土帯で造られてい
U		11.4+-+-+-	(22.8)		עז	-×-		ョコナデ一部タテナデ	る。1枚と思われる。
D -	- 0	残33.0	_		1F	半円?	Λ	タテハケ	外面基部にヘラ削り状の調
– ע	Э	11.7+10.0+-+-	(15.0)	-	TL	-×-	A	ヨコハケ	整あり。
Б	1.0	残36.4	(30.3)		1.5	円	Λ	タテハケ	
D -	-10	-+-+9.7+11.9	_	С	1E	$(8.0) \times 7.7$	A	ョコ・斜位のハケ	
_		残25.2				円か半円		タテハケ	
D -	-11	-+9.9+-+-	_	-	1D	$-\times-$		斜位のナデ	-
		残14.4	_			_		タテハケ	
D -	-12	-+8.7+-+-		-	_	-×-	_	斜位のナデ	
		残12.0	(43.6)					タテハケ	
D -	-13	-+-+-+-	(40.0)	C	_	-×-	_	ヨコハケ	-
		残14.4	_					タテ・斜位のハケ	基部外面にヘラ削り状の調
D -	-14	11.5+-+-+-	(23.4)	-	_		_	斜位のナデ	<u>基部外間にヘラ削り状の調</u>   整あり。
		57.8	(33.8)					タテハケ	
D -	-15	12.5+10.4+ 10.0+(15.7)		D	1C	円	A		基部は粘土帯で造られてい
			(26.9)			7.5×7.5		ヨコハケ	る。
D -	-16	残20.6	(32.9)	D	1B	円 ?		タテハケ	
<u> </u>		-+-+-+15.0				-×-		ヨコのヘラナデ	10 - 100-100 - 1
D –	-17	残21.5		-	1F	円	В	タテハケ	タガの調整はヘラ状の板等
<u> </u>		-+-+(12.0)+-				$7.5 \times 9.5$		斜位のナデ	を当てている。
D-	-18	残16.1	(36.4)	A	1E	半円か方形	_	タテハケ	
Ĺ		-+-+-+13.8			111	-×-		斜位のナデ	
D -	-10	残12.7	(24.9)	A	_	_		斜位のハケ	
	13	-+-+-		^		-×-		斜位のハケ	
D -	-20	残24.0	(29.8)	С	1E	円 ?	Λ	タテハケ	
- س	-40	-+-+-+14.3	_		IL	-×-	A	斜位のハケ	
Ъ	0.1	残17.6	(28.2)			_		斜位のハケ	
D -	-21	-+-+-+14.7		A	_	-×-	-	斜位のハケ	
<b> </b>		残12.5	(38.0)			_		斜位のハケ	
D –	-22	-+-+-		A	_	-×-		斜位のハケ	-
<u> </u>		残13.5	(31.3)				-	タテハケ	
D -	-23	-+-+-+-		С	-	-×-	-	斜位のハケ	+
		1 1 1 1 1			-	- X -	,	小十匹・フィーフ	
D -	-24	-+-+-+-		_	_	-	F		
						-×-	<del>'</del>	_	
D -	-25			-	_		В	_	4
		-+-+-+-	_			-×-		_	
D-	-26	残20.2		_	1C	円	A	タテハケ	
l -		-+-+10.5+-	_			8.0×8.5		斜位のハケ	
		残29.7		1	1.0	円 ?		タテハケ	
D -	-27	-+-+10.6+-		-	1E	-×-	_	斜位のヘラナデ	-

			r							
番号	器高	口縁部径	口縁部	タガ	透孔形 状 縦×横	線刻	調 整 -	外 面	備	考
# 1	各部の寸法	基部径	形状	形状		形状		内 面		
D-28	残12.2 -+-+-+-		-	_	半円? -×-	A	タテハケ 斜位のナデ			
	残10.6				円?		タテハケ			
D - 29	-+-+-+-	_	_	_	-×-	· —	斜位のハケ		/	
ř.	残11.1	(28.0)					斜位のハケ			
D - 30	-+-+-+-	_	A	_	-×-	-	ヨコハケ		•	
	残17.9	33.4	~		_		タテハケ			
D - 31	-+-+-+12.0		C ,	_	-×-	_	ヨコハケ			
	残17.2	_			半円?		タテハケの後	· ヨコハケ		
D - 32	-+-+-+-	_	_	2 A	-×-	_	斜位のハケ			
	_					N	タテハケ			
D - 33	-+-+-+-	<del>-</del>	_	_	-×-	利	_			
	残 7.5	(35.1)	~		_	•	タテハケ			
D - 34	-+-+-+-	_	C	_	-×-	_	ヨコハケ			
	残21.6	_			_		タテハケ		基部は粘土帯で造	られてい
<b>D</b> - 35	12.4+-+-+-	(28.2)	1 -	1 I	-×-		斜位のハケ		る。	
D 00	残17.2	_		1.	円 ?		タテハケ			
D - 36	-+-+-+-	_	1 -	1E	-×-	A	斜位のハケ			
D 27	残12.5	_			円 ?	Δ	タテハケ			
D - 37	-+-+-	_	] -	_	-×-	<b></b>	斜位のハケ			
D-38	_	_			_	1.	タテハケ		鹿の前足と思われ	z
D-38	-+-+-				-×-	11			底の削足と忘われ	၁ <sub>°</sub>
D-39	_	_		1.0	_	葉脈状	タテハケ			
บ – งง	-+-+-			1C	×-	*MYV	_			
D-40	<del></del>	_	A		-	W	タテハケ			
D-40	-+-+-	_	A		-×-		_			
D-41	_	_			-		タテハケ		鹿の後足付近であ	Z
D 41	-+-+-+-	_			-×-	12	_		此の仮足的姓であ	~ · ·
D-42	<b>–</b> .	_		_	_		タテハケ		鹿の前足付近であ	Z
D 42	-+-+-	_			-×-	<b>&gt;</b>	<del></del>		此の刑足門廷であ	<b>ം</b>
D-43	残 9.6	_	A	_	_	雄鹿1 頭,弓と 矢各2	斜位のハケ			
D 10	-+-+-	_	•••		-×-			ヨコナデ		
D-44	_		A	_		雄鹿の				
<b>D</b> 11	-+-+-	_	**		-×-	· ツノの 部分				
D-45	_	_	_	_	_		タテハケ		鹿の後足から胴部	の破片で
	-+-+-	_			-×-	17			ある。	
D-46	_		_	_		_	タテハケ			
	-+-+-	_			-×-					
D-47	残 6.0			_			タテハケ		基部は粘土帯で造	られてい
	-+-+-	21.3			-×-		斜位のナデ		る。	
D-48		_	_	_		葉脈状	タテハケ		   葉脈状の線刻の一	部である。
	-+-+-				-X-	21-00111			The second of the second of	
$^{-1}$ D $-49$				_	半円?	E	タテハケ		1 -	
	-+-+-+-		1	ļ	-×-		<u>*</u>			
D-50				_		*	タテハケ		-	
	-+-+-			1	-×-	个			1	
D-51	- 12			_		<b>W</b>	タテハケ		-	
	-+-+-		-		-×-	₩ 4889			<del>                                     </del>	
D - 52		_	_	_	_	葉脈状	タテハケ		_	
	-+-+-		-		_×-	-	_			
D - 53			-	-		葉脈状	<del></del>			
	-+-+-+-	<del>-</del>	-	-	-×-	-				
D - 54				-	-	葉脈状	_		<u> </u> 	
	-+-+-		<u> </u>		-×-				L	

- **E区** E区出土の埴輪は、後円部の西側で、前方部に近い位置の周湟内より出土している。以下E区で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- **E-1** 二段目から三段目にかけての破片である。タガの断面は台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **E-2** 口縁部の小破片である。直線的に立ち上り外反がない。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。朱が外面に付着している。
- **E-3** 基部下半と口縁部の大部分を欠損している。口縁部が直線的に立ち上り外反がない。タガの断面は長方形を呈する。胴部の膨らみもない。基部は下脹れになっている。透孔は半円で透孔の左側に「H」形の線刻が見られる。外面調整は斜位のハケを,内面調整は斜位のナデと一部にヨコハケを施している。
- **E-4** 基部下半を欠損する。口縁部が短かくややゆるやかに外反している。胴部の膨らみもない。タガの断面は台形を呈し,側辺は内彎している。透孔は円形で透孔の右側には「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部に連続的なョコハケ,他は斜位のハケを施している。
- **E-5** 基部の破片である。外面調整はタテのヘラ削りを行っている。一部粘土帯を作成する作業台の木目らしい一部が付いている。内面調整は斜位のナデを施している。

番	号	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	透孔 <mark>形 状</mark> 縦×横	線刻	調整外面	備考
曲	7	各部の寸法	基部径	形状	形状	逝北 縦×横	形状	河 笠 内面	/ / / / / / / / / / / / / / / / / / /
E -	_ 1	残13.5	_		1C	円か半円		タテハケ	
E-	_ 1	-+-+-+-			10	-×-		斜位のナデ	
E -	- 2	残13.6	_	A	_	_		斜位のハケ	   朱が付着している。
L	2	-+-+-+-		A		-×-		ヨコハケ	木 // / / / / / / / / / / / / / / / / /
E -	_ 2	53.4	(30.8)	A	1G	半円	Н	斜位のハケ	
15	J	12.4+9.6+ 9.8+(14.3)	(24.3)	Α	16	$8.5 \times 7.5$	11	斜位のナデ	
E -	_ 1	55.5	(30.3)	С	1C	円		タテハケ	
L	4	(11.7) + 9.6 + 10.4 + 13.9	(19.7)		10	$9.0 \times 7.5$	A	ヨコハケ	
E-	- 5	残11.2	_			_	_	タテヘラ削り	
E	J	-+-+-	(26.2)			$-\times-$		斜位のナデ	

# 7 南古墳出土の円筒埴輪

- **F区 F 区**出土の埴輪は、後円部のやや西に寄った位置の周湟内より出土している。以下、**F 区**で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- F-1 基部と二段目下半の破片である。タガの断面は長方形に近い台形を呈している。 外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- F-2 朝顔形円筒埴輪で基部と二段目下半を欠く。口縁部がやや直線的に立ち上り外 反度が少い。胴部も膨らみはない。タガは朝顔部に二本あるので五本で,断面は崩れてき ているが台形状を呈している。透孔は円形で二段目と三段目に一対づつ計四個開いている。

外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部がヨコ及び斜位のハケを施し,その他はすべてヨ コ方向の指によるナデを施している。

- F-3 口縁部と三段目の上半の破片である。口縁部はほぼ直立し、わずかに口唇部で外反する。タガの断面は三角形を呈している。透孔は一部なので形は不明であるが円形と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデとハケを施している。
- F-4 朝顔形円筒埴輪の朝顔部上半の小破片である。口縁部がやや直線的で外反度が少い。タガの断面は三角形にやや近い台形を呈する。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケを上半に、下半にはヨコナデを施している。
- F-5 口縁部の小破片である。口縁部が直立しほとんど外反がない。タガの断面は丸味を持った台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。胎土に多量の砂を含む。
- **F-6** 二段目から三段目にかけての破片である。タガの断面は丸味を持った台形を呈している,透孔は円形で,二段目に一対と三段目に一対の計四個が開いている。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケを施している。胎土は多量の砂を含み,焼成は不良である。
- F-7 口縁部の大部分と三段目等の一部を欠損する。口縁部が長く,二・三段目が詰まった感じがする。口縁部が直立しほとんど外反がない。胴部の膨らみもほとんどない。タガの断面はやや丸味のある台形を呈している。透孔は円形で,二段目に一対の計四個開いている。外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケを施している。胎土は砂質である。
- F-8 二段目から口縁部にかけての破片である。口縁部が直立しほとんど外反がない。 タガの断面はやや丸味のある台形を呈する。透孔は円形で二段目に一対,三段目に一対の 計四個が開いている。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部がヨコハケ,胴部にはヨコ ナデを呈している。F-16と同一個体と思われる。
- **F-9** 二段目から口縁部にかけての破片である。口縁部が直立しほとんど外反がない。 タガの断面は三角形に近い台形を呈している。透孔は円形で二段目に一対,三段目に一対 の計四個が開いている。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部がヨコハケ,胴部にはョ コナデを施している。
- F-10 朝顔形円筒埴輪の二段目からくびれ部迄の破片である。タガの断面はやや丸味のある台形を呈する。透孔は円形で二段目に一対、三段目に一対の計四個が開いている。 外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- F-11 基部の破片である。基部は粘土帯で造られた事が判る。粘土帯数は一枚である。 外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **F-12** タガと透孔を含む小破片である。基部の上半から二段目にかけての破片と思われる。透孔は円形である。タガの断面は丸味のある台形を呈している。外面調整はタテハケ、

内面調整は斜位のハケを施している。

- F-13 タガと透孔を含む小破片である。二段目と三段目の一部と思われる。透孔は円形である。透孔の右側に「I」形の線刻が見られる。タガの断面は三角形である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを施している。
- **F-14** 口縁部の破片である。ほぼ直線的に立ち上りほとんど外反がない。タガの断面は 三角形に近い。外面調整はタテハケ、内面調整は荒いョコナデを施している。胎土は砂質 である。
- **F-15** タガを含む小破片である。タガの断面は三角形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- **F-16** F-8 と同一個体である。
- F-17 F-9 と同一個体である。基部の最下部に底部調整状のヘラ削りが見られる。
- **F-18** F-4と同一個体である。
- F-19 基部から三段目下半にかけての破片である。タガの断面は丸味をもった台形を呈する。透孔は円形で、二段目及び三段目にそれぞれ一対づつ計四個開いている。外面調整はタテハケ、内面調整は中間部でヨコハケ、基部で斜位のナデを施している。胎土は砂質である。

番	号	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	透孔形状 縦×横	線刻		備	考
L_		各部の寸法	基部径	形状	形状	縦×横	形状		II PH	
   F-	_ 1	残22.8		_	1D			斜位のハケ	基部は粘土帯で	ぎ造られてい
1	1	11.8+-+-+-	(33.2)		ID	-×-		斜位のナデ	る。	
E	- 2	残50.8	(52.0)		1 1	円		タテハケ	朝顔形である。	透孔は2段
Г-	- 2	-+-+5.5+7. 5+4.8+16.1		A	1 J	6.6×5.5	_	ヨコナデ	目と3段目に2	ケづつ。
E	- 3	残29.0	(29.8)			円 ?		タテハケ	透孔は2段目と	: 3段目に2
F -	- 3	-+-+-+19.8		A	2 A	-×-	_	斜位のナデとハケ	ケづつあると思	<b>見われる。</b>
		残17.0	_			_		タテハケ	朝顔形である。	
F -	- 4	-+-+-	_	_	_	-×-	_	ヨコナデとハケ	F-18と同一個	国体
F.	- 5	残19.2	(29.3)		1.5	_		タテハケ	リケー・コンエルディー・ナ	. 7
F -	- 5	-+-+-+16.7	_	A	1E	-×-	_	ヨコハケ	―― 胎土は砂質であ	りる。
E	- 6	残21.6	_		1.5	円		タテハケ	リケー・コンエルディー・ナ	· 7
r -	— Б	-+7.6+6.8+-	_	_	1E	5.5×8.0	_	ヨコハケ	―― 胎土は砂質であ	) <b>る。</b>
E	- 7	50.7	(32.5)		10	円		タテハケ	基部は粘土帯1	枚で造られ
l L	- /	14.2+7.8+ 7.1+(14.6)	20.5	A	1C	6.5×8.3		ヨコナデ	—— ている。透孔に に各 2 ケづつま	らる。
E	- 8	残39.0	(24.3)	Α	10	円		タテハケ	透孔は2,3段	
F	– 8	-+(7.5)+7.1+16.5	_	A	1C	-×-		斜位のナデとヨコ	── づつある。F‐ ハケ 体である。	- 10 乙   印   一   個
	- 9	残38.8	(30.1)	A	1.1	円		タテハケ	透孔は2,3月	対目に各2分
F -	- 9	-+-+8.5+20.5		A	1J	-×-	_	ヨコナデとヨコハ	づつある。F- ケ 体である。	-17と同一個
E	-10	残32.9	_		1E	円		タテハケ	お日本石でイナフ	
F	-10	-+(6.9)+ 6.4+7.9+-	_	_	1 E	5.5×6.7		斜位のナデ	── 朝顔形である。	
F	-11	残11.0	_			_	_	タテハケ	基部は粘土帯 1	枚で造られ
L	_11	-+-+-	21.0		_	$-\times-$		斜位のナデ	ている。	
F.	-12	残20.0	_		1.0	円		タテハケ		
	12	-+8.4+-+-	_		1C	6.0×7.0		斜位のハケ		
F.	-13	残12.5	_		2 1	円 ?	Ι τ	タテハケ		
I F	_13	-+(9.0)+-+-	_	] _	2 A	-×-	I	ヨコナデ		
						ž.				

160							· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
<b>-</b> 14	残21.2		В	2A		_	タテハケ	胎土は砂質である。
F −14	-+-+-+16.2	_		ZA.	-×-		ヨコナデ	加工は砂質である。
	残 8.8	<del>-</del>	_	2A	円 ?		タテハケ	
<b>F</b> −15	-+-+-	_		ZA	$-\times-$		ヨコハケ	
<b>-</b> 10	残20.6		A	1C	-		タテハケ	F-8と同一個体である。
F −16	-+-+7.1+-	_	А	IC	-×-		斜位のナデとヨコハケ	
7 17	残37.0	_	A	1 T	_		タテハケ	F-9と同一個体と思われ
F −17	15.5+7.9+-+-	_	A	1J	$-\times$		斜位かヨコのハケ	る。
n 10	残21.2		_		_		タテハケ	F-4と同一個体である。
<b>F</b> −18	-+-+-	-			$-\times-$		ヨコハケ	朝顔形である。
F-19	残32.0	_	_	1.0	円		タテハケ	胎土は砂質である。透孔は 2,3段目に各2ケづつあ
F -19	14.6+7.6+-+-	21.5		1C	-×-		ヨコナデとハケ	る。

- **G区** G区出土の埴輪は、後円部の中軸付近の周湟内より出土している。以下G区で検出された特徴的な埴輪について述べる。
- **G-1** 基部から二段目にかけての破片である。タガの断面は三角形を呈する。透孔は円 形で、二段目及び三段目にそれぞれ一対づつ計四個が開いている。外面調整はタテハケ、 内面調整はヨコナデを呈している。
- **G-2** 朝顔形円筒埴輪の三段目上半からくびれ部にかけての破片である。タガの断面は 三角形を呈する。透孔は円形で,二段目,及び三段目に一対づつ計四個が開いているもの と思われる。外面調整はタテハケ,内面調整は斜位及びョコナデを,一部くびれ部上半で ョコハケを施している。
- **G-3** タガ及び透孔の一部を含む破片である。タガの断面は三角形を呈する。透孔の形は一部なので不明である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- **G-4** 基部の破片である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデ、一部ヨコハケを施している。基部最下にヘラ削り状の底部調整らしいものが見られる。

_									
番	号	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	<sub>添订</sub> 形 状	線刻	調整  外面	備考
H	כי	各部の寸法	基部径	形状	形状	透孔形状機	形状	<b>两</b> 安 内 面	/
٦	- 1	残24.0	_	_	2 A	円	- <u>-</u>	タテハケ	透孔は2,3段目に各2ケ
	1	(13.0) + 6.5 + - + -	19.7		ZA	-×-		ヨコナデ	づつある。
ا ر	- 2	残22.8	_		1.J	円		タテハケ	透孔は2, 3段目に各2ケ
L		-+-+7.9 +4.8+-	_		1.0	$-\times-$		斜位とヨコのナデ	づつある。朝顔形である。
ے ا	- 3	残11.8	_		2 A.	円 ?	_	タテハケ	•
L	J	-+-+-			ZA.	-×-		斜位のハケ	
ا ا	- 4	残15.5	_			_		タテハケ	基部にヘラ削り状の調整あ
L	4	-+-+-	_		-	-×-		ョコナデ一部ョコハケ	b 。

H区 H区出土の埴輪は後円部のやや東寄りの周湟内より出土している。破片がほとんどである。以下H区で検出された特徴的な埴輪について述べる。

H-1 二段目の一部を欠く。口縁部が直線的に立ち上り外反がない。タガの断面は、や や丸味を帯びた台形を呈している。透孔は円形で、二段目及び三段目にそれぞれ一対づつ 計四個が開いている。外面調整はタテハケ、内面調整は上半をヨコハケ、下半をヨコナデ を行っている。基部最下の外面にヘラ削り状の底部調整らしいものが施されている。

- H-2 朝顔形円筒埴輪の二段目からくびれ部にかけての破片である。タガの断面は三角形を呈する。透孔は円形で、二段目及び三段目にそれぞれ一対づつ計四個開いている。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。胎土は砂質である。
- **H-3** 口縁部の破片である。直線的に立ち上りほとんど外反がない。外面調整はタテハケ,内面調整は上半をヨコハケ,下半をヨコナデしている。
- H-4 二段目から口縁部下半の破片である。タガの断面は三角形を呈する。透孔は円形と思われ、二段目及び三段目に一対づつ計四個が開いているものと思う。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを施している。
- H-5 基部と二段目のわずかの部分を含む破片である。タガの断面は丸味をもった台形を呈している。透孔は一部なので不明であるが、円形と思われる。二段目及び三段目に一対づつ計四個が開いているものと思う。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを施している。基部は一枚の粘土帯よりなる。胎土は砂質である。
- **H-6** タガと透孔の一部を含む小破片である。タガの断面は三角形を呈している。透孔は円形と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- H-7 朝顔形円筒埴輪の朝顔部の破片である。タガの断面は台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。

番	号	器 高 各部の寸法	口縁部径 基 部 径	口縁部 形 状	タガ 形状	透孔形状 縦×横	線刻 形状	調整 外面 内面	備考
Н-	- 1	51.1	28.5	A	1 F	円	- NO1X	タテハケ	透孔は2,3段目に各2ケ
<u> </u>	_	15.2+6.9+ 6.6+15.7	19.8		11	6.0×8.0		ヨコナデとヨコハケ	づつある。
Н-	- 2	残27.0 -+6.6+7.1+-		_	1J	円 -×-	_	タテハケ 斜位のナデ	朝顔形で胎土は砂質である。 - 透孔は 2 , 3 段目に各 2 ケ づつある。
Н-	- 3	残11.3 -+-+-+	(32. 6)	A			_	タテハケ ヨコハケとナデ	
Н-	- 4	残25.8 -+-+8.0+-	_	_	2A	円 -×-	_	タテハケ ヨコナデ	透孔は2,3段目に各2ケ づつある。
Н-	- 5	残20.2 -+-+-+	25. 0	_	1E	円 ? -×-	_	タテハケ ヨコナデ	基部は粘土帯1枚で造られている。 透孔は2,3段目に各2ケづつある。砂質である。
Н-	- 6	残17.5 -+-+-+-		_	1F	円 -×-	_	タテハケ ヨコナデ	
Н-	- 7	残11.0 -+-+-+		_	1F		_	タテハケ ヨコナデとハケ	朝顔形である。 胎土は砂質である。

# 8, 射撃場内出土の円筒埴輪

射撃場内出土の円筒埴輪は、円墳二基の周湟内より出土した埴輪棺4基と周湟をともなわないものと思われる埴輪棺1基とこれらの付近から表採したものである。基部を欠損しているものが多い。又、埴輪棺の閉塞用に使われた破片も多数ある。射-3.54は南周

湟西ハニワ棺 A 棺,射 -4  $\sim 9$  は B 棺に,射 -10  $\sim 16$  は北埴輪棺に,射 -17  $\sim 22$  は西周湟 埴輪棺に,射 -23  $\sim 53$  は東埴輪棺に共なうものである。以下,射撃場内で検出された特徴的な埴輪について述べる。

- 射一1 口縁部がややゆるやかに外反している。胴部は二段目にわずかにふくらみが見られる。タガの断面は三角形に近い台形を呈するが高さがある。透孔は半円形で右側に[A] 形の線刻が見られる。外面調整はタテ及び斜位のハケ,内面調整は,口縁部はヨコハケ,中間部は指による斜位のナデ,その下は斜位のハケを施している。基部との接合痕が残っている。
- **射一2** 口縁部と基部を欠損しているが、タガの断面は台形を呈している。透孔は半円形と思われる。透孔の右側に「A」形の線刻の一部がみられる。外面調整はタテハケ、内面調整は、一部に斜位のナデを施してある以外は粘土ひもをつぶしたままである。
- **射 3** 口縁部がゆるやかに外反し,タガの断面は三角形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面調整は斜位のハケを施し,内面調整は,口縁部にヨコナデを,その下にヨコハケを施し,中間部には斜位のハケ、基部には斜位のハケとナデが施してある。
- **射** -4 口縁部がややゆるやかに外反する。胴部は,二・三段目にわずかに膨らみがみられる。タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形で透孔の右側には「B」形の線刻が見られる。外面調整はヨコ及び斜位のハケ,内面調整は口縁部にヨコナデを行い,その下にはヨコハケを行っている。中間部には,斜位の指によるナデを部分的に施している。
- **射-5** 三段目と口縁部の破片である。口縁部がゆるやかに外反している。タガの断面は 台形を呈している。透孔は半円形と思われる。透孔の右側には「A」形の線刻が見られる。 外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケと斜位のハケを施している。
- **射-6** 基部上半から三段目にかけての破片である。胴部にわずかに膨らみが見られる。 タガの断面は、五角形を半裁した上辺が長く、下辺が短い台形を呈している。三段目に透 孔の一部が見られ、形を推定すると半円と思われる。外面調整はわずかに斜位のタテハケ を、内面調整は斜位のハケが一部に施してある。
- **射-7** 三段目のごくわずかと口縁部の小破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。 タガの断面は台形を呈している。透孔の一部しか見られないが形を推定すると半円と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のナデを施している。
- **射-8** 三段目のごくわずかと口縁部の破片である。口縁部が大きくゆるやかに外反する。 タガの断面は長方形に近い台形を呈する。外面調整はタテハケ,内面調整は上半は連続的 なョコハケ,下半にはョコ及び斜位のナデを施している。
- **射-9** 三段目と口縁部の破片である。口縁部が水平に近く外反する。タガの断面は長方形を呈する。透孔は方形である。外面調整はタテハケ,一部に斜位のハケ,内面調整は斜

位のナデを施している。

- 射-10 口縁部がゆるやかに外反している。胴部は三段目にわずかにふくらみが見られる。 タガの断面は台形で高い。透孔は方形である。外面調整はタテ方向のハケ,内面調整は指 による斜位のナデを行っている。
- 射ー11 口縁部が鋭く外反する。口縁部から基部まで直線的に細くなる。タガの断面は三角形に近い台形を呈す。透孔は半円形である。透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面調整は斜位のハケ,内面調整は口縁部にヨコナデ,その下にヨコハケ,中間部ではヨコナデと斜位のハケを部分的に行っている。基部には指によるヨコナデを施している。
- 射-12 口縁部の外反がほとんどない。胴部は三段目にわずかにふくらみが見られる。タガの断面は台形に近く,かなり高い。透孔は楕円形である。透孔の右側に「C」形の線刻がある。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部にヨコハケを,その他は指による斜位のナデを施している。
- 射-13 口縁部が水平に近く外反する。口縁部から基部に向って直線的に細くなる。タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形である。外面調整は、口縁部をヨコナデ、中間部はタテハケ、内面調整は口縁部をヨコナデ、中間部は粘土ひもをつぶしたままである。
- 射-15 射-4と同一器形,同一技法である。
- 射一16 基部の下半を欠損している。口縁部がゆるやかに外反している。タガの断面は台 形を呈している。透孔は半円形を呈している。外面調整はタテ及び斜位のハケ,円面調整 は口縁部をヨコナデし,その下にヨコハケを,中間部は斜位の指によるナデを施している。
- 射一17 口縁部が水平に近く外反する。タガの断面は三角形に近い台形で高い。透孔は半円形である。透孔の右側に「A」形の線刻がみられる。外面調整はタテ及び斜位のハケ,基部にヘラ状のものと思われるナデの様な調整を施している。内面調整は口縁部にヨコナデ,その下にヨコハケを施し、中間部には斜位のハケを施している。
- 射-18 口縁部が水平に近く外反する。タガの断面は三角形に近い台形を呈している。透孔は半円形で透孔の右側に「A」形の線刻がみられる。外面調整はタテ及び斜位のハケ,内面調整は口縁部にヨコナデ,その下にヨコハケを施し、その他は斜位のハケを施している。基部は粘土帯のままである。
- 射-19 口縁部がゆるやかに外反し、タガの断面は台形を呈している。透孔は方形である。 外面調整はタテ及び斜位のハケ、内面調整は口縁部をヨコナデし、その下にヨコハケを施 し、粘土ひもをつぶしたままである。

- 射一20 口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は台形を呈し高さがある。透孔は方形である。外面調整はタテ及び斜位のハケを施し、内面調整は口縁部をヨコナデし、その下にヨコハケを施している。胴部は斜位の指によるナデを施している。
- 射-21 口縁部の外反がほとんどない。タガの断面は台形を呈し高さがある。透孔は不整形な円形である。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部にヨコナデを、その下にはヨコハケを行い、胴部には斜位の指によるナデを施している。
- $\mathbf{h}$  一22 口縁部と底部を欠損している。タガの断面は台形を呈している。透孔は半円形と思われる。透孔の右側には「 $\mathbf{A}$ 」形の線刻の一部がみられる。外面調整はタテハケ,内面調整は一部に斜位の指によるナデを施している以外は、粘土ひもをつぶしたままである。
- 射-23 口縁部の外反がほとんどない。胴部は二・三段目にわずかにふくらみが見られる。 タガの断面は台形に近くかなり高い。透孔は半円形である。透孔の右側に「 B 」形の線 刻がある。外面調整はタテ及び斜位のハケ,内面調整は口線部にヨコハケ,中間部は粘土 帯をつぶしたままで、基部は指による斜位のナデを施している。
- 射-24 口縁部が水平に近く外反する。口縁部から基部までほぼ直線的に細くなる。タガの断面は三角形に近い台形を呈し高い。透孔は円形である。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部にヨコハケ、中間部にはタテ方向の指によるナデを施している。
- 射ー25 口縁部の外反が著しい。胴部の二・三段目にわずかに膨らみがみられる。タガの断面は三角形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側に「 A 」形の線刻がみられる。外面調整はタテ及び斜位のハケ,基部にはヘラによるナデ状の調整を施している。内面調整は口縁部にヨコナデ,その下にはヨコハケを行っている。中間部は斜位のナデとハケを施している。
- 射一26 口縁部が鋭く外反する。口縁部から基部まで直線的に細くなる。タガの断面は長方形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側には「 A 」形と思われる線刻の一部が見られる。外面調整はタテと斜位のハケ,基部にはヘラ状のものによるナデの様な調整を施している。内面調整は口縁部にヨコナデを行い,その下にはヨコハケを施し、中間部と基部には指による斜位のナデを施している。
- 射一27 口縁部が水平に近く外反し、タガの断面は三角形に近い台形を呈し高い。透孔は 半円形である。外面調整はタテ及び斜位のハケを施し、基部にはヘラ状のものによるナデ の様な調整を施している。内面調整は口縁部にナデを行い、その下にはヨコハケを施し、 中間部及び基部には斜位の指によるナデを施している。
- 射-29 口縁部がゆるやかに外反し、タガの断面は三角形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側に「 A 」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部にはヨコハケを、その下には斜位のハケ、中間部は斜位の指によるナデを施している。

- 射一30 口縁部が短く,ややゆるく外反する。タガの断面は三角形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテと斜位のハケ,内面調整は口縁部にヨコナデを,その下にヨコハケを施し,中間部には指によるョコナデと斜位のハケを施している。
- 射一31 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。直線的に外に開いた口縁部である。外面 調整は斜位のハケ、内面調整はヨコハケと斜位のハケを施している。射一32と同一個体で ある。
- 射一33 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。射一45と同一個体である。
- 射一34 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。射一46と同一個体である。
- 射一35 三段目から口縁部下半にかけての破片である。タガの断面は長方形に近い台形を 呈する。透孔は半円形である。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射一36 二段目から三段目にかけての破片である。タガの断面は下辺が短い台形を呈する。 透孔は半円形と思われる。透孔の右側には「A」形の線刻の一部が見られる。外面調整 はタテハケ・内面調整は斜位のハケを施している。
- 射一37 朝顔形円筒埴輪の口縁部の小破片である。ゆるやかに外反する口縁部である。外面調整はヨコナデ、内面調整は上半をヨコナデ、下半にヨユハケを施している。
- 射一38 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。やや直線的に外に開いた口縁部である。 外面調整はタテハケ,内面調整はヨコハケを施している。口唇部は内外共にヨコナデを施 している。
- 射一39 二段目から基部を欠損している。口縁部は斜めに立ち上り口唇部が短かくやや鋭く外反する。タガの断面はやや三角形に近い台形を呈している。透孔は半円形で透孔の右側には「A」形の線刻が一部欠けているが見られる。外面調整はタテハケ,内面調整は口縁部にヨコナデを,その下にヨコハケを施し,中間部にはヨコ及び斜位のハケを施している。
- 射一40 基部から三段目下半にかけての破片である。タガの断面はやや角のまるみをもつ 長方形を呈する。透孔は半円形と思われる。外面調整はタテハケ、内面調整は基部にタテ ナデ、中間部は斜位のナデとハケを施している。
- 射一41 口縁部の小破片である。口縁部が短くややゆるく外反する。タガの断面は台形を 呈する。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。
- 射一42 朝顔形円筒埴輪の朝顔部である。くびれ部から外反し、口唇部で再び大きく外反する。朝顔部のくびれ部にタガが付けられている。タガの断面は台形を呈する。外面調整は斜位のハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射-43 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がややゆるく外反する。外面調整は斜位のハケ、内面調整は斜位のハケを施している。口唇部は内外共にヨコナデを行って

いる。

- 射一44 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がゆるく外反する。外面調整はタテハケ、内面調整は連続したヨコハケと斜位のハケを施している。
- 射一45 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。射一33と同一個体である。
- 射一46 朝顔形円筒埴輪の口縁部である。口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は台 形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。射一34と同一個体 である。
- 射一47 朝顔形円筒埴輪の小破片である。タガの断面は、下辺がやや短い台形を呈する。 外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。口唇部付近は内外共にヨコナデ を行っている。
- 射一48 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は、上辺、下辺が内彎する長方形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。口唇部には内外共にヨコナデを行っている。口縁部を別に造っておいて、くびれ部と接合しているが、口縁部の接合面にヘラによってキザミ目が付けられている。
- **射一49** 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は台形を呈する。外面調整は斜位のハケ,内面調整はヨコハケを施している。口唇部は内外共にヨコナデを行っている。
- 射-50 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。
- 射一51 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。
- 射-52 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。タガの断面は下辺がやや短い長方形を呈する。内外面調整共に斜位のハケを施している。口唇部にも内外面共にヨコナデを施している。
- 射-53 器材埴輪(短甲)である。
- 射一54 三段目上半より口縁部にかけて欠損している。タガの断面は三角形に近い台形を呈し高さがある。透孔は半円形と思われる。透孔の右側には「 A 」形の線刻の一部が見られる。外面調整はタテ及び斜位のハケ、内面調整は中間部に斜位の指によるナデを施し、基部は粘土帯のままである。
- 射一55 口縁部の外反がほとんどない。胴部のふくらみもほとんどない。タガの断面は台形がかった長方形を呈し高さもある。透孔は半円形である。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部にヨコハケ、中間部には指による斜位のナデを施している。
- 射-56 口縁部が水平に近く外反する。口縁部から基部まで直線的に細くなる。タガの断面は三角形に近い台形を呈す。透孔は半円形である。透孔の右側に「 A 」形の線刻がみ

- られる。外面調整は斜位のハケ,内面調整は口縁部にナデとョコハケ,中間部は斜位のハケと一部に指によるナデを施している。
- $\mathbf{h}$  一57 口縁部が水平に近く外反し、タガの断面はやや三角形に近い台形を呈する。透孔は半円形である。透孔の右側に「 $\mathbf{A}$ 」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部にヨコナデを、その下にはヨコハケを施している。
- 射一58 胴部の上半から口縁部を欠損している。タガの断面は台形を呈する。外面調整は タテハケ、内面調整は斜位の指によるナデを施している。外面基部最下にヘラ削り状の調 整痕がある。
- 射一59 基部を欠損している。タガの断面は三角形に近い台形を呈している。透孔は半円形と思われる。外面調整は斜位のヨコハケ,内面調整は口縁部にヨコナデを,その下にはヨコハケを施し、中間部は斜位の指によるナデとハケを施している。
- $\mathbf{h}$  一 $\mathbf{60}$  二段目から三段目にかけての小破片である。タガの断面は台形と,三角形に近い台形を呈している。透孔は楕円形と思われる。透孔の左側に「  $\mathbf{D}$  」形の線刻がみられる。外面調整はタテハケ,内面調整はナデと一部にタテハケを施している。
- **射一61** 二段目から三段目にかけての小破片である。タガの断面は三角形に近い台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。
- 射一62 基部上半から三段目にかけての破片である。タガの断面は台形と三角形に近い台 形を呈している。透孔は半円形と思われる。外面調整はタテ及び斜位のハケ,内面調整は 斜位のハケを施している。
- 射一66 口縁部の小破片である。口縁部がゆるやかに外反する。タガの断面は台形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射一67 口縁部から三段目上半の小破片である。口縁部が水平に近く外反する。タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形と思われる。透孔の右側に「 A 」形の線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ、内面調整は斜位のハケを施している。
- 射一68 口縁部の小破片である。
- 射-69 口縁部の小破片である。口縁部の外反がほとんどない。タガの断面は台形を呈する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射一70 口縁部から三段目上半にかけての小破片である。口縁部の外反がほとんどない。 タガの断面は台形を呈する。透孔は半円形と思われる。透孔の右側に「B」形と思われ る線刻の一部が見られる。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射一77 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。タガの断面は台形を呈する。外面調整は タテ及び斜位のハケ、内面調整はヨコハケを施している。
- 射一78 朝顔形円筒埴輪の口縁部小破片である。口縁部がわずかに外反する。外面調整は 斜位のハケ、内面調整はヨコナデを施している。

番号	器 高 各部の寸法	口縁部径 基 部 径	口縁部 形 状	タガ 形状	透孔形状 縦×横	線刻 形状	調 整 <u>外面</u> 内面	備考
射-1	47.1 12.0+8.7+ 8.7+10.5	28. 0	D	1E	半 円 8.0×5.0	A	斜位とタテハケ ョコハケと斜位のナデとハケ	基部は粘土帯1枚で造られている。A棺。
射-2	残23.5 -+9.3+-+-		_	1C	半円? -×-	A	タテハケ 粘土ひもをつぶしたまま	内面に一部斜位のナデがある。 A 棺。
 射-3	46.9 12.8+9.0+	30.0	В	1C	半 円 8.5×5.0	A	斜位のハケ 斜位のナデとハケ	A棺。
射-4	8.5+9.9 残49.1	31.5	В	1C	半 円	В	タテと斜位のハケ	B棺。
射-5	-+9.1+9.0+10.4 残27.4	(32. 6)	В	1E	8.8×6.7 半 円	A	ョコハケと斜位のナデ タテハケ	B棺。
	-+-+8.7+15.5 残28.8		_	1C	-×- 半円?	_	斜位のハケ 斜位のハケ	内面に一部斜位のハケがあ
射-6	-+9.8+-+- 残14.1	(29. 30)			-×- 半円?		粘土ひもをつぶしたまま タテハケ	る。B棺。 B棺。
射-7	-+-+-+9.5 残18.5	- (25.4)	С	1E	-×-	-	斜位のナデ タテハケ	B棺。
射-8	-+-+-+14.0	_	В	1 A	-×-	_	ヨコハケとヨコと斜位のナデ	
射-9	残24.0 -+-+(10.2) +11.0	(26.9)	С	1C	方 形 7.0×5.5	_	タテと斜位のハケ 斜位のナデ	B棺。
射-10	47.7 12.1+9.5+ 8.8+10.5	32.1 (21.0)	D	1B	方 形 6.0×5.6	_	斜位のハケ 斜位のナデ	北埴輪棺
射-11	48. 2 12. 2+9. 2+ 10. 2+10. 7	31. 7 19. 9	D	1 A	半 円 7.0×6.0	A	斜位のハケ ョコハケとヨコナデと斜位のハケ	基部は粘土帯で造られてい る。北埴輪棺。
射-12	50.8 12.5+10.0+ 9.7+11.3	30. 5 22. 4	A	1E	楕 円 7.5×8.0	С	タテハケ ヨコハケと斜位のナデ	基部は粘土帯1枚で造られている。北埴輪棺。
射-13	51.8 13.8+9.9+ 10.0+10.6	(27.8)	C	1E	半 円	_	タテハケ	基部は粘土帯で造られてい
射-14	50.7	20.4	D	1C	8.0×6.0 半 円	A	粘土ひもをつぶしたまま タテと斜位のハケ	る。タガの高さがあまりない 北埴輪棺。
射-15	14.6+9.5+ 8.4+10.6 (50.2)	23.7 (30.8)	С	1E	8.0×5.5 半 円		ョコハケと斜位のハケとナデ タテハケ	北埴輪棺。
	(12.5) +9.5 +9.5+11.1 残45.5	(24.0) $(27.6)$			7.5×8.0 半 円		ョコハケとョコと斜位のナデ タテハケ	北埴輪棺。
射-16 	-+9.4+8.6+9.9 47.0	- 29.1	В	1E	6.5×7.5 半 円		ョコハケと斜位のナデ 斜位のハケ	基部は粘土帯1枚で造られている。
射-17	12.7+8.4+ 8.3+9.4	22.7	D	1C	8.3×4.7	A	ョコ、斜位のハケ	外面基部にヘラケヅリの調整あり。
射-18	45.5 12.0+8.3+ 8.5+10.5	22. 0 18. 4	C	1C	半 円 6.0×4.0	A	タテと斜位のハケ ヨコハケと斜位のハケ	基部は粘土帯1枚で造られ ている。西周湟埴輪棺。
射-19	残44.3 -+9.7+ 9.3+(10.6)	(28.8)	С	1F	方 8.0×6.7	_	タテと斜位のナデ ヨコハケと粘土ひもをつぶしたまま	西周湟埴輪棺。
射-20	残38.7 -+9.0+ 8.5+(12.0)	(29.4)	С	1В	方 形 7.6×5.3	_	タテと斜位のハケ ヨコハケと斜位のナデ	西周湟埴輪棺。
射-21	49.0	26.1 (18.7)	A	1B	円 8.0×8.0	_	タテハケ ヨコハケと斜位のナデ	基部は粘土帯で造られてい る。西周湟埴輪棺。
射-22	残32.3	_	_	1H	半円	A	タテハケー部斜位のナデ	西周湟埴輪棺。
射-23	-+9.3+ $(8.9)+ 50.6$	33. 2	A	1C	(8.0)×6.0 半 円	В	タテと斜位のハケ	東埴輪棺。
射-24	13.1+9.0+ 9.0+12.1 (50.0)	(22.5) 27.5	C	1C	8.0×7.5 円	-	ョコハケと斜位のナデ タテハケ	東埴輪棺。
射-25	$ \begin{array}{c} (12.5) + 8.8 \\ + 8.9 + 12.4 \end{array} $ $ (49.9) $	20.5	D	1C	8.7×6.0 半 円		ョコハケとタテナデ タテと斜位のハケ	外面基部にヘラ削り状の調
	$\begin{array}{c} (12.7) + 9.6 \\ + 9.7 + 10.4 \end{array}$ $50.6$	(22.1) 29.6			8.0×4.7 半 円	A	ョコハケと斜位のハケ タテと斜位のハケ	整あり。東埴輪棺。 外面基部にヘラ削り状の調
射-26	11.8+10.0+ 9.7+12.1	(24.9)	C	1G	8.0×6.5	A	ヨコハケと斜位のナデタテと斜位のハケ	整あり。東埴輪棺。 基部は粘土帯1枚で造られている。
射-27	50.5 13.0+9.6+ 10.3+11.5	(23. 9)	D	1C	手 円 7.3×6.5			本部は柘工帝 I 枚 で這られている。   外面基部にヘラ削り状の調整あり。

	器高	口縁部径	口縁部	タガ	44 泺	線刻	知 數 外面	
番号				形状	1 +0: J	形状	湖 登 内面	備考
射-28	_		В	_	_		ヨコナデ	朝顔形で口唇部の小破井で
,, 40	-+-+-+-				-×-		ヨコナデ	ある。東埴輪棺。
射-29	残38.5	29.8	С	1В	半 円	A	タテハケ	東埴輪棺。
	-+8.0+8.5+9.9 (48 9)				7.5×5.0 平 田		斜位のハケとナデ	<b>車</b> 協齡均
射-30	(48. 9) (13. 0) + (8. 8) +9. 3+11. 1	(23.1)	С	1C	半 円 8.0×5.5	A	タテと斜位のハケョコハケとヨコナデとハケ	東埴輪棺。
	(13.0) + (8.8) +9.3+11.1 残10.5	(23.1) (56.2)			8.0×5.5 —	<del></del>	ヨコハケとヨコナデとハケ   斜位のハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
射-31		(56. 2)	В	_ <u> </u>		+   −   †	斜位のハケ   コと斜位のハケ	」朝顔形である。東埴輪棺。 ┃ ┃射−32と同一個体
<u></u>		_	-			+	ヨコと斜位のハケ	
射-32	-+-+-	_	В	-		1 - 1	ョコと斜位のハケ	- 射-31と同一個体東埴輪棺。
<u></u>		· <u>-</u>			_		タテハケ	射二451日 四月十二十二
射-33	-+-+-		_		-×-	)	ヨコハケ	- 射-45と同一個体東埴輪棺。
射-34	_	_			_		タテハケ	- - 射-46と同一個体東埴輪棺。
3, -34	-+-+-	_			-X-		ヨコハケ	
射-35	残23.4			1C	半円	_	タテハケ	東埴輪棺。
- 50	-+-+(9.5)+- 建25_0	_			-×- 	<u> </u>	ヨコハケ	市協岭均
射-36	残25.0 -+(9.5)+9.2+-	_		1 C	半円?	A	タテと斜位のハケ 斜位のハケ	東埴輪棺。
	-+(9.5)+9.2+- 残 4.9	(47.0)	<del></del>	<b></b>	-x-	<del> </del>	WILL WATER	
射-37	残 4.9	(=1.0)	В	· - +		1 - 1	ヨコハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
<b>6</b> '	残10.3	(51.0)	-	<del>-  </del>	1 - 1	+	タテハケ	古口立二十一
射-38	7天10.3		В			1 1	ヨコハケ	- 朝顔形である。東埴輪棺。
計 ^	残29.0	(31.4)		1 -	半円?		タテハケ	東埴輪棺。
射-39	-+-+9.7+11.8	_	С	1E	-×-	A	ヨコと斜位のハケ	
射-40	残33.8		1 _	1C	半円?		タテハケ	東埴輪棺。
-40	10.3+9.5+-+-	- (04.0)			-×-		斜位のナデとハケ	
射-41	残16.1	(34. 2)	С	1E	半円?	_ 1	タテハケ	東埴輪棺。
,	-+-+-+12.8 建10.2	<del> </del>	<u> </u>		-×-	<del>                                     </del>	斜位のハケ	
射-42	残19.2 -+-+-+15.3	(39.5)	В	1G	<u> </u>	<b>{</b> − +	斜位のハケョコハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
	残12 0	(49.9)		<del>                                     </del>	-×-	+	ョコハケ 斜位のハケ	
射-43	残12.0 -+-+-+		В	I — 1		1 - 1	斜位のハケ   ヨコと斜位のハケ	- 朝顔形である。東埴輪棺。
<b>6</b> 1	建 9 0	(45. 8)	_	<del>                                     </del>		1	斜位のハケ	お日本エアノー・
射-44	-+-+-	(43. 8)	В	[_ = _ i		,	ョコと斜位のハケ	一 朝顔形である。東埴輪棺。
<u></u> 自十 ·	残17.0	_	p	15			タテハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
射-45	-+-+-+12.0	_	В	1E	-×-		ヨコハケ	射-33と同一個体
射-46	残14.5	(48.3)	- В	1D			タテハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
,, 40	-+-+-+10.2				-×-	-	ヨコハケ	射-34と同一個体
射-47	残13.2	_	_	1D	-	-	タテハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
	-+-+ 建11 1	(4E 0)			-×-	-	ヨコハケ	射-42,44と似ている。
射-48	残11.1	(45. 0)	В	1 D		1 - 1	タテハケ ヨコハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
	<del>建</del> 16 5	(46.5)	+	<del> </del>	-×-	+	<b>ヨコハケ</b> タテハケ	
射-49	残16.5 -+-+-+12.0		В	1D		-	<i>タ</i> ァハケ ヨコハケ	朝顔形である。東埴輪棺。
A_L		_	<u> </u>	†		<del>                                     </del>	タテハケ	古日本下
射-50	-+-+-	_	В	_	-×-		ヨコハケ	一 朝顔形である。東埴輪棺。
<u></u> 自.+	_			1.0			タテハケ	- 胡笳恥でます 一
射-51	-+-+-+-	_		1D	-×-	_	ヨコハケ	一 朝顔形である。東埴輪棺。
射-52	残11.4	_		1D		_	斜位のハケ	
-52	-+-+-			יח	-×-	<u></u>	ヨコハケ	
射-53	(49.2)	(30.8)	· - ·	-	円	1 -	タテハケ	一 短甲である。東埴輪棺。
!	-+-+-+- 残32.5	(20.0)	-	-	-X- 华田?	-	斜位のハケ	
射-54	残32.5	(21.0)	<del> </del> -	1C	半円?	A	タテハケ	_ 基部は粘土帯で造られてい _ A A 棹。
L	12.4+8.4+-+-	(21.8)	Ц		$-\times$		斜位のナデ	る。A 棺。

番号 1	器 高 各部の寸法	口縁部径				私民公田		1
44 55 L	11 DD V 3 1 A 1	基部径	口縁部	タガ 形状	透孔 形 状 縦×横	線刻 形状	調整 外面 内面	備考
射-55	残33.3	(29.4)			円と半円	712 15.	タテハケ	
33   -	-+8.7+9.0+11.7	Δ	. A	1 A	8.0×5.5	-	ヨコハケと斜位のナデ	
	52.0	(30.4)			半円	A	斜位のハケ	
射-56 1	13.5+10.0+ 9.9+11.2	(20.2)	C	1 C	8.0×6.0		タテナデと斜位のハケ	1 /
	47.6	25.6			半 円		タテハケ	基部は粘土帯で造られてい
射-57 1	$ \begin{array}{c} 12.3 + 8.2 + \\ (9.2) + 10.9 \end{array} $	(23.5)	D	1 A	$9.0 \times 4.5$	A	ヨコハケと斜位のハケ	る。
41 E0	残29.0	_		1 D	_		タテハケ	基部外面にヘラ削り状の調
射-58-	(13.5) + (9.7) + - + -	(22.7)		1 B	-×-		斜位のナデ	整がある。
射-59	残38.8	(31.0)	C	1 C	半円	_	斜位のハケ	
311 00 -	-+(8.4)+(8.7)+(9.8)	_			-×-		ヨコハケと斜位のナデ	
射-60	残22.5		_	1 E	楕円?	D	タテハケ	
41 -	-+-+9.7+-	_		115	$(7.0)\times(5.3)$	<i>D</i>	ナデと斜位のハケ	
射-61	残19.5		_ '	1C	_	_	タテハケ	
	-+9.3+-+-				-X-		斜位のハケ	
射-62	残28.9		_	1C	半円?	_	斜位のハケ	-
	-+9.3+-+-				-×-		斜位のハケ	<u> </u>
射-63			_	1C		_	タテハケ	v e t
	-+-+-				-×-		タテハケ	
射-64			_	1C		_	_	-
							タテハケ	
射-65	-+-+-		_	1C	-×-	_	_	<del>-</del>
	残13.0	(29.3)					タテハケ	
射−66  -	-+-+-+9.0	_	В	_	_×-	_	ヨコハケ	-
41	残17.0	(32.3)			半円?		タテハケ	
射-67 -	-+-+-+9.8	_	C	1C	-×-	Α	ョコと斜位のハケ	
#1 00	_	. —			_	_	斜位のハケ	
射-68-	-+-+-	_	С		-×-	_	_	
射-69	残11.3	(19.8)	A	1 A	_	_	タテハケ	
ay 03 -	-+-+-+8.6	_	11	IA	-×-		ヨコハケ	
射-70-	残15.2	(25.9)		1E	半円?	В	タテハケ	
41 10 -	-+-+-+10.8	_	A	1E	$(8.0) \times -$	ь	ヨコハケ	
射−71 -			C	1E		_	タテハケ	
-	-+-+-		-		_×-		_	
射-72-			С	1C	_	-	斜位のハケ	<u> </u>
	-+-+-				-×-		-   カニハト	
射-73	-	_	D	1D		-	タテハケ	-
	_+-+-			-		-	斜位のハケ	
射-74	-+-+-		С	1C		-	小山立のバラ	
		_			_		タテハケ	
射-75	-+-+-	_	C	1C	-×-	-		
61		_				-	タテハケ	
射-76	-+-+-	_	-   -		-×-	-	_	
61	残13.0	_		1.0	_		タテと斜位のハケ	+U+CT( - 1 - 7
射-77	_+-+-	_	- 1C		-×-		ヨコハケ	朝顔形である。
曲 70	残11.8	_			_		斜位のハケ	却如びいったって
射-78-	-+-+-	_	1 -	_	-×-	-	ヨコハケ	朝顔形である。

#### 9 埴輪棺に使用された円筒埴輪

埴輪棺に使用された円筒埴輪は、一号棺は西古墳と南古墳の東方中間点より出土し、二号棺は一号棺よりさらに東方より出土している。以下埴輪棺に使用された埴輪について述べる。

- 棺一1 基部から口縁部までほぼ直線的に立ち上る。口縁部の長さが一番長く,わずかに基部が短い。二段目,三段目がほぼ同じくらいで全体的に見るとつまっている。タガの断面は三角形に近い台形を呈している。透孔は円形で,二段目及び三段目に二個づつ計四個である。外面調整はタテハケで,口唇部はその後に横ナデを行っている。内面調整は三段目の透孔から上はヨコ方向のハケ,その下は斜めョコ方向の指によるナデが施してある。外面の基部と内面の三段目透孔より下をのぞいて,朱が付着している。基部は粘土帯で整形され数は一枚である。
- 棺一2 基部から口縁部まで直線的に立ち上る。口縁部の長さが一番長く,二段目,三段目が圧縮されているように見える。タガの断面は三角形に近い台形を呈す。透孔は円形で,二段目の一対と三段目の一対が直交する形で計四個開いている。外面調整はタテハケで,口唇部はその後にヨコナデを施している。内面調整は口唇部をヨコ方向にナデて,それ以下はヨコ,あるいは斜めヨコ方向に指でナデを施す。外面の二段目より上と内面の口縁部上半に朱が付着している。基部は粘土帯で整形され,数は一枚である。棺一1と対になっていた。
- 棺一3 口縁部がわずかに外反し,口唇部はわずかに内反する。口縁部が長く,二・三段目が短い。タガは三本で断面は三角形に近い。透孔は円形で二段目の一対と三段目の一対が直交する形で計四個開いている。外面調整は全面剝落が著しいが,口唇部はヨコ方向のナデを施し,それ以下は指によるナデの後にハケを施している。内面調整は口唇部をヨコ方向のハケを,それ以下は指によるナデを施している。一号ハニワ棺の閉塞用に破って用いられた。
- 棺一4 ゆがみが大きいが基部から口縁部に直線的に立ち上る。口縁部はわずかに外反する。タガは三本でほぼ台形を呈す。透孔は円形で二段目の一対と三段目の一対が直交する形で,計四個開いている。外面調整は口唇部がヨコナデで,それ以下はタテハケが施されている。内面調整は口唇部をヨコナデ,胴部をヨコ方向のハケ,基部は指によるナデを施す。内,外面の口縁部に朱の付着が見られる。外面基部最下にヘラ削り状の痕がある。
- 棺一 5 口縁部がわずかに外反するがほぼ直線的に立ち上る。口縁部が長く,二段目,三段目が短くつまった感じである。タガは三本で,ほぼ三角形である。透孔は円形で二段目の一対と三段目の一対とが直交する様に,四個が開いている。外面調整はタテハケを施し、口唇部はその後にヨコナデを施している。基部最下にヘラ削り状の痕が見られる。内

面調整は口唇部をヨコナデし、口唇部以下の口縁部はヨコハケを、それ以下には指による 斜めヨコ方向のナデを施している。二号埴輪棺の閉塞用として使用されている。

棺一 6 口縁部がわずかに外反する。口縁部が長く,二段目,三段目が短くつまった感じである。タガは三本で三角形に近い台形である。透孔は円形で二段目に一対と三段目に一対あり,直交する様に計四個開いている。外面調整はタテハケを施し,口唇部にその後にョコナデを行っている。内面調整は口唇部はョコナデをその下の口縁部はョコハケを行い,それ以下には指による斜めョコ方向のナデを施している。二号埴輪棺の閉塞用として使用された。

棺一7 口唇部をすべて欠損している。底部から直線的に立ち上る。タガは三本で断面は 稜がはっきりした台形を呈し,透孔は円形で,二段目の一対と三段目の一対が直交する。 外面調整はタテハケを施し,内面調整は口縁部は不明であるが,他は斜めョコ方向に指に よってナデを施している。

				,					
番	异	器 高	口縁部径	口縁部	タガ	★71形 状	線刻	調整外面	備考
毌	J	各部の寸法	基部径	形状	形状	透孔形状 縦×横	形状	一 内面	/ / / / / / / / / / / / / / / / / / /
棺-	1	67.8	37.6			円		タテハケ	棺-2とセットである。
16	1	22.0+11.5+ 11.0+23.5	27.0	A	1F	8.5×7.0		ヨコハケとヨコナデ	朱が付着している。
棺-	- 2	59. 2	34.2	В	1F	円		タテハケ	棺-1とセットである。
作		15.8+8.0+ 8.2+19.7	26.6			$6.6 \times 6.2$		ヨコナデ	朱が付着している。
棺-	2	56.7	29.2	A	2 A	円		タテハケ	棺-1,2の閉塞に使われ
16	- 3	15.5+10.3+ 8.8+16.8	(24.0)			8.0×7.0		ョコハケとナデ た。	tz.
棺-	_ 1	58. 2	33.0	A	1F	円		タテハケ	棺-7とセットである。
16	3 - 4	15.4+9.0+ 11.0+16.7	23.2			$6.5 \times 7.2$		ヨコと斜位のハケ	相一「こセットである。
棺-	_ 5	52.4	33.6	A	2 A	円		タテハケ	棺-4,7の閉塞用である。基部
16	– ၃ –	13.5+7.2+ 5.7+19.0	21.2			6.6×5.0		ヨコハケと斜位のナデ	外面にヘラ削り状の調整あり。
棺-	_ 6	52.0	(31.5)		1.5	円		タテハケ	棺-4,7の閉塞用である。
116	- 6	12.3+7.0+ 6.8+18.3	(14.0)	A	1F	$6.7 \times 5.0$	_	ヨコハケとヨコナデ	相一4,「の闭塞用である。
始	<b>-</b> 7	残43.1	_		1.5	円	_	タテハケ	相一4とセットである。
115		14.1+7.0+6.9+-	18.7		1F	6.5×5.5		斜位のナデ	作一4こセットじめる。

# 10 参考資料の埴輪

参一1 二段目上半から口縁部にかけての破片である。この埴輪は発見・所有者の山崎三郎氏の話しによると参一2と共に鹿の線刻が描かれている埴輪棺の閉塞用に用いられていたらしい。口縁部が短かく外反する。タガの断面は台形で側辺と下辺が内彎している。透孔は円形で,透孔の右側に「A」形の線刻が見られる。外面調整はタテハケ,内面調整はヘラ削りに近いナデを口縁部に,中間部には指によるナデを施し,口唇部には内外共にヨコナデを施している。朱彩されている。

参一2 基部上半から口縁部にかけての破片である。参一1と共に鹿の線刻が描かれている埴輪棺の閉塞用に用いられていたらしい。直線的に開いた口縁部である。タガの断面は台形を呈する。透孔は楕円形を呈している。外面調整はタテハケ、内面調整は口縁部をヨ

コハケ、中間部には斜位の指によるナデを施している。口唇部は内外共にョコナデを施 ている。

- 参一3 予備調査で西古墳前方部より出土した朝顔形円筒埴輪のくびれ部上半から口縁部下半の破片である。タガの断面はくびれ部が三角形、朝顔部が台形を呈している。外面調整はタテ及び斜位のハケ、内面調整は斜位のハケとナデを施している。断面を観察すると、作業工程が判る。くびれ部上半は先ず芯になる部分を造ってくびれ部下半と接合させ外側はタガで補強し、内側は薄く粘土を張って補強している。朝顔部との接合部は、接合面を大きくする為に断面は斜めになっている。くびれ部の方に接合を強くする為にへうで刺突している。外面はタガを付け補強している。
- 参一4 予備調査で西古墳前方部より出土した。朝顔形円筒埴輪のくびれ部付近の破片である。円筒部のタガの断面は台形を呈する。外面調整はタテ及び斜位のハケ,内面調整はョコ及び斜位のナデを一部分にはョコハケを施している。
- 参一 5 基部から三段目の一部にかけての破片である。塚山古墳後円部の墳頂平坦部の盛土より一部露呈していた。タガの断面は台形を呈している。透孔は円形で二段目及び三段目に二個づつ計四個開いている。外面調整の基部はタテハケ,二段目は一次調整にタテハケニ次調整に連続的なヨコハケ (B種ヨコハケ) を施している。内面調整は斜位のナデを施している。外面基部にヘラ削り状の調整がある。
- 参一6 塚山古墳前方部の斜面中程の盛土中より出土した小破片である。外面調整はタテハケの後に連続的なヨコハケを施している。内面調整はヨコナデを施している。
- 参一8 笹塚古墳後円部の墳頂平坦部に露呈していた小破片である。口縁部が短かく外反する。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコナデを施している。口唇部は内外共にヨコナデを施している。
- 参一 9 射撃場内古墳出土の朝顔形円筒埴輪の小破片である。朝顔部の下部にあたる破片 と思われる。くびれ部との接する面にはヘラで刺突されている。外面調整はタテハケ,内 面調整はヨコナデを施している。

番	异	器高	口縁部径	口縁部	タガ	*************************************	線刻	調整一外面	備考
	b	各部の寸法	基部径	形状	形状	透孔 <mark>形 状</mark> 縦×横	形状	内面	/相 一 一
<b></b>	- 1	残34.0	33.8		1 A	円	Λ.	タテハケ	鹿の線刻のあるハニワ棺の閉塞用
9		-+-+10.3+13.6	-	С		$8.5 \times (8.0)$		ヨコナデ	である。朱が付着している。
#	- 2	残43.1	38. 2	A	1 A	円		タテハケ	鹿の線刻のあるハニワ棺の
		-+10.9+ $10.1+13.0$	_			$10.0 \times 7.0$		ヨコハケ・ヨコナデ	閉塞用である。
*	- 3	残13.8		_	1C	<del>-</del>		タテ及び斜位のハケ	造り方が断面で良く判る。
<b>少</b>		-+-+- +5.2+-	_			$-\times-$		ヨコハケ・斜位のナデ	短り刀が側囲で及り刊る。
参-	- 4	残19.9			1C	—, ·		タテハケ	
		-+-+- +7.5+-	_			T×-		ヨコハケとヨコナデ	

	残31.2	_		1E	円		タテハケの後ヨコハケ	透孔は2,3段目に各2個
参-5	14.6+10.2+-+-	28.1	_	IE	$8.0 \times 7.2$	_	斜位のナデ	づつ計4個開いている。
4 6	残12.2	_		_	_		タテハケの後ヨコハケ	塚山古墳出土。
参一6	-+-+-	_			$-\times-$		ヨコナデ	<b>冰</b> 田口垻山上。
# 7	残20.0	_	- 1G	1.0	-×-		タテ及び斜位のハケ	<b>笹塚古墳出土。</b>
参-7	-+-+-	_		_		ヨコハケとヨコナデ	世	
40	残 8.1		С –	_	$-\times-$		タテハケ	<b>笹塚古墳出土。</b>
参-8	-+-+-				_		ヨコナデ	世外口項山工。
参一9	_	_	_				タテハケ	射撃場古墳出土。朝顔形であ
	-+-+-	_		-×-		ヨコナデ	る。接合の仕方が良く判る。	

#### 11 遺物のまとめ

- 1 塚山古墳群出土の円筒埴輪分類
- (1) 口縁部の形態 本古墳群出土の円筒埴輪の口縁部形態は,大別すれば四種に分類できる。すなわち,A最上段タガから口縁部まで逆八字形に直線的に外反する例で,射-12・23・55,B-9・10・16などに見られる。又,埴輪棺に用いられたものと南古墳出土のすべての円筒埴輪がこれに属する。B最上段タガから口縁端まで逆八字形に緩やかに外反する例で射 $-3\sim5$ ,C-10・17などに見られる。C口縁部が短かくややゆるやかに外反する口縁部をもつもの,射-13・15・59,A-2,B-12・15などに見られる。D口縁部がCよりやや長く水平に近く外反する口縁部をもつもの射-11・14・17,D-15・16などがそれである。
- (2) タガの形状 本古墳群出土の円筒埴輪のタガの形状は大別すれば二種,細分して九類型とすることができる。すなわち 1 A 上辺がなだらかなカーブを描き側辺は斜め直線か内彎し下辺は水平になる。 1 B 上辺,下辺は 1 A と同じで側辺が垂直か内彎するかのどちらかである。 1 C 上辺が水平で側辺は斜めに内側に内彎するか直線で下辺はなだらかである。 1 D 上辺,下辺は 1 C と同じで側辺が垂直か内彎している。 1 E 上辺,下辺共になだらかなカーブで側辺は垂直か内彎している。 1 F 上辺,下辺がなだらかなカーブを描き側辺は内側に斜めに直線か内彎する。 1 G 上辺,下辺が水平で側辺は垂直か内彎する。 1 H 上辺,下辺が右下がりに直線で側辺は垂直あるいは内彎する。 1 J 上,下辺がなだらかなカーブを描き側辺は外側に出る様に直線か内彎する。 1 J 上,下辺がなだらかなカーブを描き,側辺は丸みをもっている。 2 A 側辺がほとんどなく断面が直角三角形か正三角形を呈する。
- (3) タガの調整 タガの調整はヨコナデによる。ナデのさいには布裂や鹿皮などを指に添えたと考える。タガの調整をヨコナデ以外の技法によって行なうこともある。川西氏のいう押圧技法,断続ナデ技法である。これらの技法以外の技法を施しているのに塚山西古墳出土のA-1, $D-1 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 17$ 及び鹿の線刻画のある埴輪には板状のものを当てている。この為にヨコハケの様な痕が付く。A-1は工具を止めた痕が良く判る資料である。この様な技法の埴輪に塚山古墳出土(資-2)のものもあり時間的にはかなりの長い間に

渡ってある技法である。地域的には今のところ報告例がないと思われるので当地方のもの と判断する。

- (4) 外面調整 タガを貼付する以前の調整を一次調整,貼付後の調整を二次調整とするのが一般的である。南古墳,射撃場内古墳,埴輪棺に用いられた埴輪はすべて二次調整を欠くものであり一次調整の縦及び斜位のハケ目痕をとどめる。西古墳の二片と参考資料の塚山古墳出土の埴輪には二次調整が認められる。ヨコハケをのこすもので一次調整のタテハケはほとんど看取できない。工具を何回か静止させながら一周させた(川西氏のいうB種ョコハケ)ものである。基部最下にヨコ方向の削りを施してあるものがあり,A-7,B-15, $C-2\cdot15\cdot20$ , $D-9\cdot14$ ,F-17,G-4,H-1,射 $-17\cdot25\cdot26\cdot27\cdot58$ ,棺-4,参-5,線刻により鹿が描かれている埴輪とセットの「 $\times$ 」形の線刻のある埴輪がこれにあたる。時間的にも比較的長い時間ある技法といえる。この様な技法は今迄の底部調整技法からはずれるものである。実見していないが埼玉県城戸野第 1 号墳の円筒埴輪はこれと同じ技法かもしれない。
- (5) 透孔 孔の形には円形,半円形,方形の三種が確認された。射撃場内古墳出土の埴輪は半円形が23例,方形が4例,円形が2例であるのに対し西古墳は円形が8例,半円形が7例で円形の透孔のしめる割合が多くなる。南古墳,埴輪棺に用いられた埴輪,塚山古墳の埴輪は円形で2・3段目に1対づつ計4個の透孔をもつ。他古墳の透孔とは形・数の点から異なる。以上の結果から透孔は塚山古墳の円形から射撃場,西古墳の半円形,方形へとなりそして南古墳,埴輪棺に用いられた埴輪になると再び円形に戻るという事になり,数のうえでも2・3段目に一対づつ計4個から3段目に2個となり再び2・3段目に一対づつ計4個へと戻ることになる。
- (6) 線刻の形状 透孔の左又は右にヘラ書きされた埴輪は射撃場内古墳と西古墳出土の埴輪であるが南古墳にも1例認められる。射撃場内古墳では「 $\Delta$ 」形が18例,「 $\times$ 」形が3例,「A」形が1例,「(((()」形が1例である。西古墳では「 $\Delta$ 」形が12例,「 $\times$ 」形が1例,「((()」形が2例づつ,「()」・「()」形が1例づつあり多様化の傾向がうかがえる。南古墳の1例は「())」形である。

#### 2 塚山古墳群の年代について

塚山古墳、塚山西古墳、塚山南古墳、射撃場内の二基の円墳と一基の埴輪棺、鹿の線刻のある埴輪棺、1号埴輪棺、2号埴輪棺のそれぞれの年代についてであるが、塚山古墳は末調査、西・南古墳は周湟の一部を調査したにすぎないし、それぞれの埴輪棺は副葬品がない等から出土遺物の埴輪から年代を求める所が大きい。本来、年代を考えるには主体部副葬品のセット・墳形等を合わせて考えなければならないが現段階で埴輪の分類をもとに得た結果から考えて見る。各古墳の埴輪を見るとまず二次調整B種ヨコハケをもつ塚山古墳が一番古く考えられる。一方器形、タガ、透孔の数から見て明らかに新しいグループが

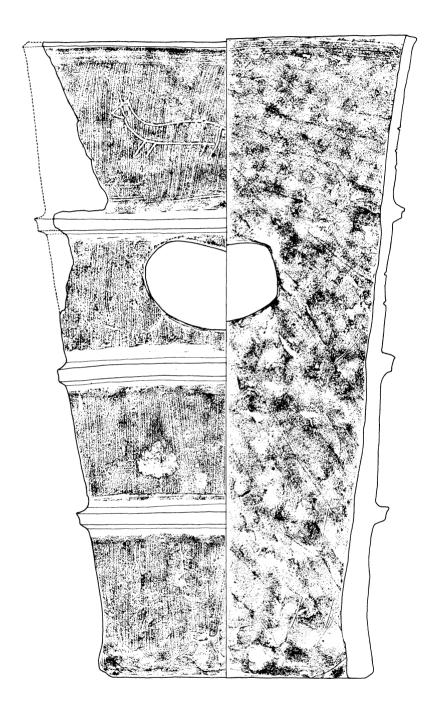
ある。それは塚山南古墳、1号埴輪棺、2号埴輪棺である。これらの埴輪は器形において は口縁部の外反がまったくないし、2・3段目の幅が口縁部、基部と比べてかなり狭くな っている等の異いがある。タガの断面も三角形を呈する様になってきているし、透孔はす べて円形で2・3段目に一対づつ計4個という様な変化をしてきている。これらの特徴か ら6 C中葉と考える。塚山古墳の一次調整タテハケ,二次調整 B種ヨコハケ,タガの断面 が高く台形状を呈し、タガ間の透孔数が2個、黒斑がない等を考えると5℃末と考える。 射撃場内円墳2基と埴輪棺1基の年代はそれぞれの埴輪の特徴が同じである所から同年代 と考える。外面調整の一次調整がタテハケ、二次調整を欠くし、タガの断面が台形、タガ 間の孔数が2個,透孔の形状が円,半円,方形であることから6℃前葉と考える。前記の 埴輪と比較してあまり時間的に差がないのが塚山西古墳の埴輪である。新しい要素はタガ の断面形がややくづれた台形になって来ているのと口縁部の外反するものが量的に少なく なって来ていることである。前方部周湟内出土の須恵器、土師器等を含めて考えると6℃ 前葉の新しい時期と考える。射撃場内の古墳を6℃前葉古と考える。塚山西古墳出土埴輪 片の中に鹿の線刻のある破片が多数出土したがこれらの技法は鹿の線刻のある埴輪棺の埴 輪と同一技法である。このことより年代は塚山西古墳と同じ6C前葉新と考える。又塚山 古墳群と近い参考資料の笹塚古墳の年代については資料の埴輪の口縁部形状、タガの形状、 墳形等から塚山西古墳とあまり時間的に前後がない6C前葉新と考える。

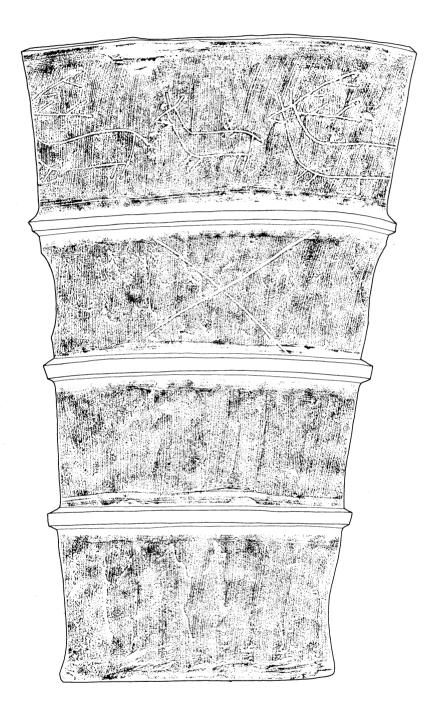
(石川 均)

# 図 版 目 次

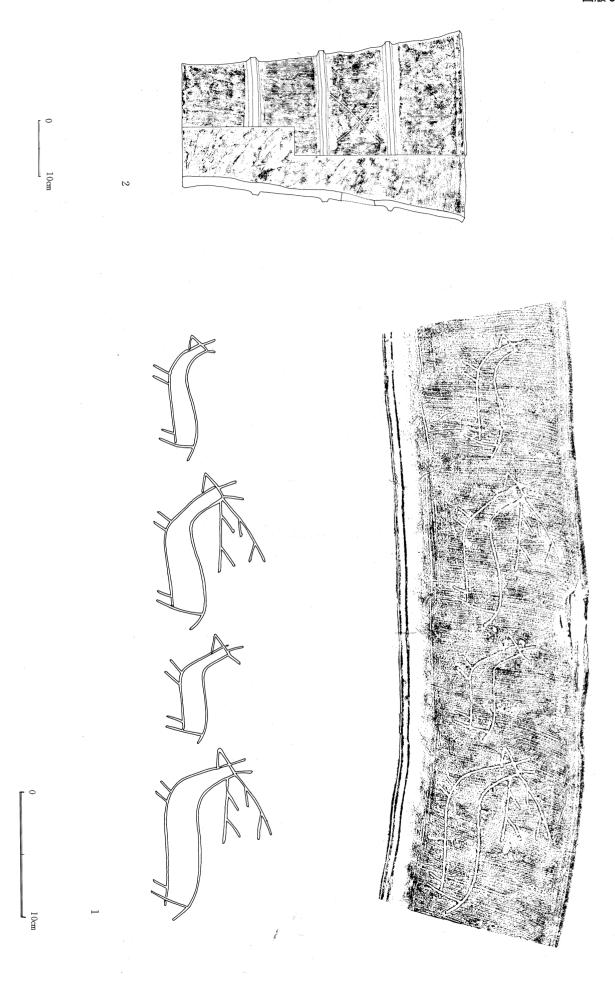
鹿の線刻のある埴輪	
短甲形埴輪	図版 4
西古墳出土の埴輪	図版 5 ~12
南古墳出土の埴輪	図版12~15
射撃場内古墳出土の埴輪	図版15~21
埴輪棺に使用された円筒埴輪 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	図版21~22
参考資料の埴輪	図版23
写真目次	
塚山古墳群全景	
塚山西古墳及び南古墳全景	写真2~3
塚山西古墳全景及び西古墳調査区全景	
塚山西古墳遺物出土状況	
塚山南古墳周溝	写真7
射擊場內古墳埴輪棺出土状況	
1号埴輪棺出土状況	写真10
2号埴輪棺出土状況	
土師器及び須恵器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
動物埴輪	写真13
短甲形埴輪	
鹿の線刻のある埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
西古墳出土の埴輪	写真17~27
南古墳出土の埴輪	写真28~31
1号及び2号埴輪棺	
射撃場内古墳出土の埴輪	写真33~39
<b>关</b> 本次则 o + 5 + 6	写古40

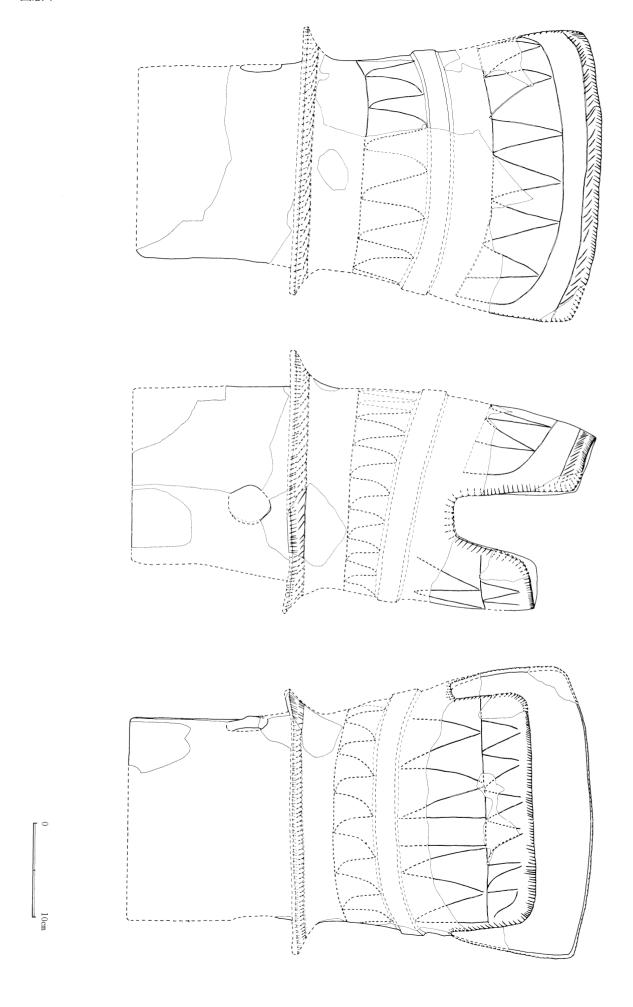
# 図 版 編

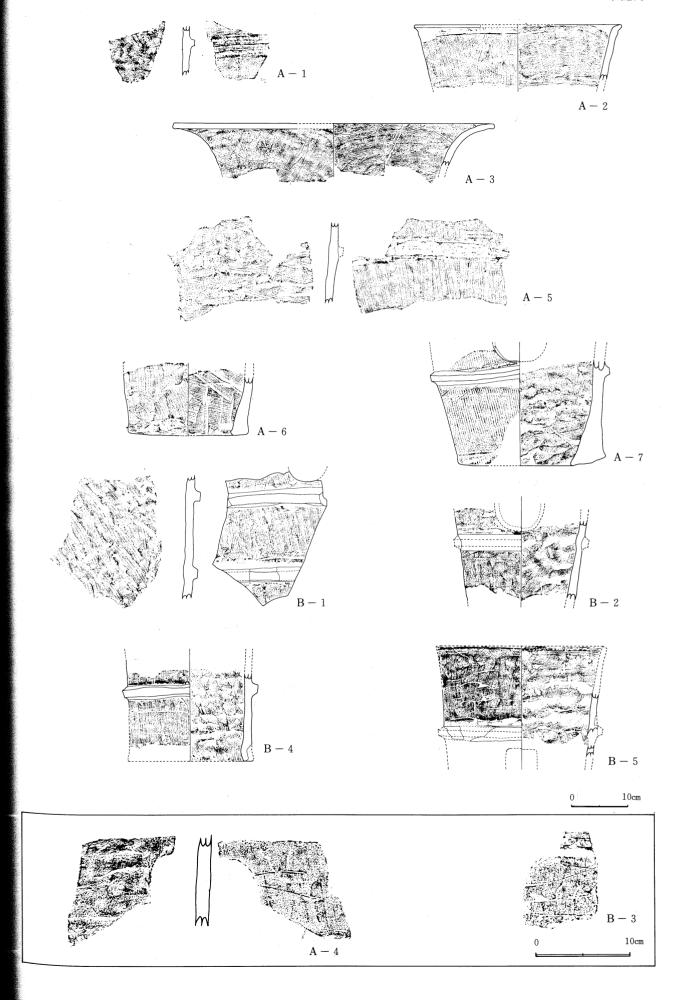


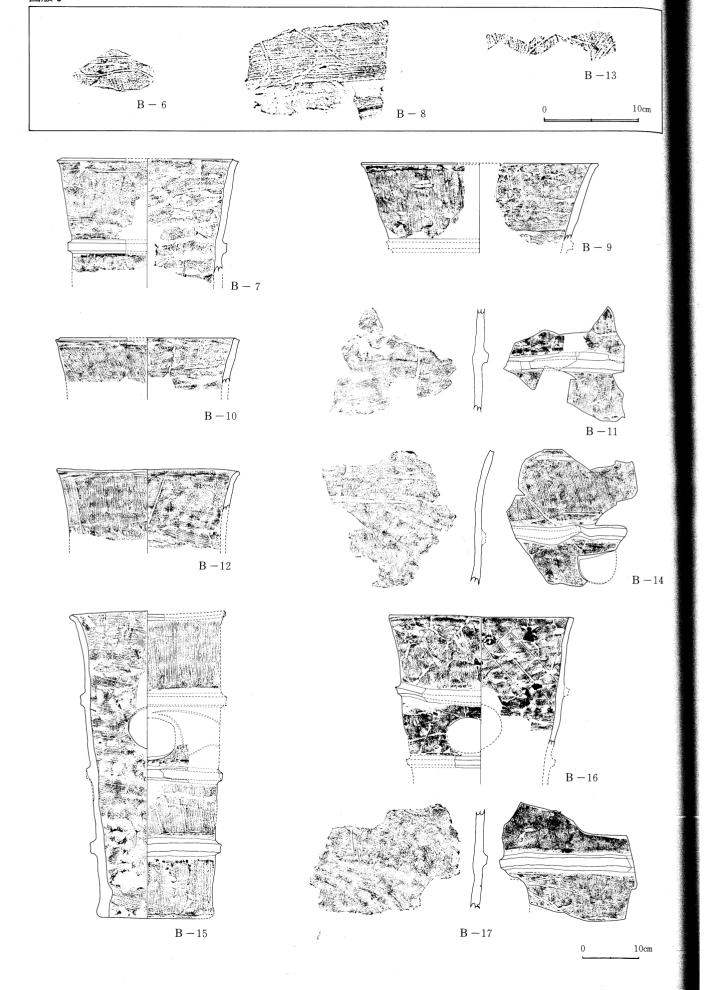


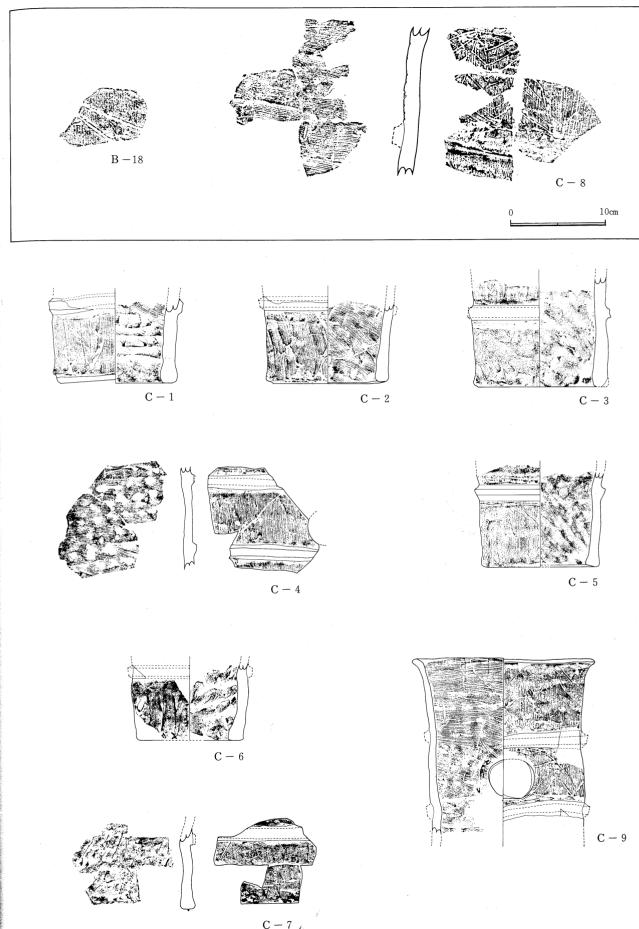
10cm



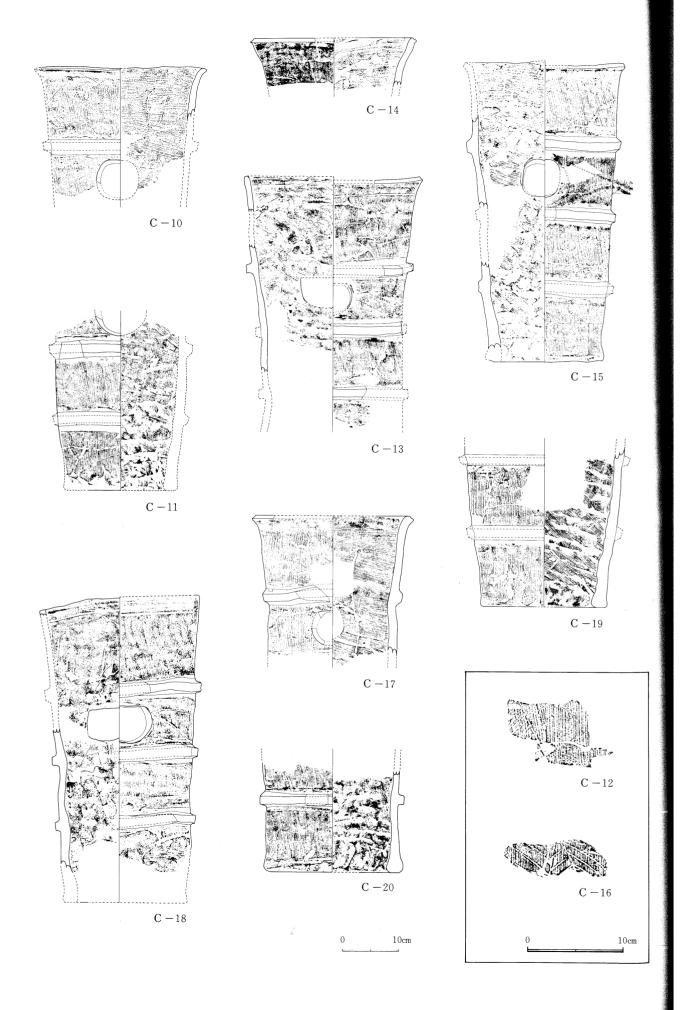


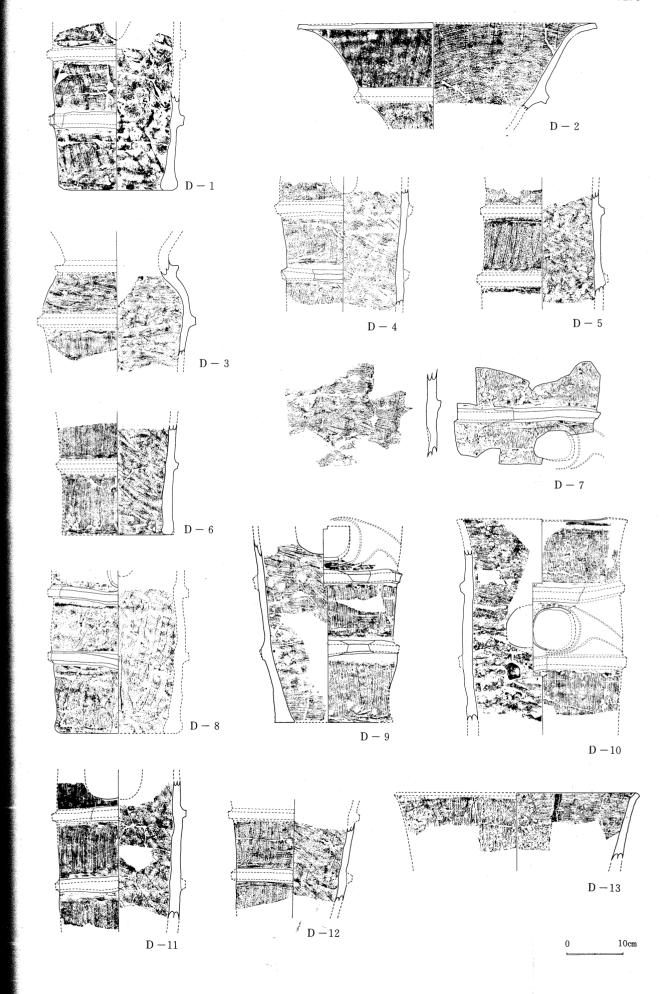


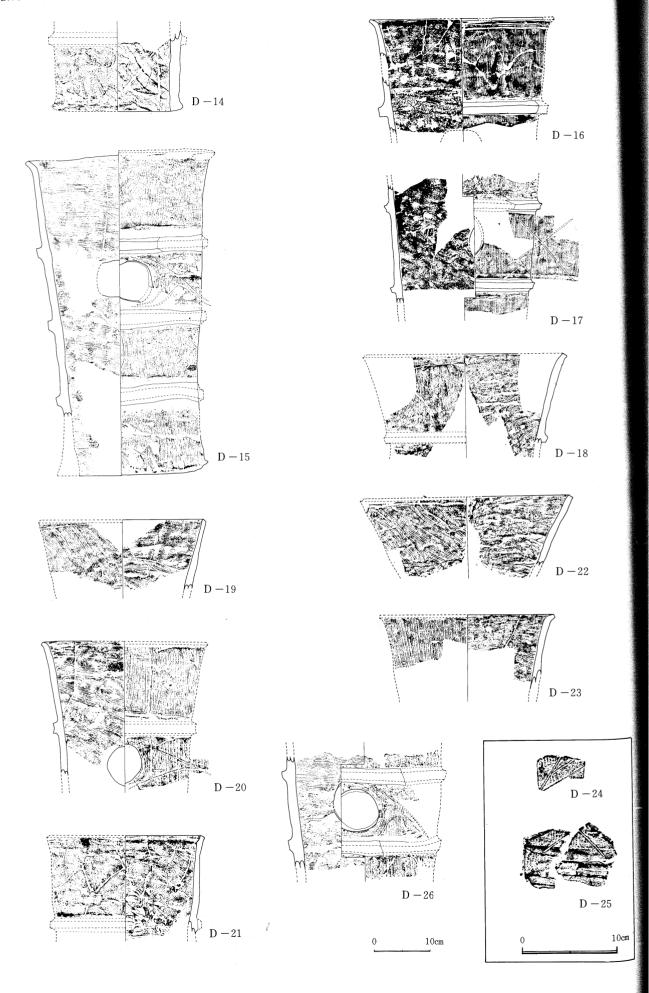


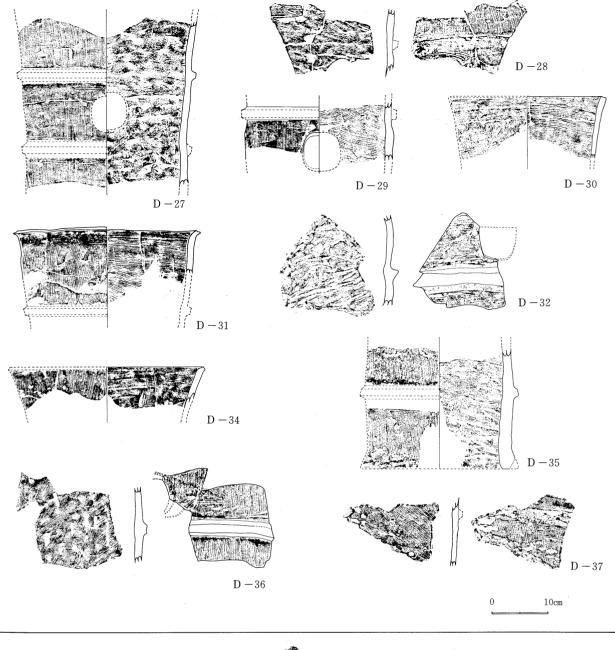


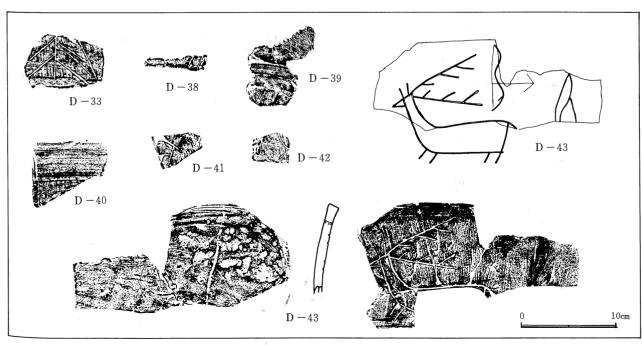
10cm



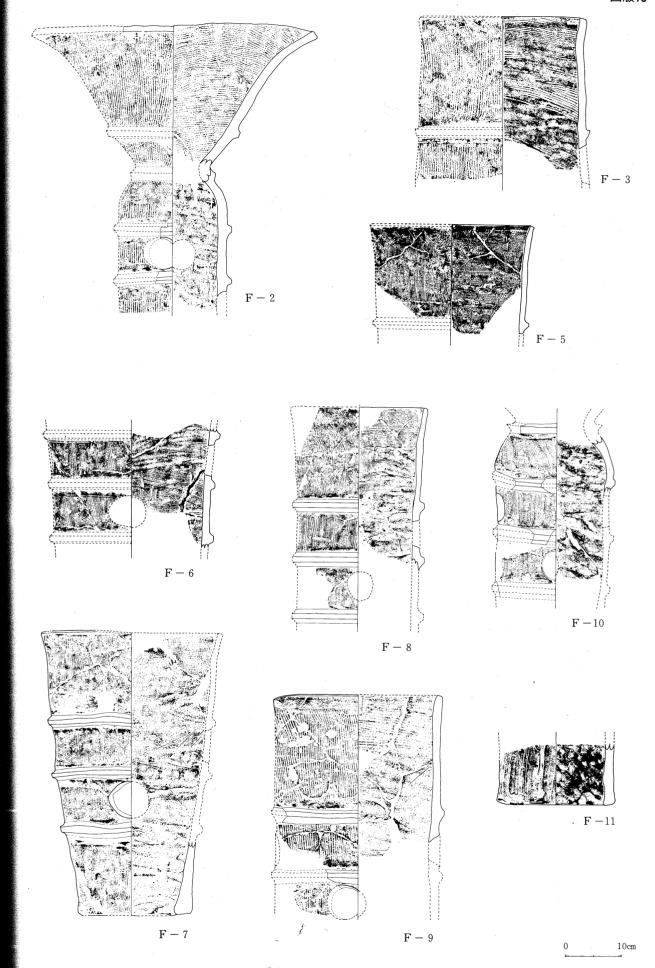


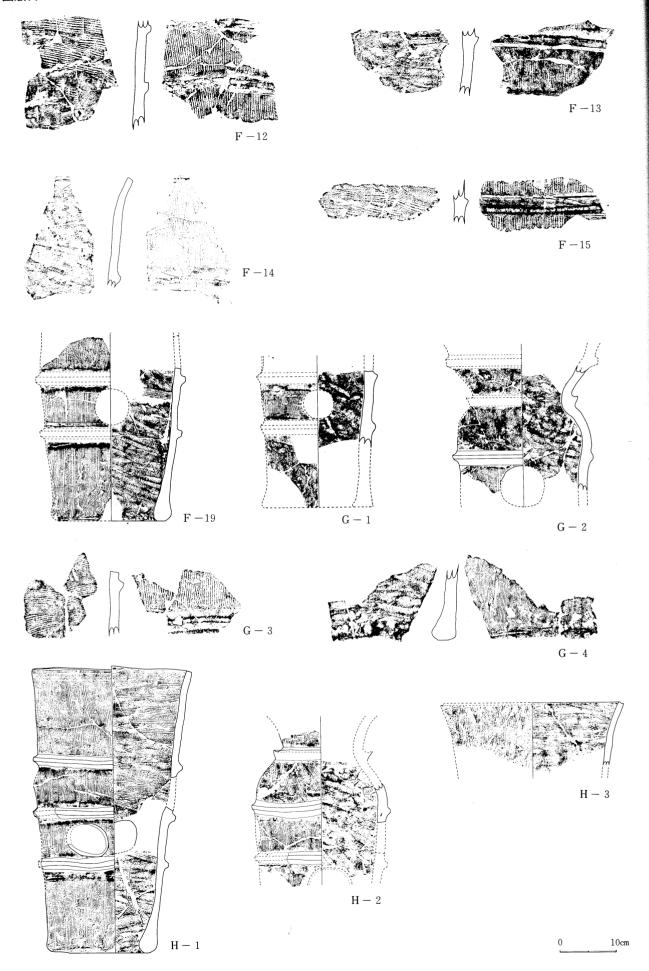


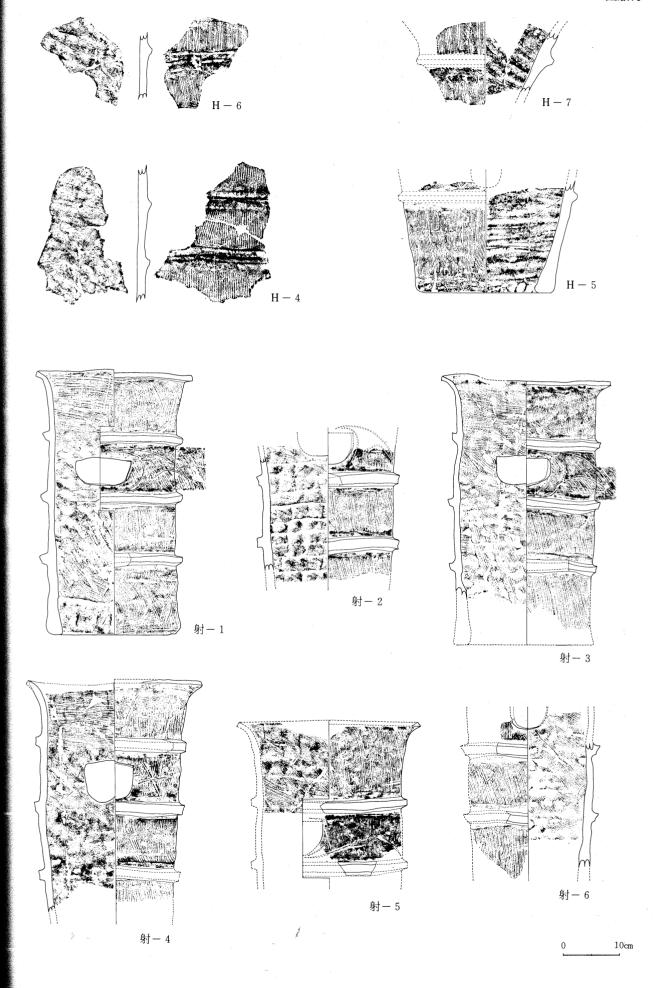


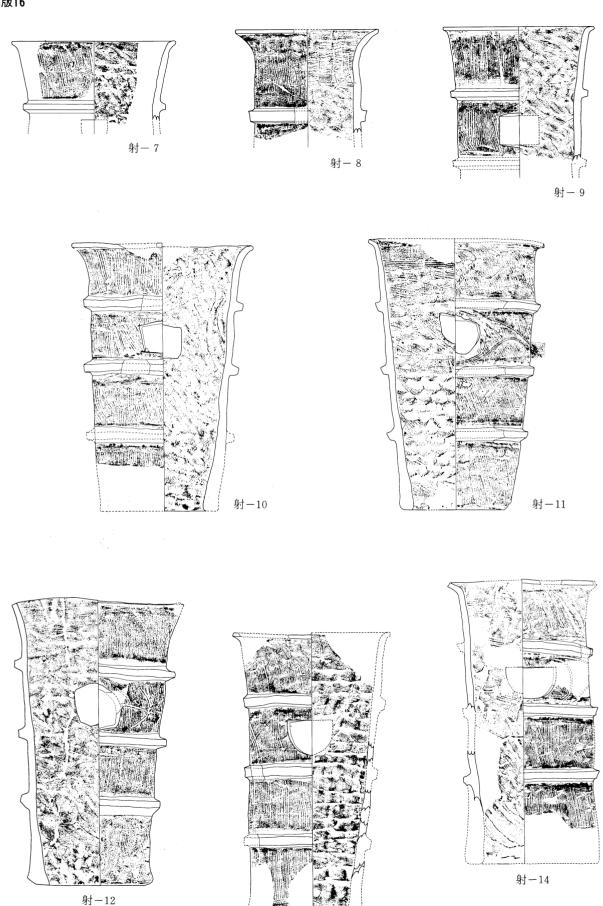






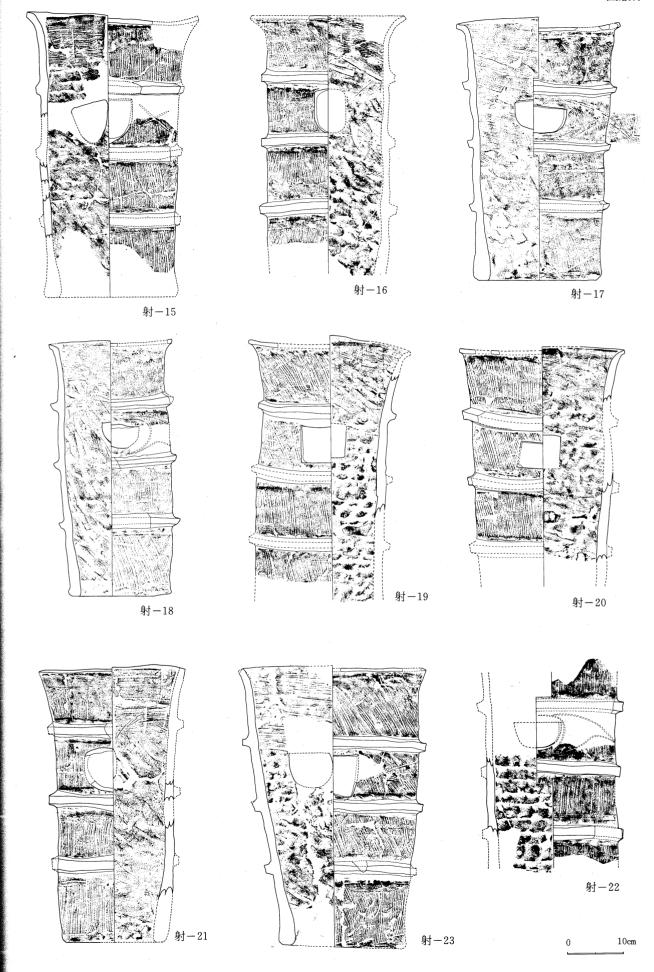


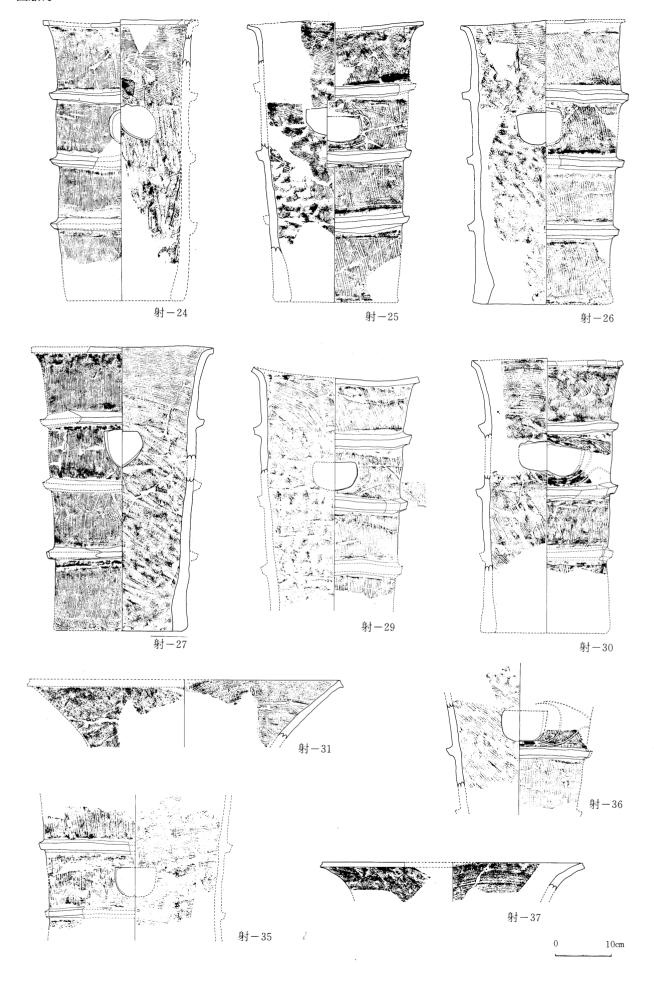


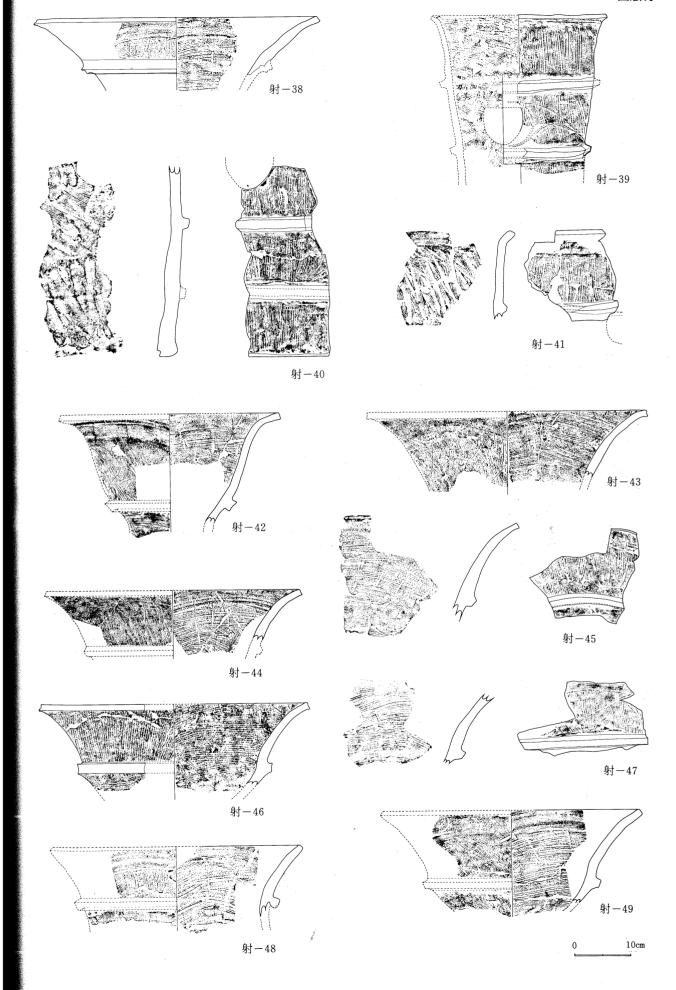


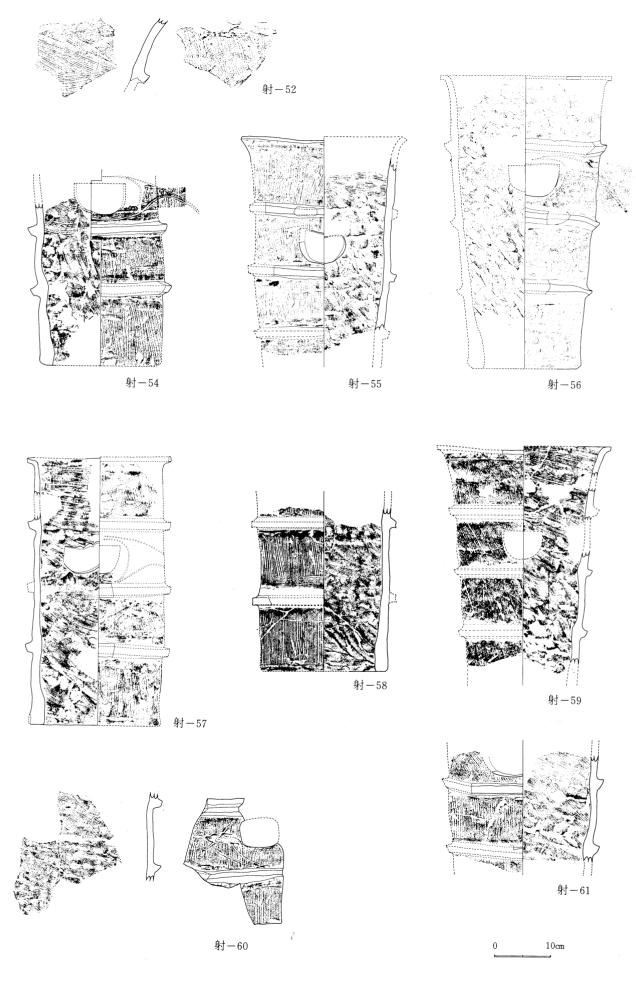
射-13

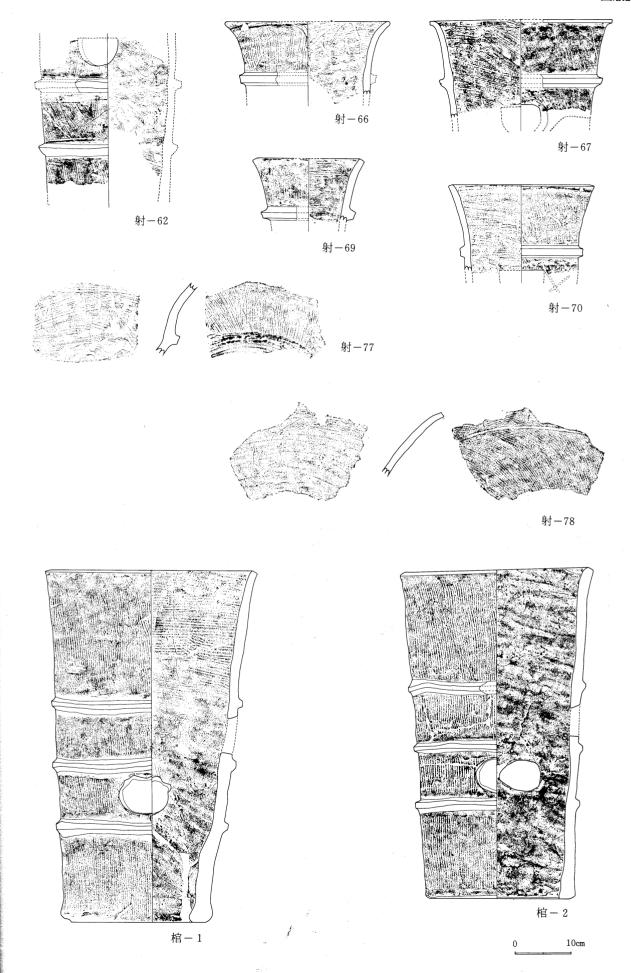
10cm

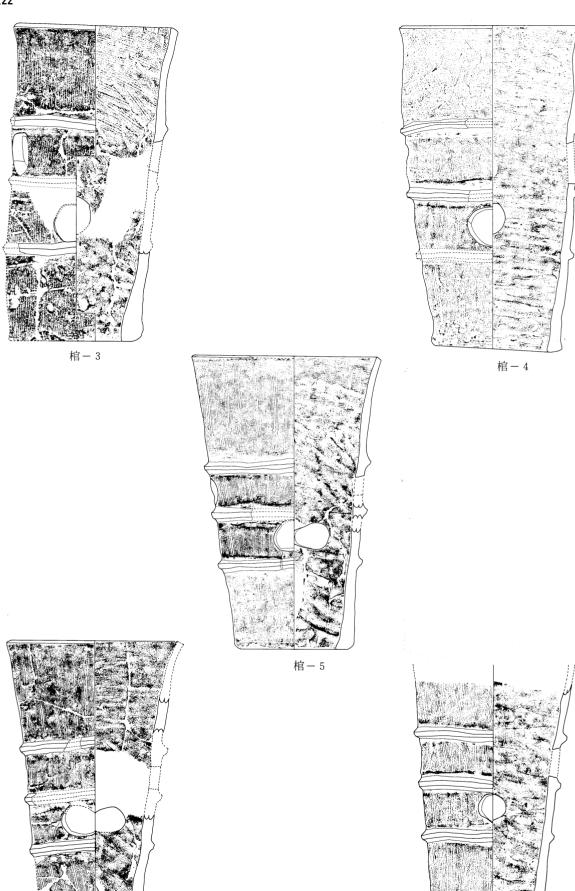






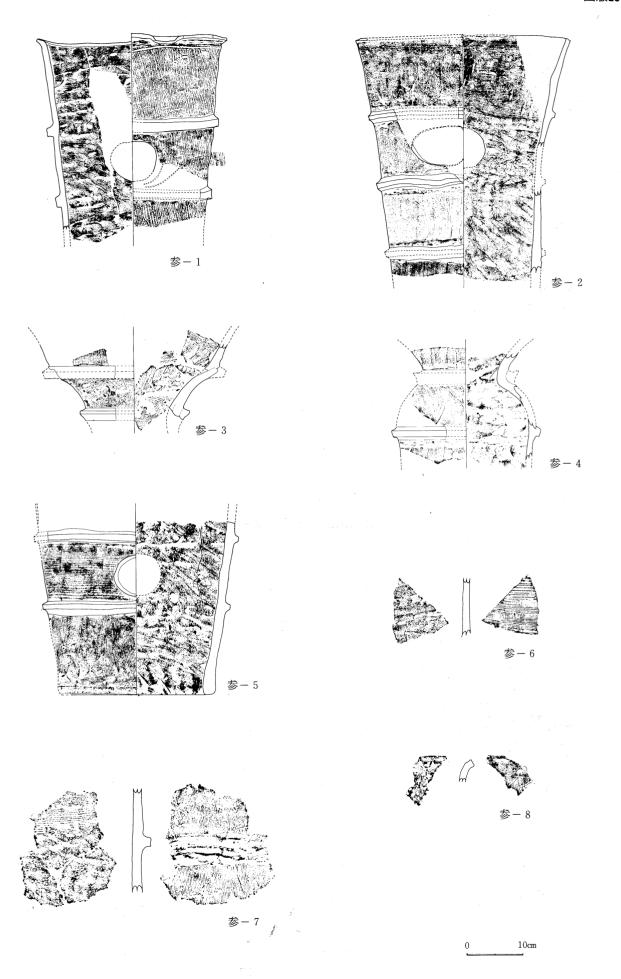




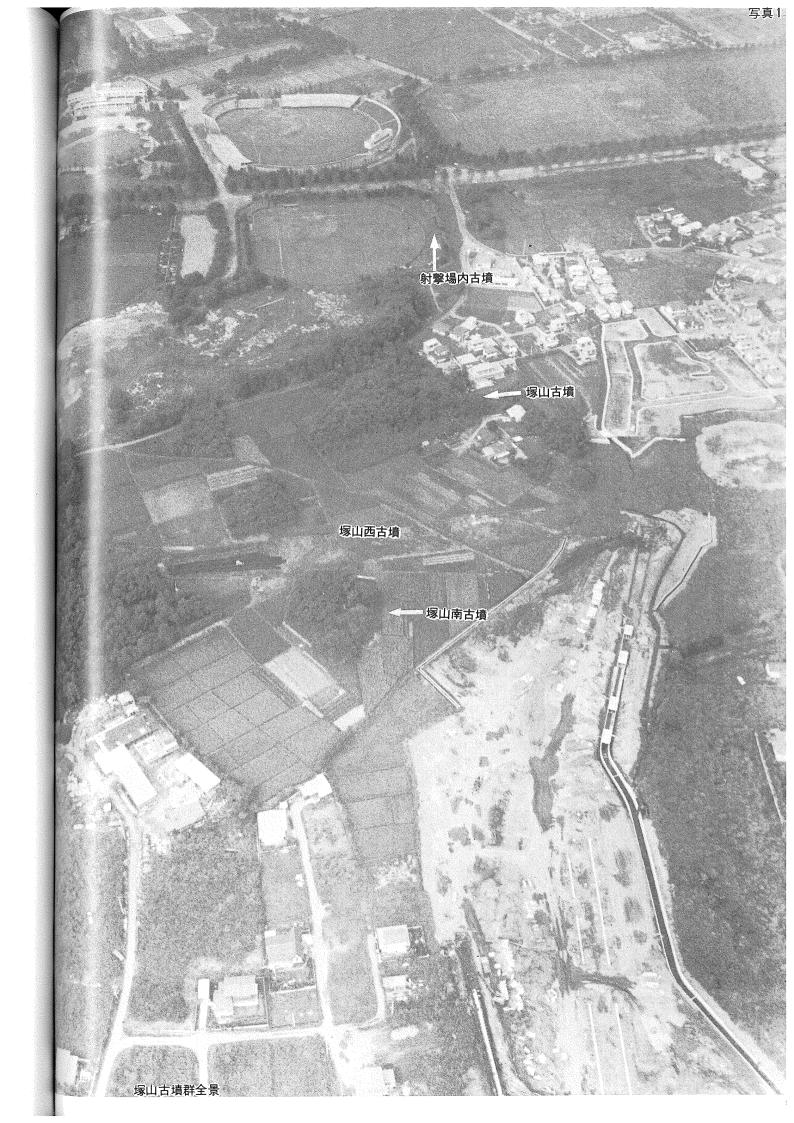


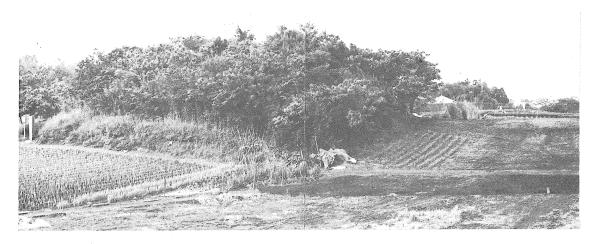
10cm

棺-6



## 写 真 編





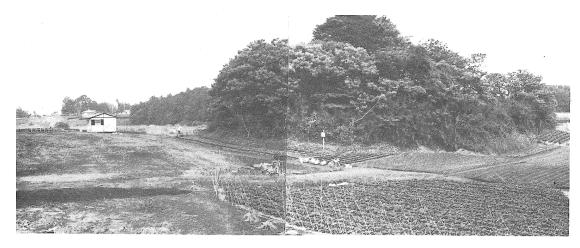
塚山古墳全景(西より撮影、右と連続)



塚山西古墳(前方)と塚山古墳前方部(右)



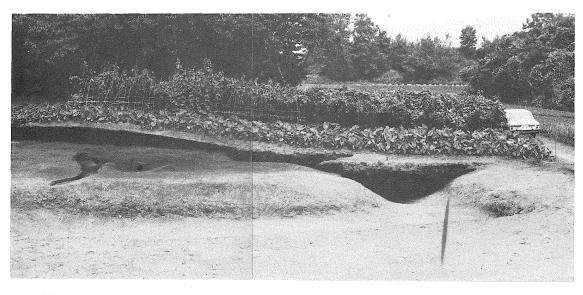
塚山西古墳 前方部周湟全景(右と連続)



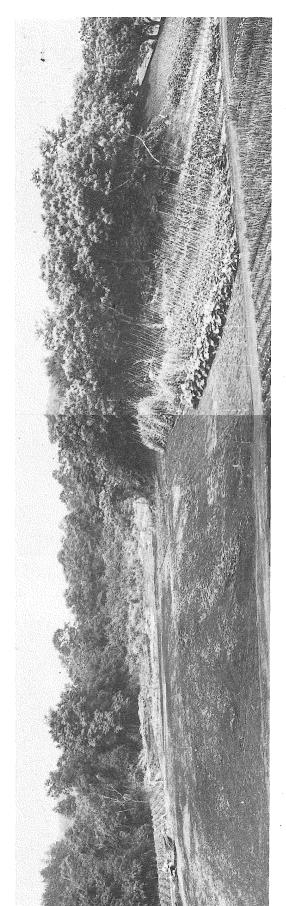
塚山南古墳全景

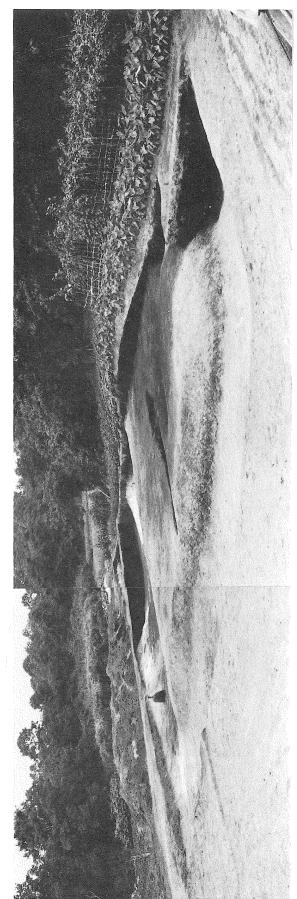


塚山古墳後円部

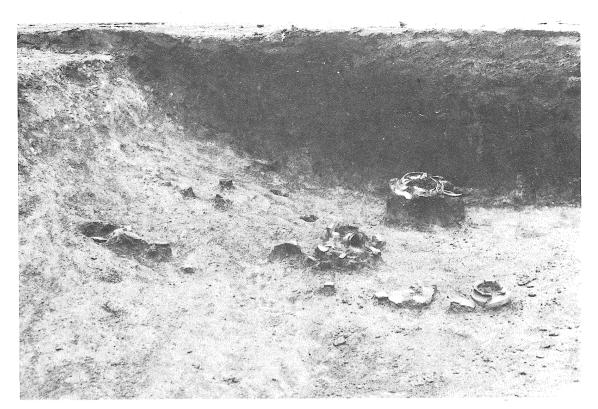


塚山西古墳前方部東隅角部

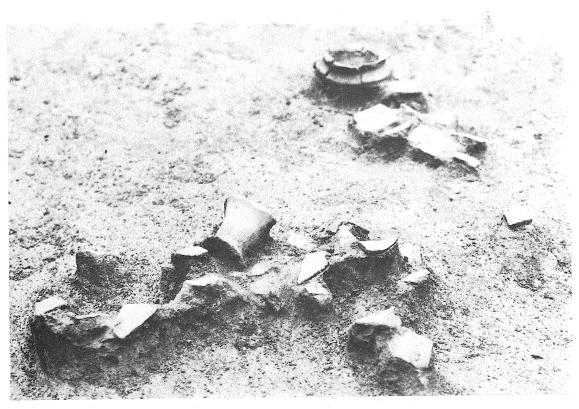




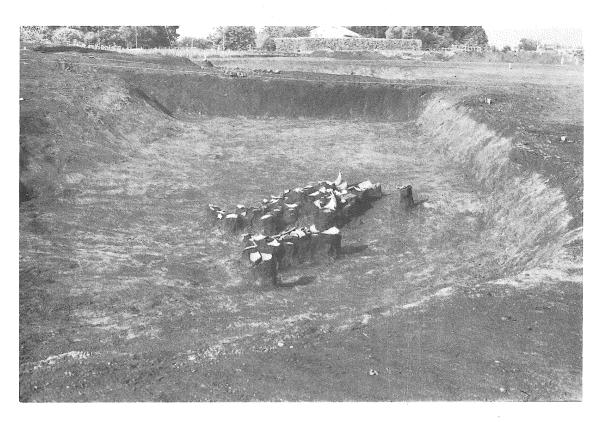
上,塚山西古墳全景(東より撮影) 下,塚山西古墳発掘調査区全景



塚山西古墳前方部周湟内土師器出土状況



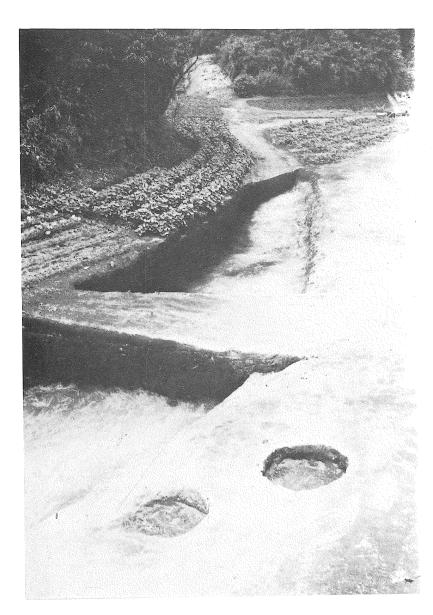
同上壺口縁部と高坏(手前)



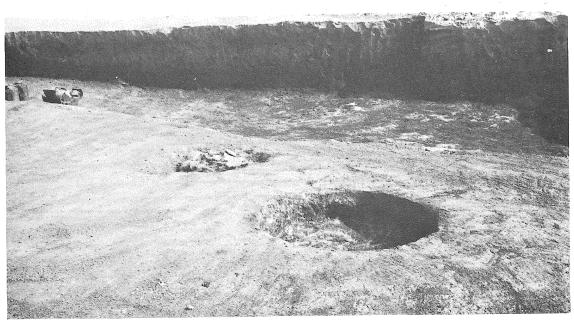
塚山西古墳前方部周湟内埴輪片出土状況



塚山西古墳西クビレ部周湟内埴輪片出土状況



上 塚山南古墳後円部周湟 下 同上埴輪出土状況

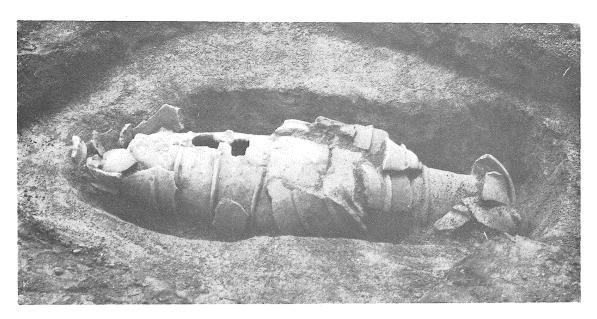




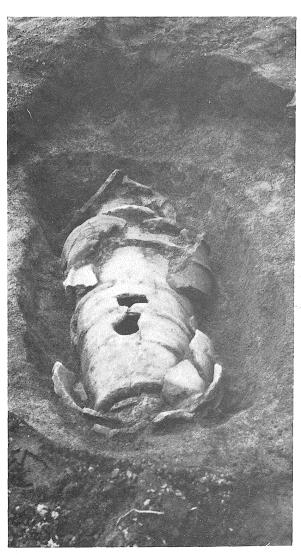
1号埴輪棺(北より撮影)



同上(東より撮影)



2号埴輪棺(西より撮影)



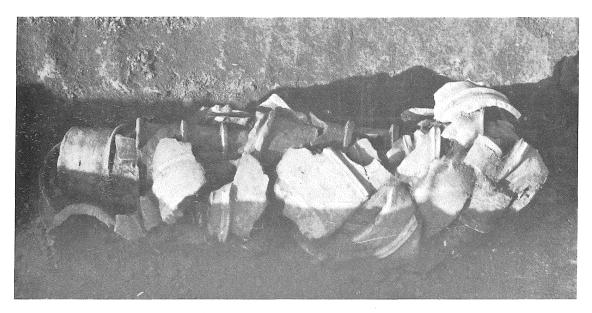
同上(北より撮影)



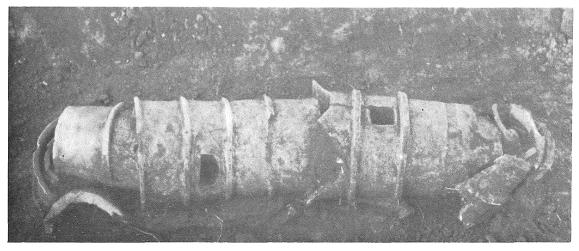
同上(南より撮影)



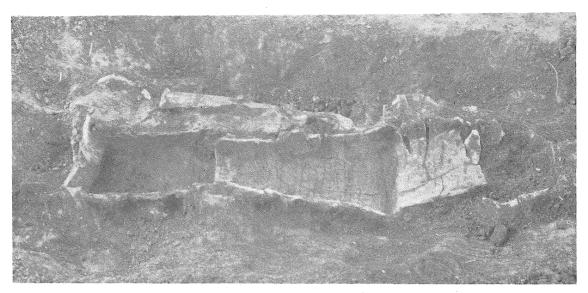
射撃場西周湟埴輪棺(西より撮影)



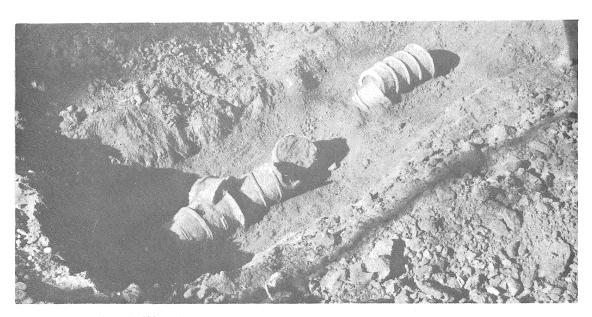
同上(南より撮影)



同上 (埴輪棺本体)



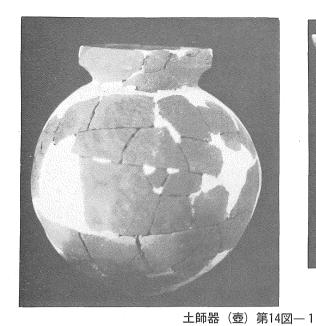
射擊場東埴輪棺

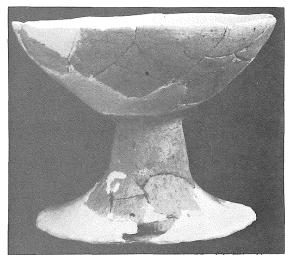


同上南周湟西埴輪棺

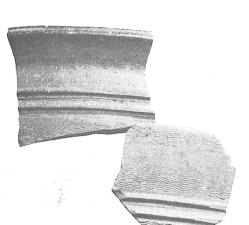


同上南周湟北埴輪棺





土師器(高环)第14図—2

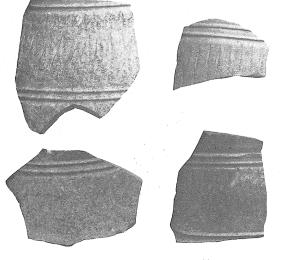






須恵器





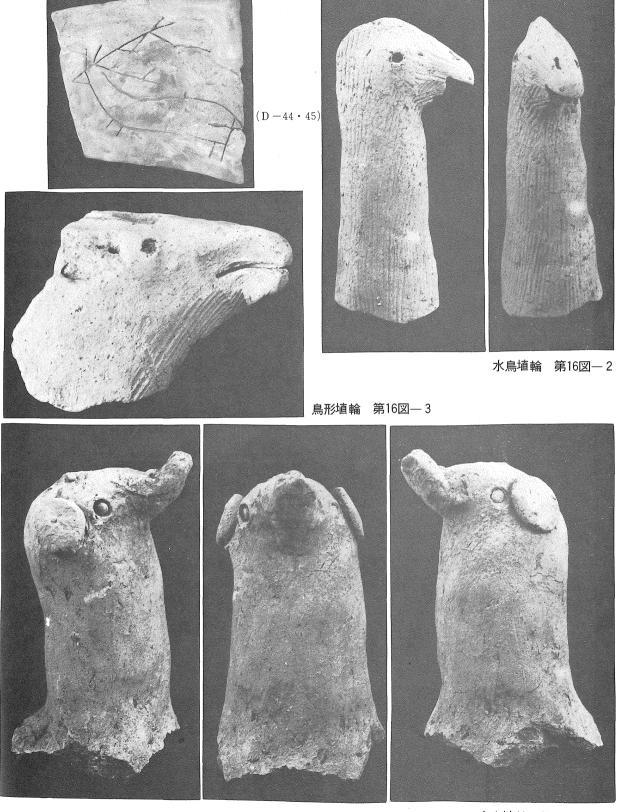
第15図-2~5



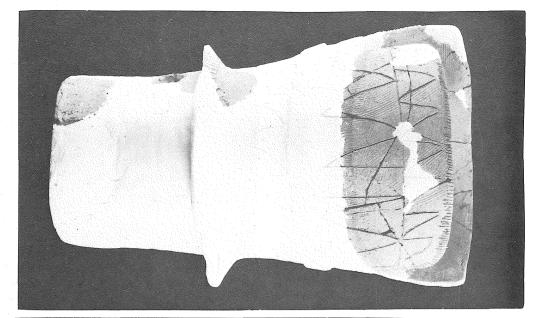
第15図—8

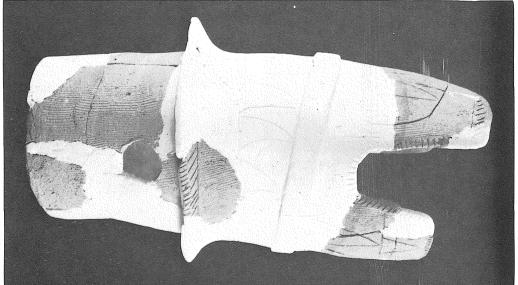


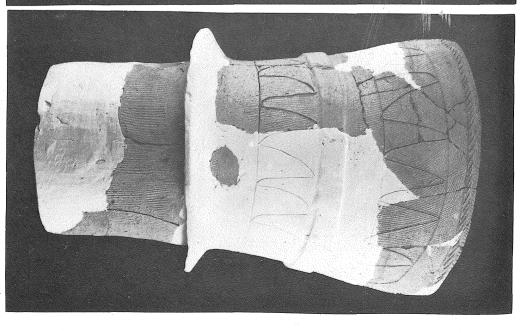
第15図—6



水鳥埴輪 第16図-1



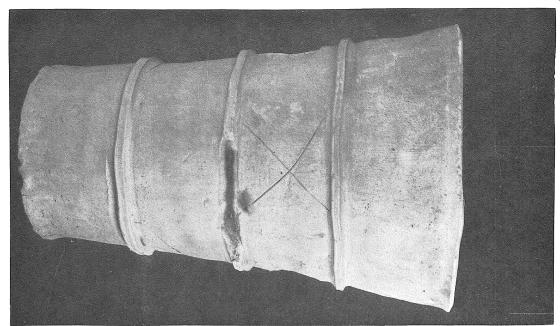




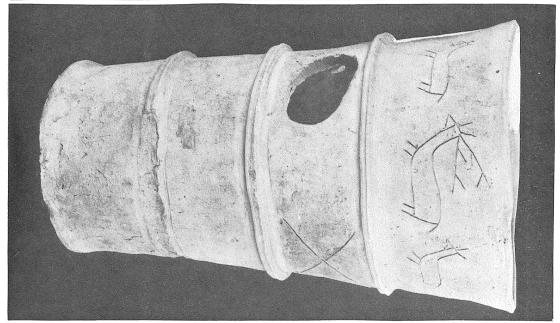
(射-53)

短甲形埴輪

図版 4

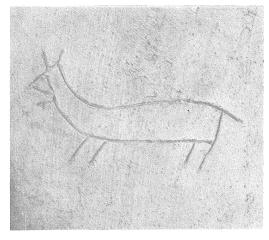




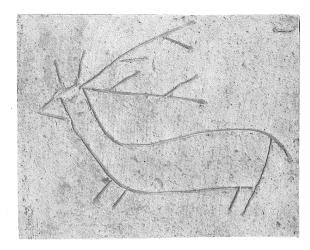




鹿の刻線画のある丹筒埴輪



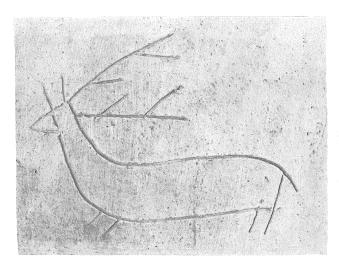
鹿の刻線画(左より1頭目)



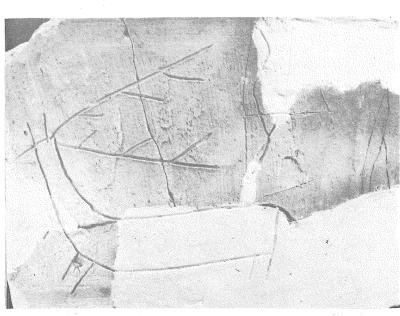
同2頭目



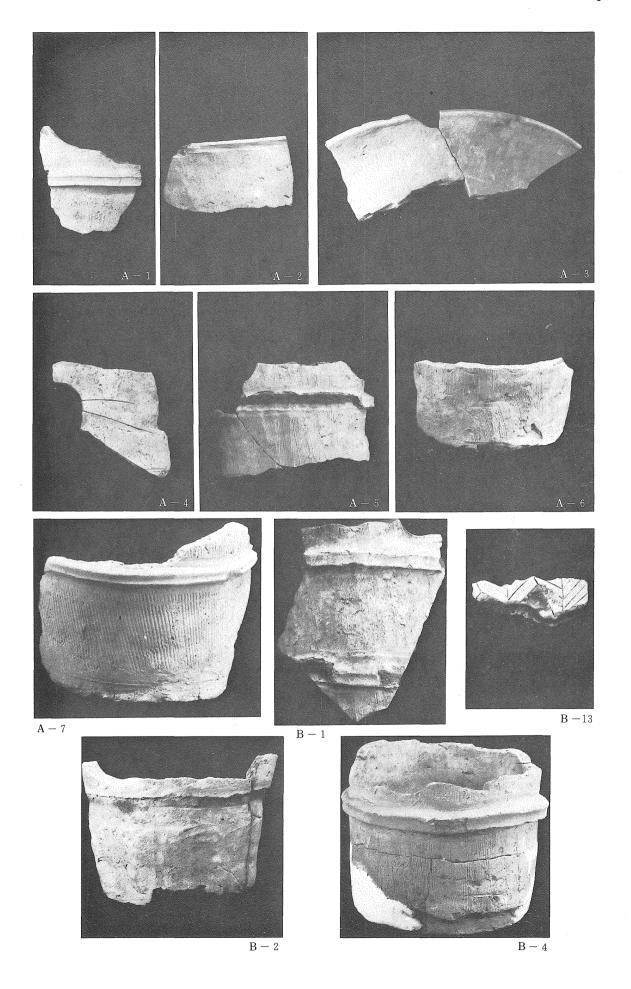
同3頭目

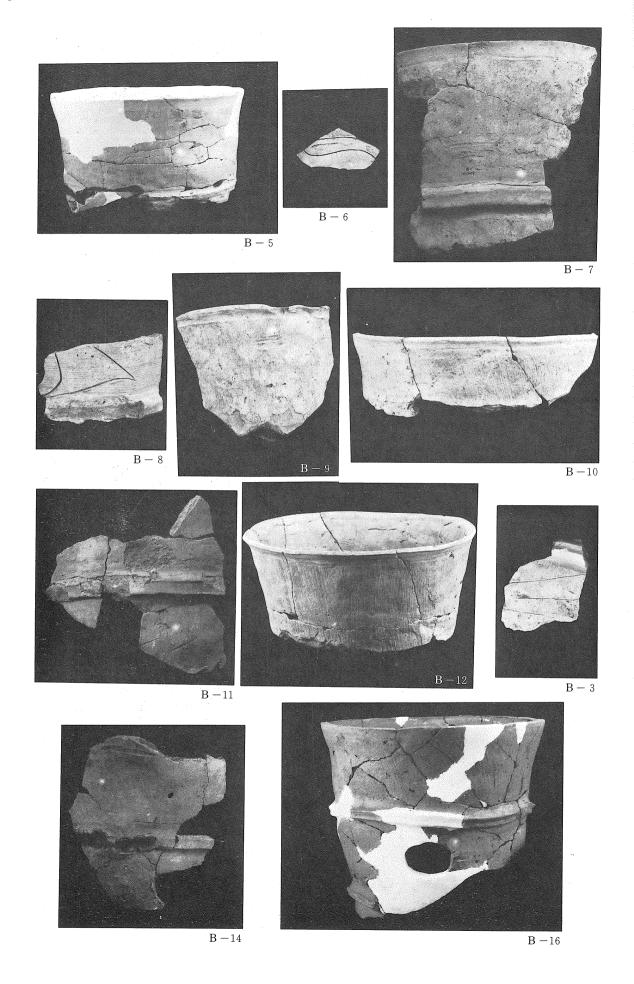


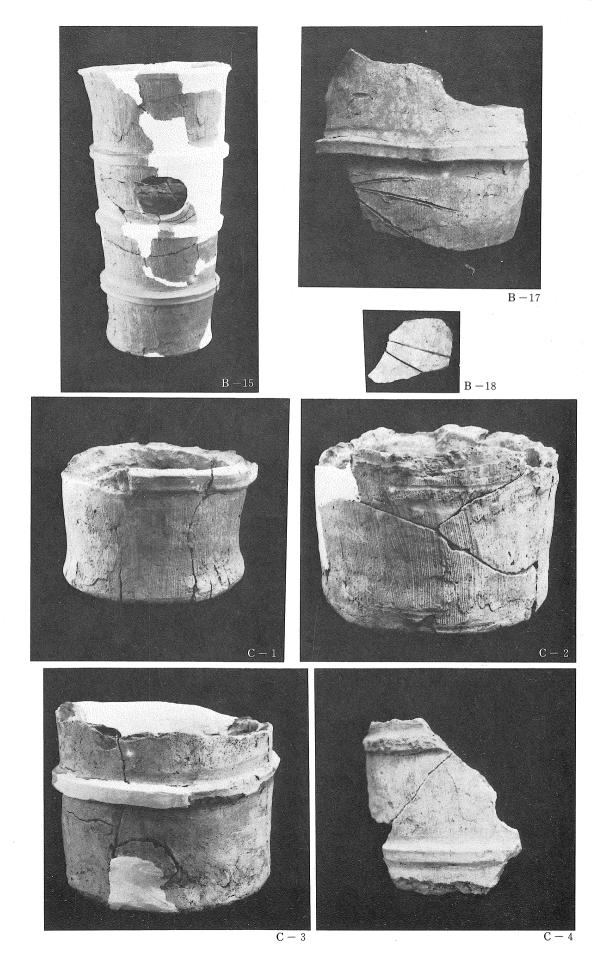
同4頭目

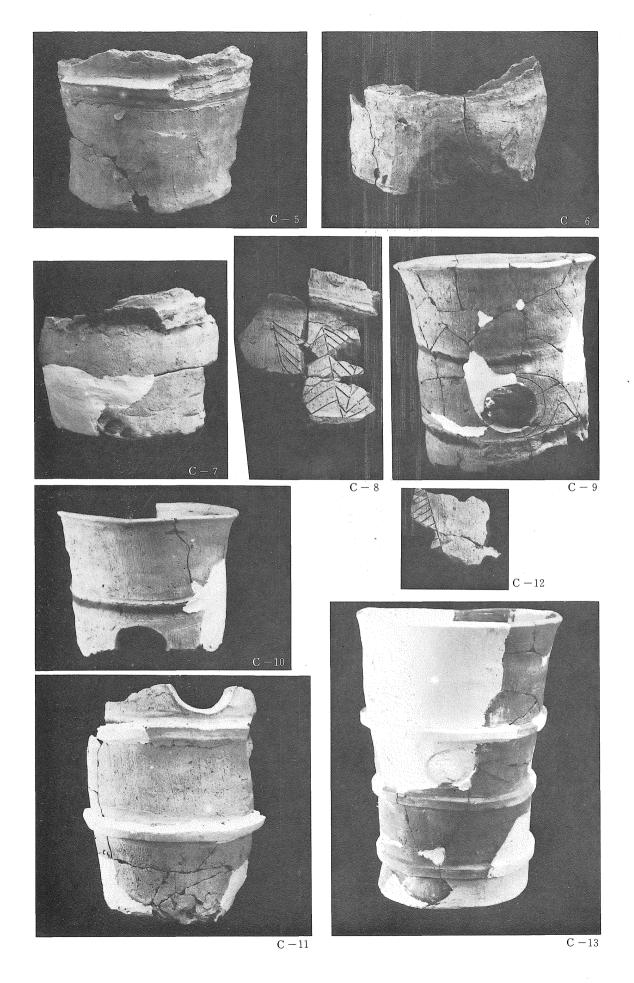


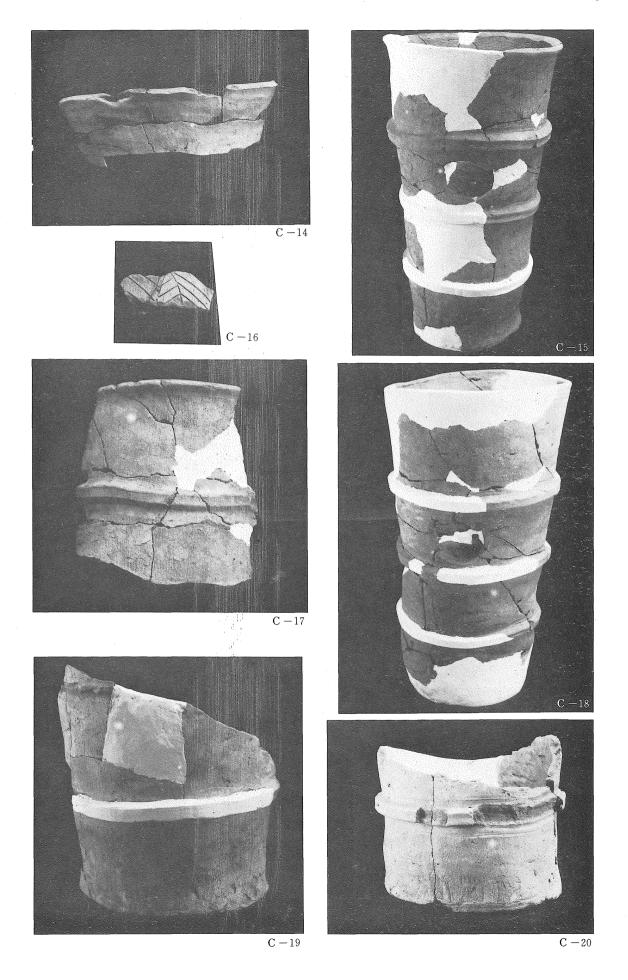
(D-43)

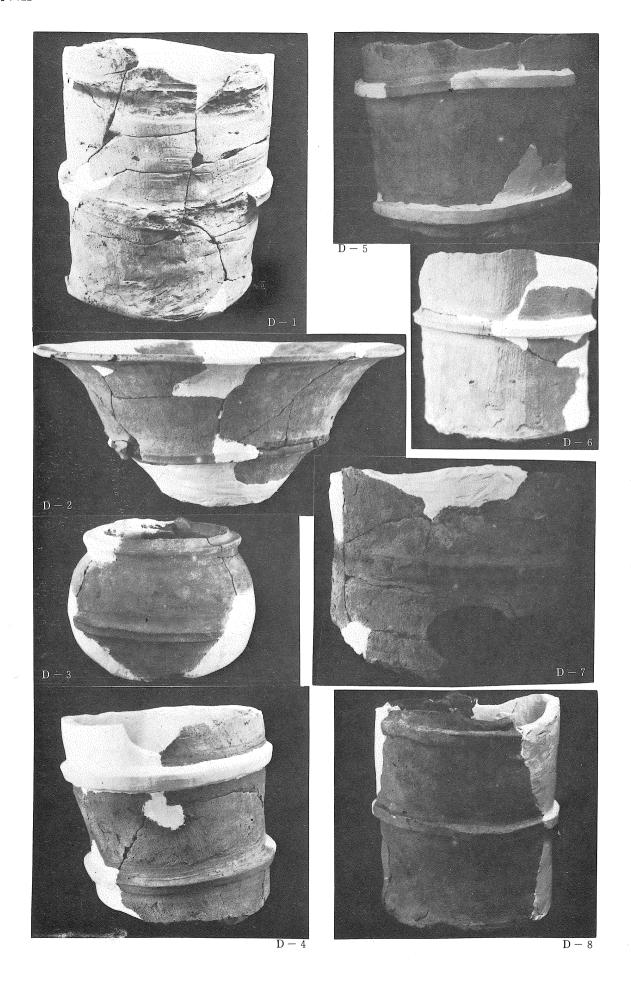


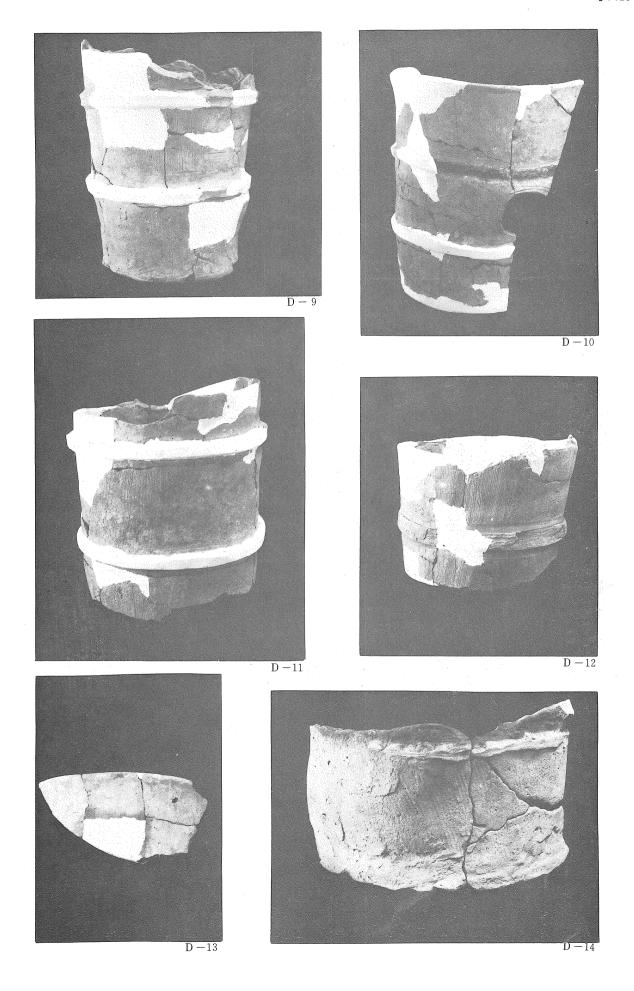


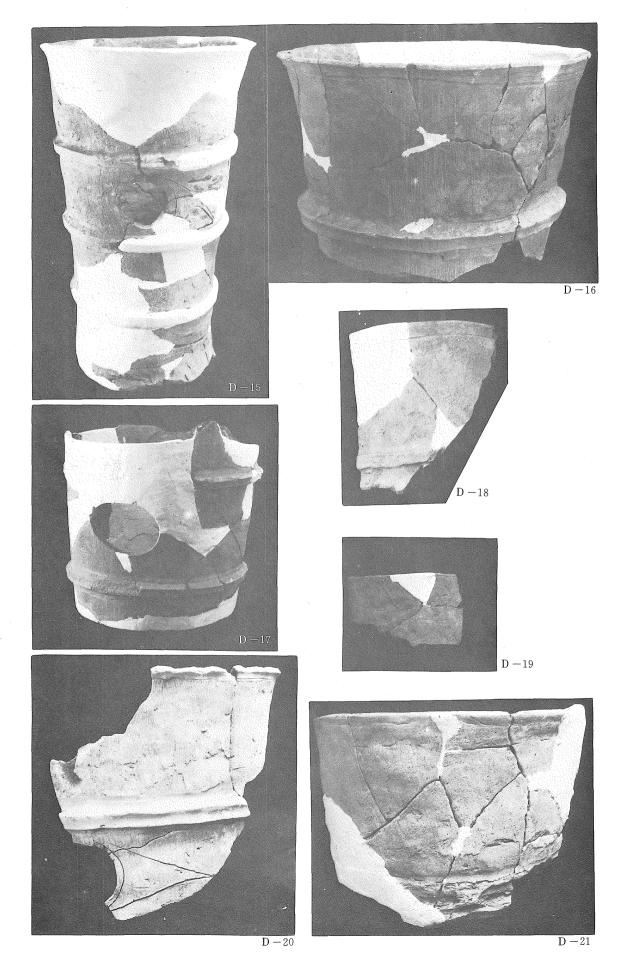


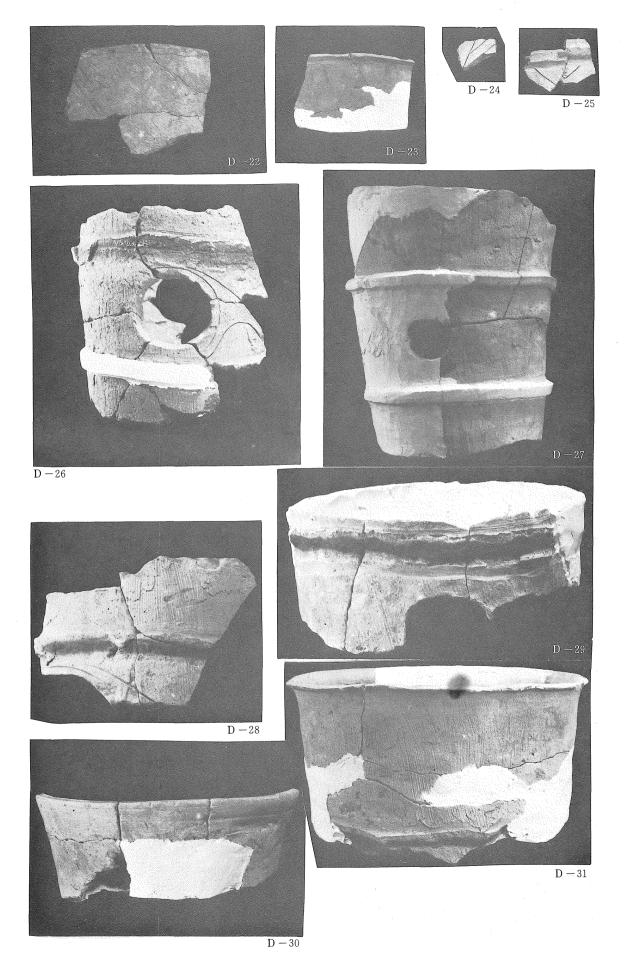


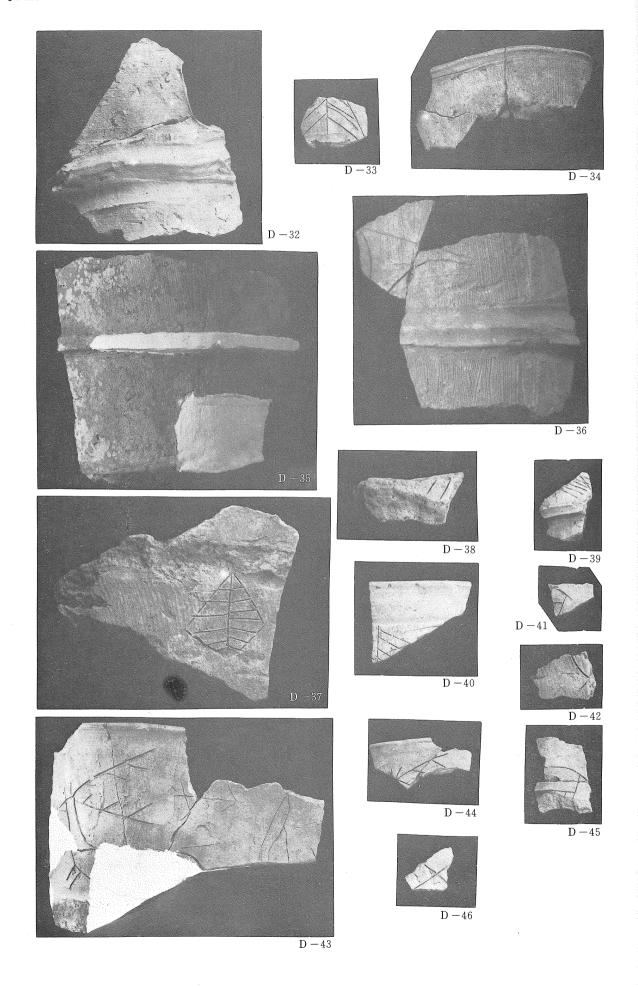


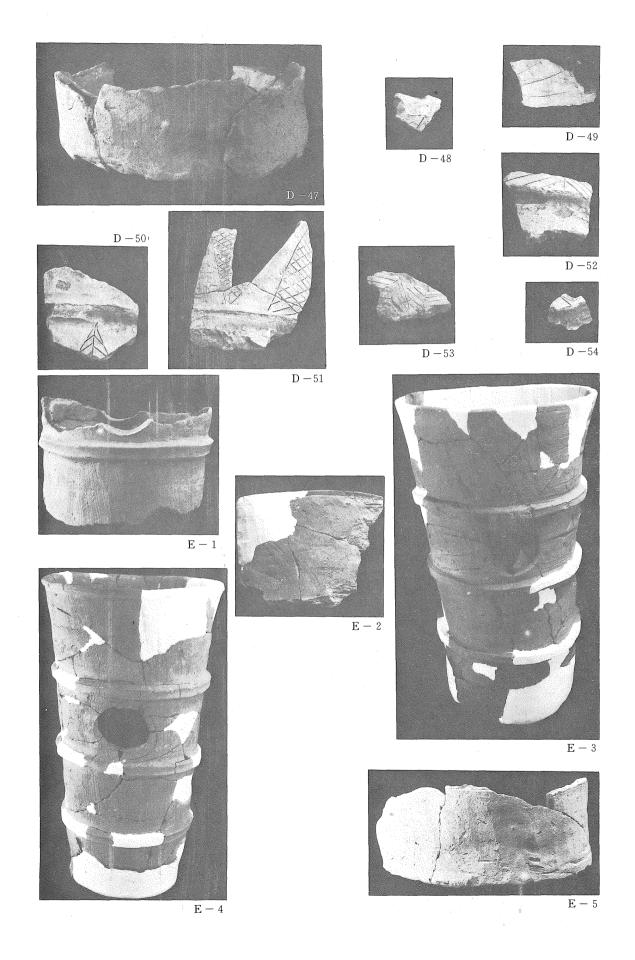


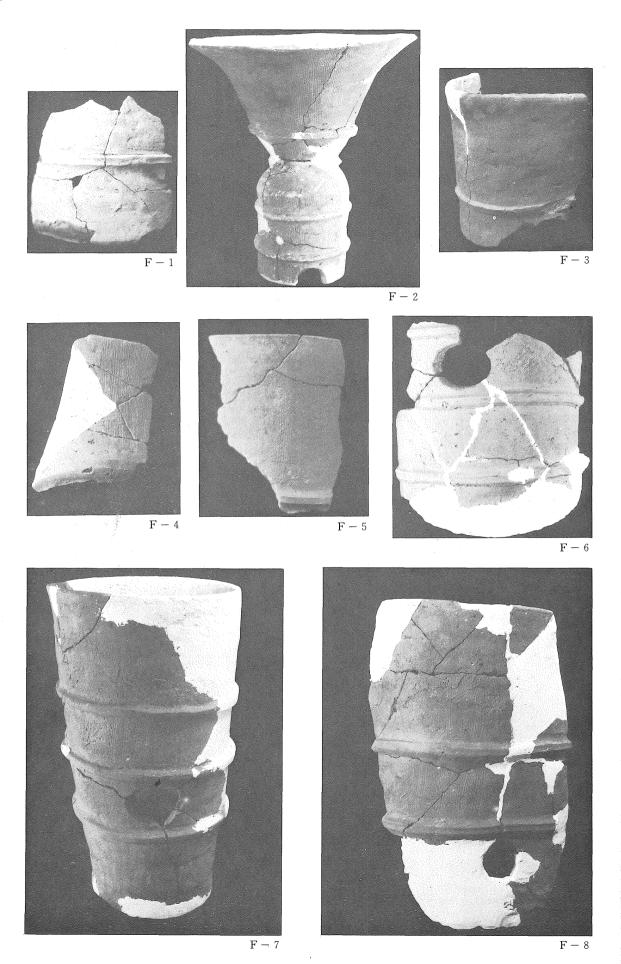


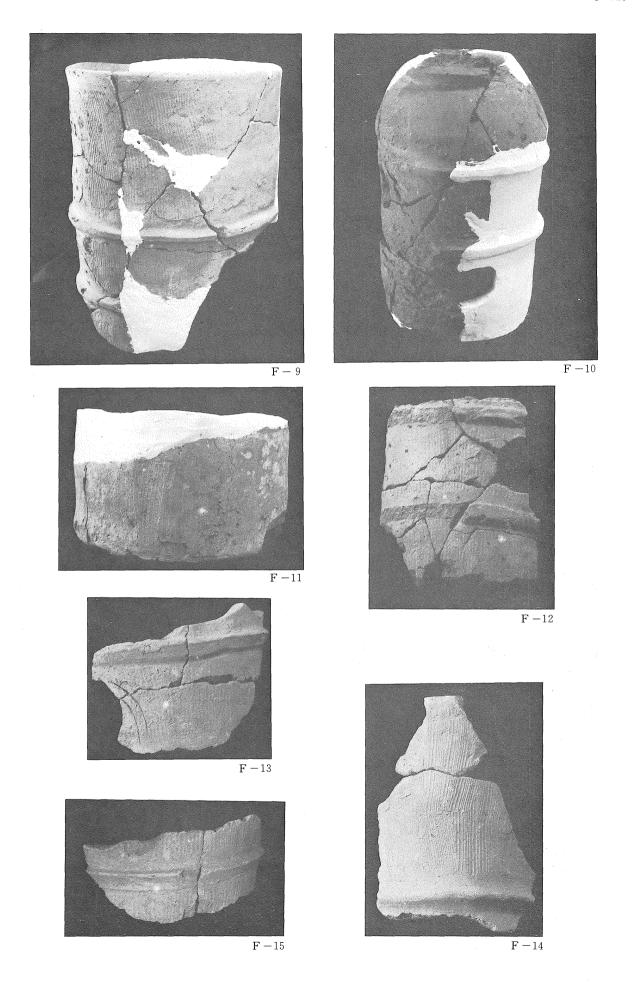


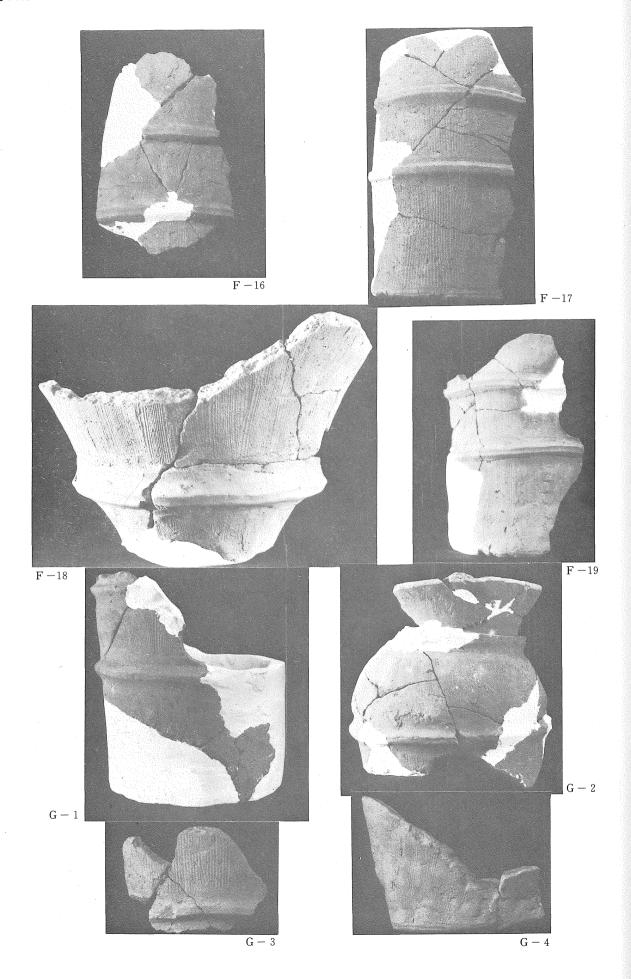


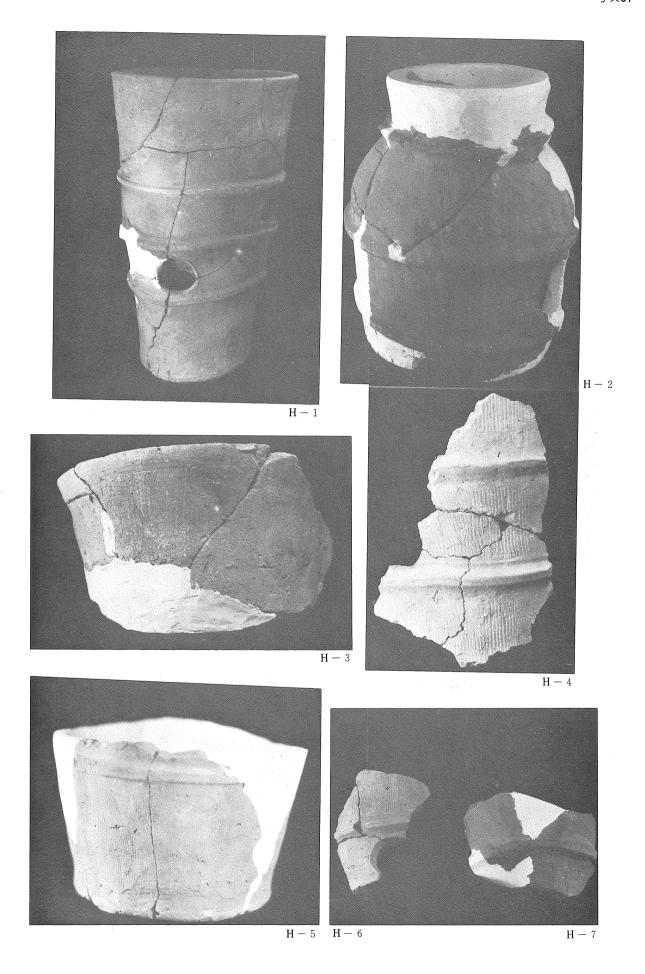


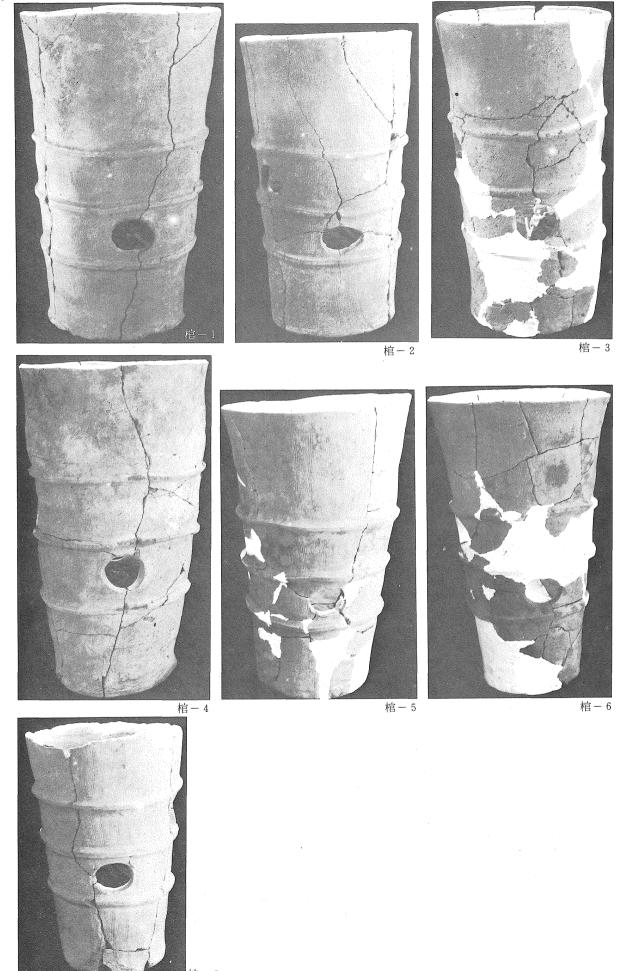


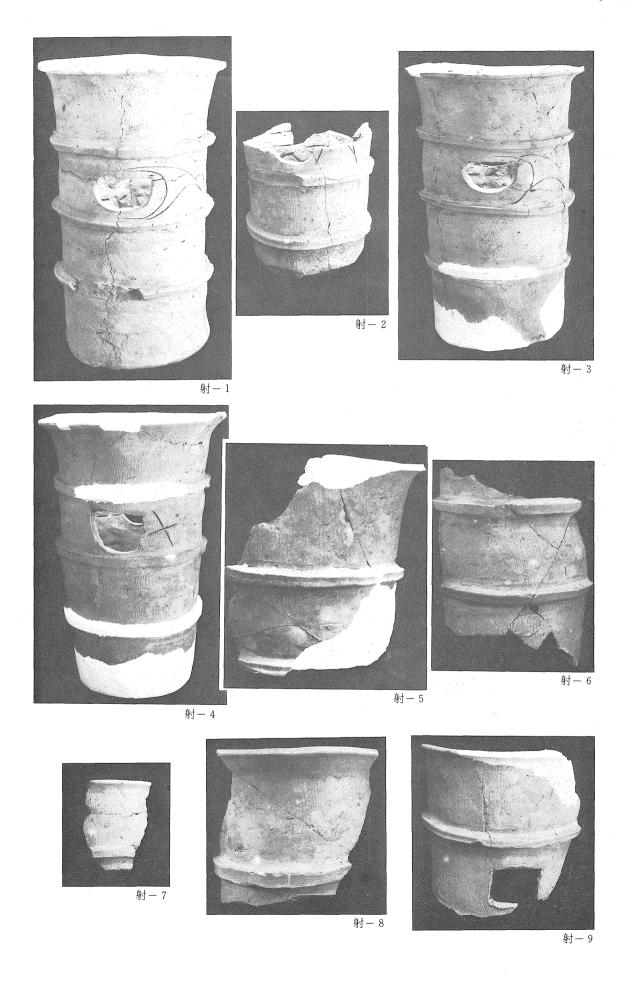






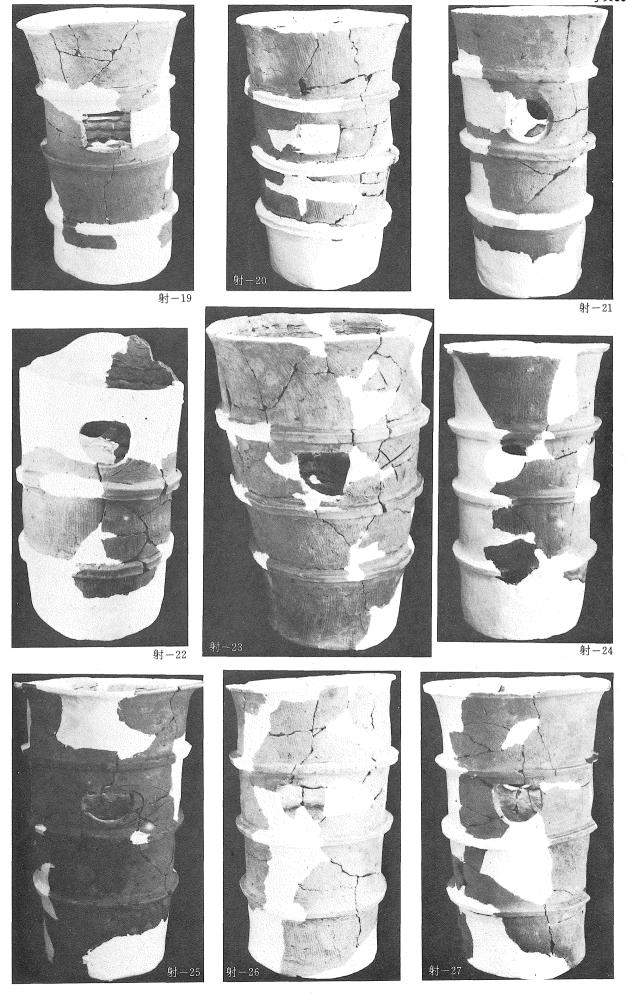


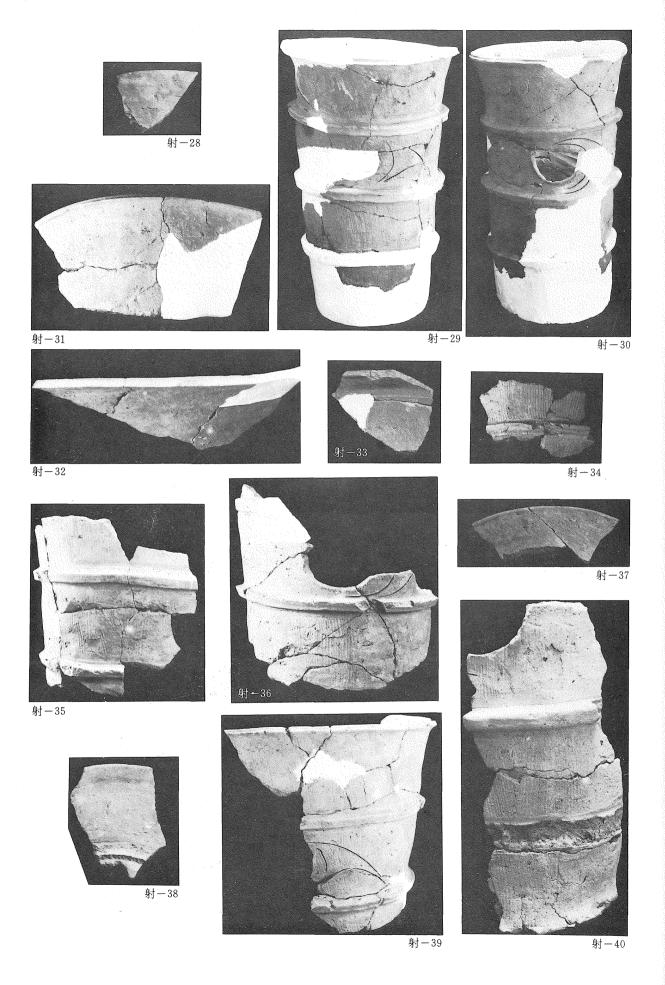


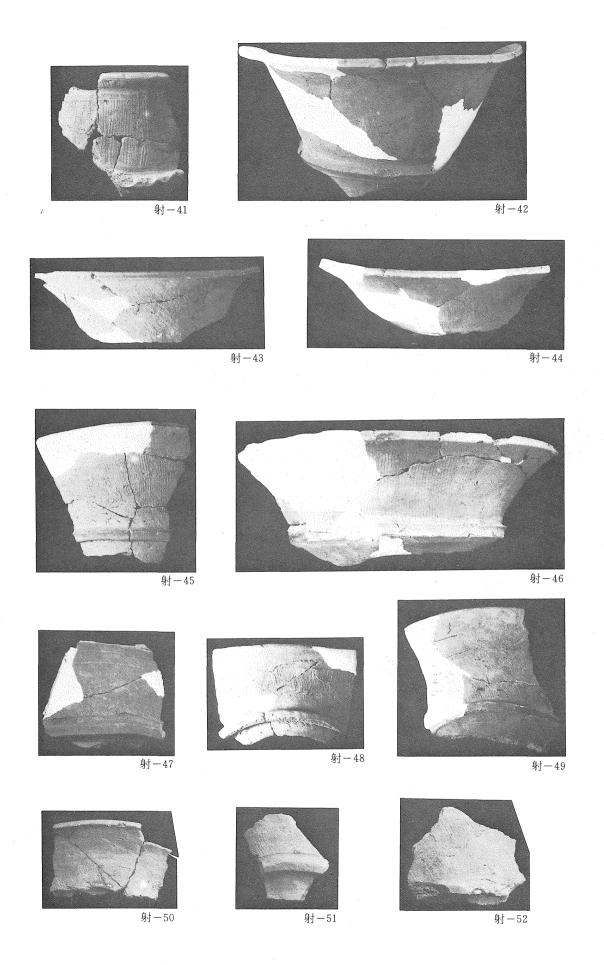


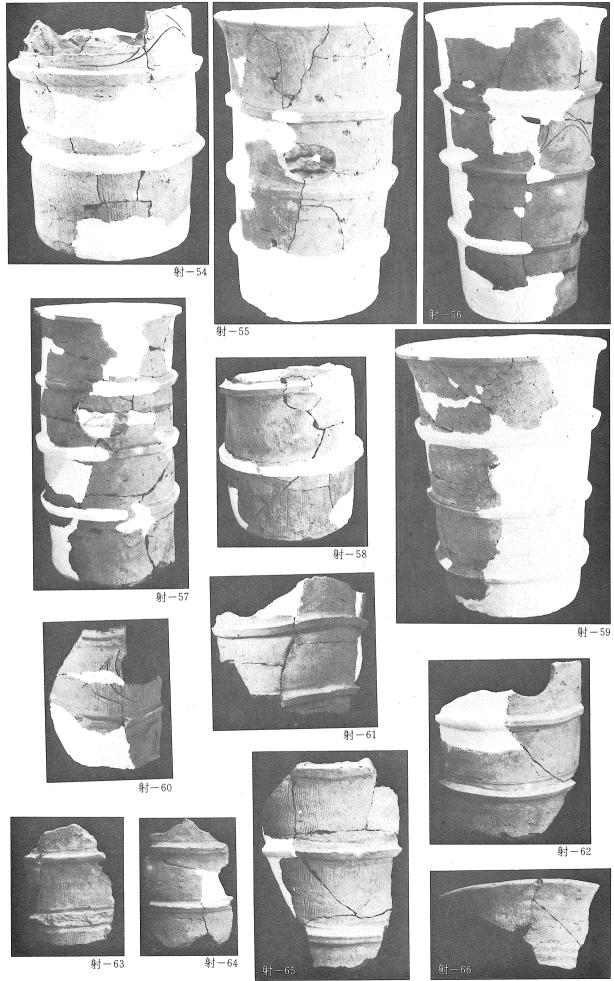
射-17

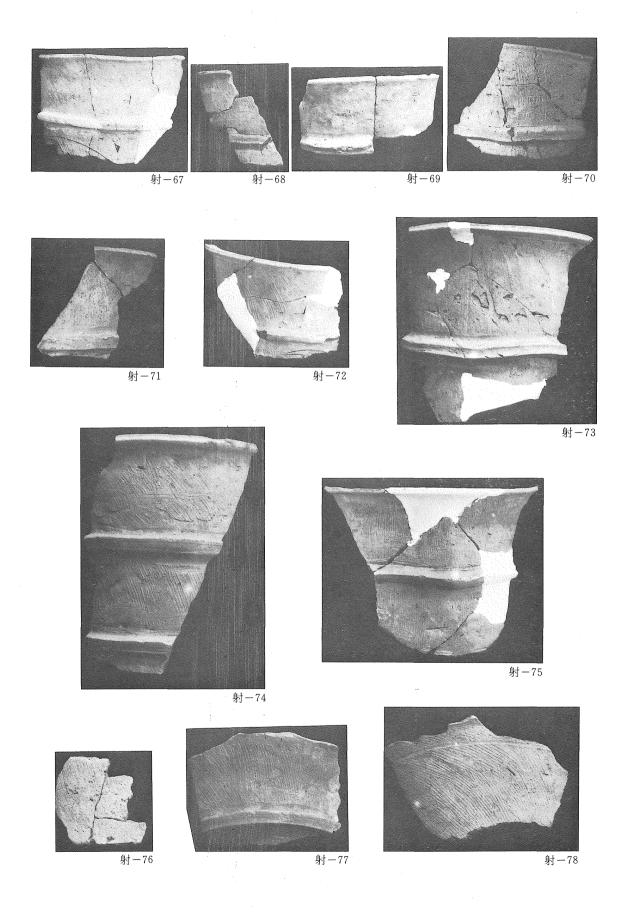
射-18

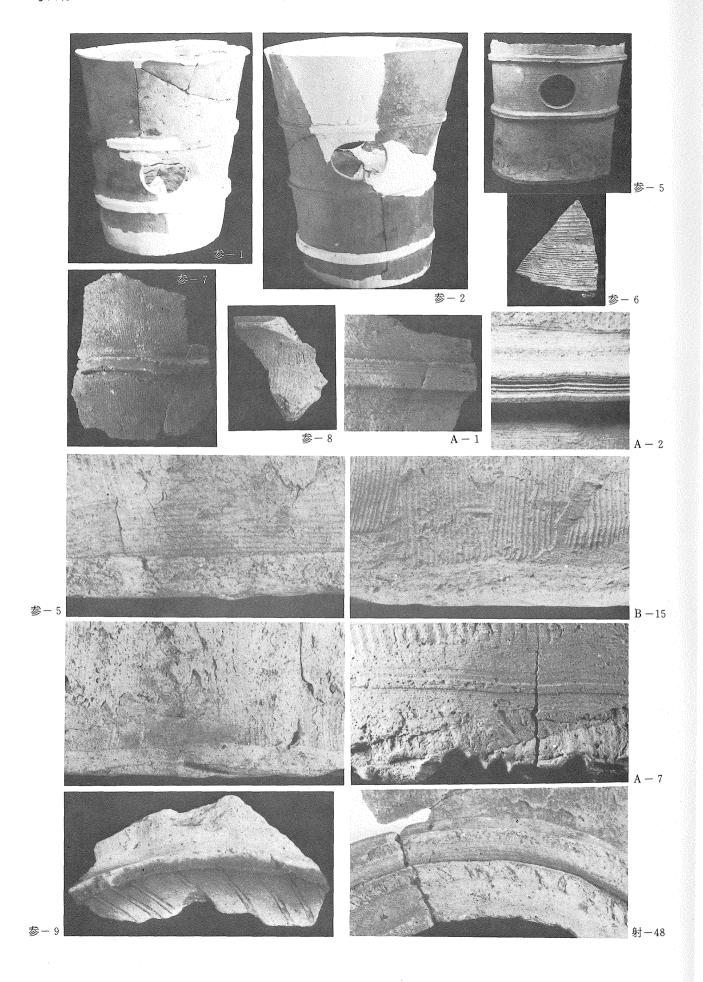












栃木県埋蔵文化財報告 第 32 号

## 塚山古墳群

発行日昭 和 54 年 10 月発行者栃木県教育委員会印 刷(株松井ピ・テ・オ印刷